

## 第VII章 総括

### 第1節 デーノタメ遺跡の集落構造と変遷

#### はじめに

デーノタメ遺跡は北本市内を南北に貫流する江川の支流域に所在する。遺跡の面積は約6haで、その地形は集落の広がる台地及び台地の低位面<sup>①</sup>、良好な泥炭層が遺存する低地に分けられる。特に低地では近年まで「デーノタメ」と呼称される湧水点が認められ、遺跡はこの湧水点を起点として扇状に展開している。

本遺跡は昭和40年代の分布調査によって発見され、その後、遺跡内のムロ穴の掘削の際に勝坂式期の土器群が出土し、当地に縄文時代の中期集落が存在することが確認された。

遺跡の発掘調査は平成12年度の第1次調査から平成19～20年度の第4次調査まで4回行っている。調査面積は約3,500㎡で、これにより環状集落の一部と低地の水辺空間の存在が明らかとなった。その後は遺跡の規模と構造を明らかにする目的で、大規模な内容確認調査を3回実施している。

これらの調査により、台地上には縄文時代中期中葉から後期中葉に至る集落が連綿と遺存していること、さらに、遺跡の規模や継続期間が周辺の遺跡よりも卓越していること等が明らかとなった。これらと併せ、遺跡の遺存状態が極めて良好であることも特筆すべき点である。

遺跡の全面積に占める調査面積は約6%にとどまっており、集落を構成する要素を全て明らかにできたわけではない。今後も確認調査を継続する計画であるが、本節ではこれまでの調査成果をもとに、デーノタメ遺跡の集落構造について考える。

#### (1) 集落調査の成果と集落の構造

台地上を対象とする第1次から第3次調査において検出された住居跡は全部で25軒である。このうち、勝坂Ⅲ式期の住居跡は4軒、加曾利EⅠ式期の住居跡は9軒、加曾利EⅡ式期の住居跡は9軒、加曾利EⅢ式期の住居跡は2軒、加曾利BⅠ式期の住居跡は1軒であった。

また、内容確認調査において検出したプランから住居跡と想定される遺構を抽出した結果、勝坂Ⅲ式期が2軒、加曾利EⅠ式期が13軒、加曾利EⅡ式期が3軒、加曾利EⅢ式期が1軒、堀之内Ⅰ式期が11軒、堀之内Ⅱ式期が3軒、加曾利BⅠ式期が5軒である。

集落の大まかな分布は、遺跡の北西から南西部にかけて勝坂Ⅲ式期～加曾利EⅢ式期の住居群が環状集落の様相を呈して展開している。また、低位面が湾入する遺跡の南東部から西部の中期集落のエリアでは、崖線に沿って堀之内Ⅰ式期～加曾利BⅠ式期の後期集落が帯状に展開する。

#### ① 縄文時代中期集落の構造

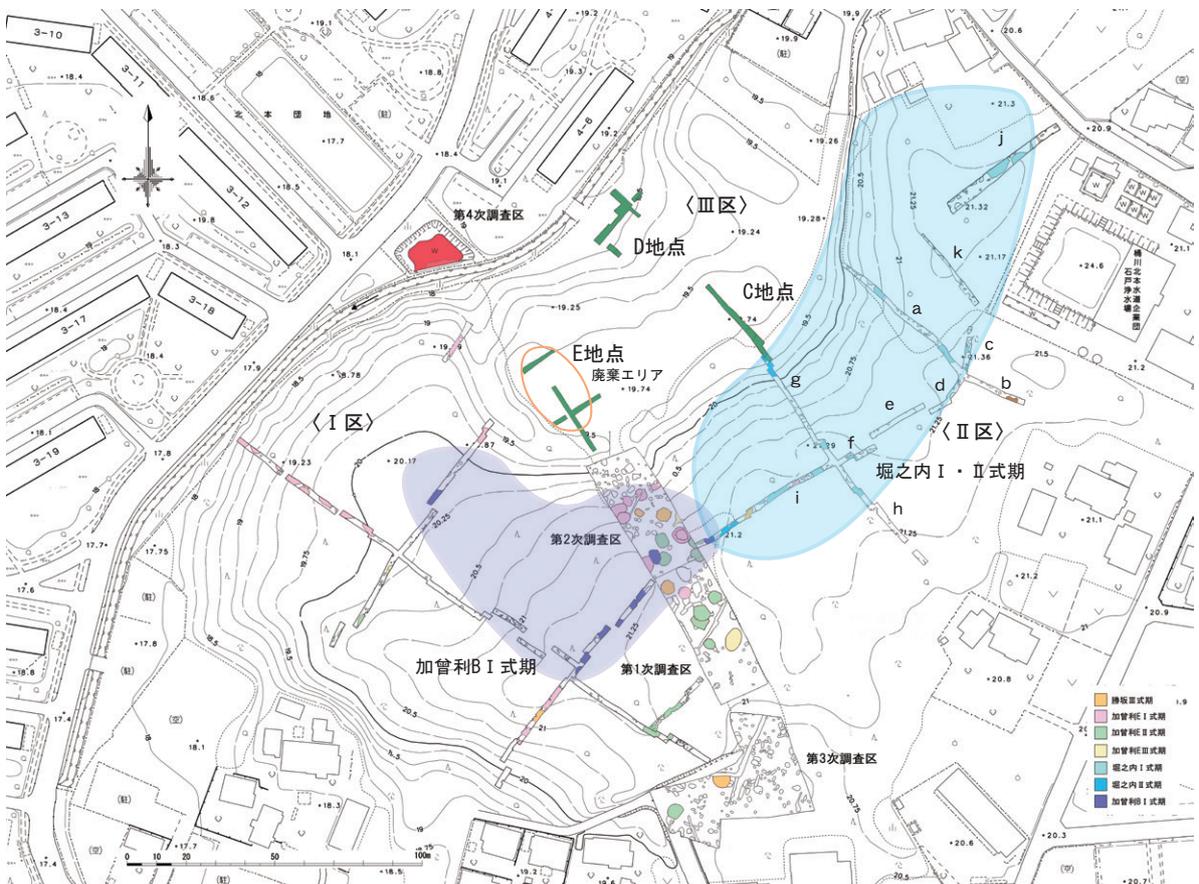
##### a デーノタメ遺跡の集落構造

本遺跡の西部には縄文時代中期の典型的な環状集落が良好に遺存しており、その集落の平面形態は北側の谷に規制されるように展開し、長楕円形にして主軸は北西を指向する。集落は台地の平坦部から北側の斜面にかけて広がり、特に北東の斜面地では台地の縁辺まで住居跡が分布していた。また、住居群の分布は全体的に濃い密度であるが、集落全体では一様でない。

内容確認調査において集落の北西部を対象としたI区A～E、P、Qトレンチでは、住居帯が約60mと幅



第304図 中期集落の構造



第305図 後期集落の構造

広く、プランの切り合いが多く認められ、南西部のⅠ区Gトレンチ及び北東部のⅠ区H、Ⅰ区Iトレンチにおいても同様であった。また、南東部のⅠ区Jトレンチでは住居跡の分布幅が広いものの、住居跡は少なく密度が疎になることが確認されている。

これに対し、集落の中央に設定したⅠ区のK～Oトレンチの調査では、住居状のプランは全く検出されず、このエリアは環状集落の中央広場であると想定される。K～Oトレンチは環状集落の中央部を縦貫するように設定したため、広場の規模は長径約80m、短径約60mと推定されよう。中央広場で検出した遺構はピット群とわずかな土坑にとどまるが、これらの覆土中には縄文中期の遺物を包含していた。また、ピット群と土坑の分布は中央広場の南東部に設定したK、L、Mトレンチに偏在する傾向が看取された。ただし、ピット群の有機的な繋がりは不明で、掘立柱建物等とする確証は得られていない。検出された土坑についても規模や主軸等に統一性がなく、墓坑群として認識することはできなかった<sup>(2)</sup>。

内容確認調査のⅢ区E地点は縄文時代中期の環状集落の北側に位置し、台地直下の低位面の最奥にあたる。ここでは遺物の広い分布域を検出した。分布域の平面形は楕円形を呈すると想定され、その規模は推定で長径約28m、短径約18mである。Ⅲ区E地点の遺物はソフトローム上に堆積する茶褐色土の包含層（2層）から検出され、包含層は上層と下層に分層できた。上層と下層に包含される遺物群は明確な時期差を有しており、上層では加曾利BⅠ、BⅡ式と堀之内Ⅰ、Ⅱ式の土器が主体的に出土した。また、下層では勝坂Ⅲ式、加曾利EⅠ式の土器群が主体であった。なお、下層では一部に諸磯c式土器が少なからず出土しており、台地上には未確認ながら縄文時代前期の遺構群が存在するものと予想される<sup>(3)</sup>。この分布域は遺物の集中具合から土器の廃棄場として認識され、縄文中期と後期の2時期において、このエリアが廃棄場として機能していたものと想定される<sup>(4)</sup>。

なお、土器の廃棄行為は第2次調査においても確認されており、互いに近接する8号、10号、16号住居跡では、住居廃絶後の埋没過程において土器が廃棄されていた。これら住居の構築時期は8号住居跡が加曾利EⅡ式期の古段階、10号住居跡が加曾利EⅠ式期の新段階、16号住居跡が加曾利EⅡ式期の古段階に比定され、少なからず時間差が生じている。このことから、住居跡を土器の廃棄場として利用していた時間幅は、加曾利EⅠ式期～EⅡ式期に至る一時期であることがうかがえた。

#### b 中期の集落の構造と特徴

関東地方では縄文中期後半になると大規模な環状集落が出現する。集落の中央部に広場を設け、周辺に住居跡が分布する形態である。環状集落を構成する要素には、住居群とともに貯蔵施設や祭祀場、墓域等の他、遺物の廃棄エリアや生業にかかわる施設も併せて存在する。

集落の規模は地形や人口といった条件に左右され、同時期、同地域内にはしばしば大規模な集落と小規模な集落を併存する。その傾向として、大規模集落は長期の継続性が認められるが、小規模集落では継続期間が短い傾向にある。

こうした環状集落のあり方は縄文時代中期の典型的な集落形態であり、デーノタメ遺跡はまさにこうした環状集落として位置付けられる。その規模は長径約210m、短径約160mを測り、住居の軒数は250軒を超えると想定される。後述するように、中期集落に限ればその継続期間は少なくとも勝坂Ⅲ式期～加曾利EⅢ式期にわたっており、これらの状況からデーノタメ遺跡は大規模な拠点集落として位置付けることができる。

これまでの調査によって居住域、生業、廃棄、祭祀等の様相が明らかとなり、その規模が概ね確定できたが、今後は集落における墓域や貯蔵エリア等を特定していくことが課題である。

## ② 縄文時代後期集落の構造について

### a デーノタメ遺跡の後期集落

デーノタメ遺跡の後期集落は、第2次調査及び内容確認調査第Ⅰ区～Ⅲ区において検出されている。後期集落の萌芽は遺跡の北東部に始まる。Ⅱ区のj、kトレンチで検出したプランは堀之内Ⅰ式期の遺物を包含する。その後、集落はここから西方へのび、住居群は概ね台地の崖線に沿って広がっていく。また、遺跡の北東部に設定したⅡ区のa、gトレンチ間では、南北方向に浅い谷が貫入し、a、gトレンチでは谷筋に沿う住居跡のプランを検出した。さらに、Ⅱ区d～fトレンチでは谷の谷頭部に設定したが、住居状のプランは確認できておらず、集落の空闲地になっていたと想定される。

中期の環状集落の東部に位置するⅡ区iトレンチでは、加曾利BⅠ式期の遺構群が検出される。この付近の地形は段丘状の低位面が深く台地に湾入するエリアで、台地側からみると、低位面に向かって広く開口する様相を呈する。中期の環状集落に設定した内容確認調査のⅠ区H、IトレンチとDトレンチでは加曾利BⅠ式期の住居群が増加しており、後期中葉の集落がこの湾入部に沿って、環状集落の中央広場のエリアへ展開する。また、第2次調査では加曾利BⅠ式期の11号住居跡が中期の住居跡群を壊して構築されており、付近では覆土中に加曾利BⅠ式の土器を包含する土坑群が併せて検出されている。土坑群の検出位置は低位部に接する台地の裾部で、周辺を加曾利BⅠ式期の集落に囲まれており、規模や形態は様々であった。集落に伴う土坑群として捉えることができる。

これらのことから、縄文時代後期の集落は遺跡の北側に湾入する台地の低位面を望むように帯状に展開する。その規模は集落の東端と西端を繋いだ弦長で約270mに及び、住居跡の分布は概ね東側の堀之内Ⅰ式期と西側の加曾利BⅠ式期に分けられる。

なお、内容確認調査で検出された土器の廃棄エリアは、台地の低位面が深く湾入するエリアで、周囲には加曾利BⅠ式期の住居群が囲んでいる。この廃棄エリアは縄文中、後期の集落にそれぞれ共有するが、集落との位置関係をみると、中期集落では東側の外縁部、後期集落では集落が囲む北側の開口部となり、集落に対する廃棄場の位置関係はそれぞれ異なっている。

### b 周辺の遺跡との比較

デーノタメ遺跡におけるこれまでの調査で検出された後期の遺構、遺物群は堀之内Ⅰ式期～加曾利BⅠ式期を主体とする。次に大宮台地における他の遺跡の調査例を参考に、本遺跡の後期集落の展開について考えてみたい。

さいたま市の大木戸遺跡（金子2018）では、堀之内Ⅰ式期～加曾利BⅡ式期の住居群が35軒検出されている。集落は北向きの舌状台地上に環状をなして展開し、この主体をなす集落から一部が派生すると、台地の西側から貫入する小支谷に沿って一群が弧状に展開するようになる。また、住居群が囲む谷では土坑群が検出されている。主体となる台地上の環状を呈する一群では、堀之内Ⅱ式期～加曾利BⅡ式期の住居群が構築されていたが、小支谷を囲む一群は堀之内Ⅰ、Ⅱ式期の住居群で、加曾利BⅠ式期へ展開しないことから、集落は後期前葉で終焉する。

さいたま市の真福寺貝塚（中村他2015）の住居群は、堀之内Ⅰ式期～安行Ⅱ式期を主体とする。遺跡は北東部に窪地を有し、南西部はこの窪地を囲むように環状盛土遺構が弧状に展開するものと想定されている。住居群は盛土の範囲から検出され、大木戸遺跡と同様に弧状の様相を呈している。

桶川市の高井東遺跡（吉川1990）では加曾利BⅠ式期～安行Ⅱ式期に至る住居群が検出されている。住居跡は比高差1mほどの窪地を中心に弧状に展開する形態で、報告書の記載では環状盛土遺構の存在を確認で

きないが、住居跡及び土坑群のあり方は窪地を意識していることが明らかである。また、窪地から遺構は検出されず、住居跡と土坑の分布エリアは重複した関係となっている。

これらの事例から理解できることは、縄文後期の集落は近接する谷や窪地といった低地を強く志向しているということである。谷や窪地は集落から低地へ至る動線として認識され、住居群はこうした斜面地を囲むように展開していた。

一方、デーノタメ遺跡の後期集落は他に例のないほど大規模である。住居跡は弧状の地形に沿いながら帯状に展開するが、これら住居跡の分布はやはり北側の谷や低位面への指向をうかがうことができる。また、住居群と併せて検出された土坑は北向きの斜面地に分布し、集落が開口する台地の裾部に集中していた。直下の低位面には前述した遺物の廃棄場及び後述する水場を中期集落と共有しており、これらの点についても後期集落の構造上の特徴といえる。

## (2) 出土土器と集落の変遷

### ① 出土土器の分類

デーノタメ遺跡では縄文時代中期中葉から後期中葉にわたって集落が連綿と継続していた。こうした集落の変遷を明確にするため、これまでの調査で出土した土器を分類したところ、ほぼ16期にわたることが明らかとなった。各期の土器は第306～309図に代表的な出土土器を集成し、以下、各時期の土器とこれらを伴う遺構について整理する。

#### I期 勝坂Ⅰ式：新道式期（第306図1）

三角押文を文様要素として取り入れる段階で、1は第4次調査のIb層中より出土した鉢形土器である。これまでにこの段階の住居跡は検出されていない。

#### Ⅱ期 勝坂Ⅱ式：藤内式期（第306図2、3）

隆帯脇に連続した爪形文を施す土器である。2は第2次調査の74号土坑から出土した浅鉢形土器である。口縁部が肥厚し、肉厚状の区画文脇に爪形文を施す。3は半肉彫状のパネル文の土器である。この時期の住居跡は検出されていない。

#### Ⅲ期 勝坂Ⅲ式：井戸尻式期（第306図4～16）

隆帯上に連続した爪形文や刺突文を施し、その隆帯脇の沈線が文様帯を構成する土器群である。4～7（第2次調査7号住居跡）、10～12（第1次調査8号住居跡）はそれぞれ住居跡の一括資料である。13、14は第2次調査5号住居跡の炉跡出土資料である。8、9は第4次調査の2号クルミ塚出土の資料で、いずれも三叉文を描く。15は第3次調査の2号住居跡から出土した炉体土器で、口縁部文様帯のモチーフはシンプルだが、屈曲部の肥厚部に爪形文を施す。16は第4次調査のⅡ層から検出された資料である。

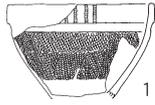
#### Ⅳ期 加曾利EⅠ式古段階（第306図17～22）

キャリパー形土器が出現する段階。胴部はやや直線状で長胴気味に立ち上がる。口縁部は横S字状文等が横位に展開し、地文には燃糸文を施す。

17（第2次調査2号住居跡）と18（第1次調査7号住居跡）を代表的なものとして掲載した。18は大型の深鉢形土器で燃糸文を全面に施す。19、20は渦巻と十字の隆帯文を施す。21は横S字状文が明瞭で、頸部に地文を残す。

#### Ⅴ期 加曾利EⅠ式新段階（第307図23～35）

口縁部文様帯から派生する大型把手を有する土器が出現する段階。また、深鉢形土器は口縁部と胴部文様



4次 Ib層

I 期

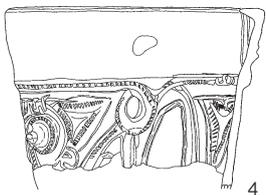


2次 SK74

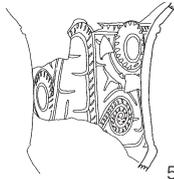


3

Ⅱ期



4



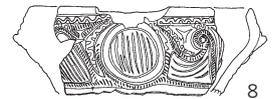
5



6



2次 SJ7



8

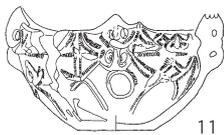


9

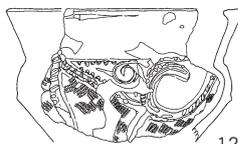
4次 2号クルミ塚



10

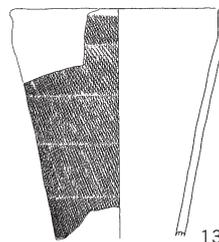


11



12

1次 SJ8

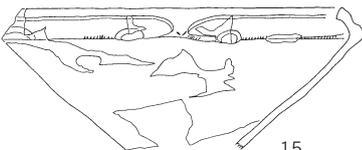


13



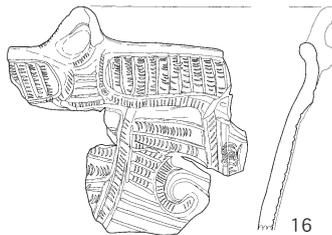
14

2次 SJ5



15

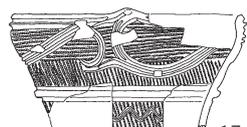
3次 SJ2



16

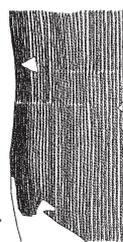
4次 Ⅱ層

Ⅲ期

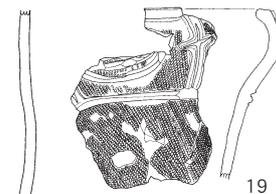


17

2次 SJ2

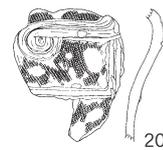


1次 SJ7



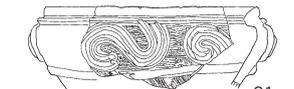
19

Ⅳ期



20

2次 SK74



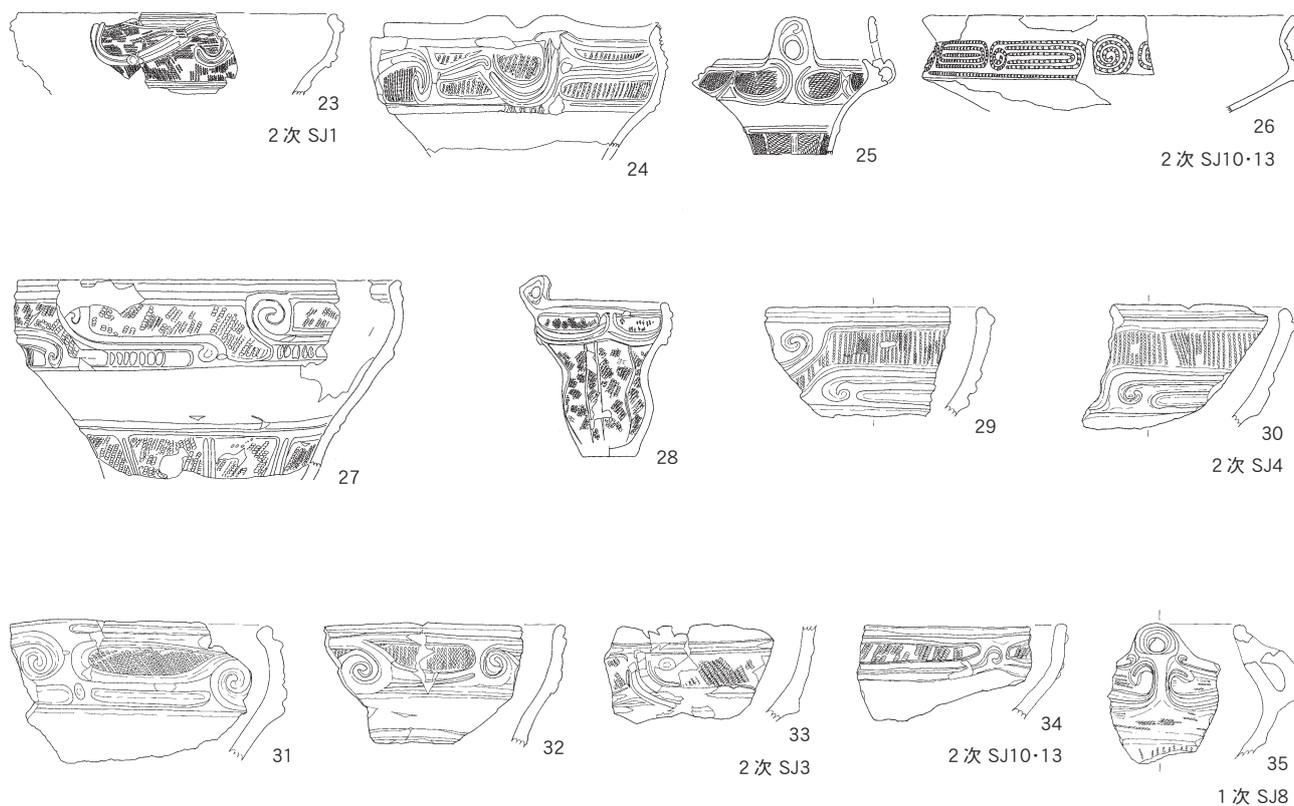
21



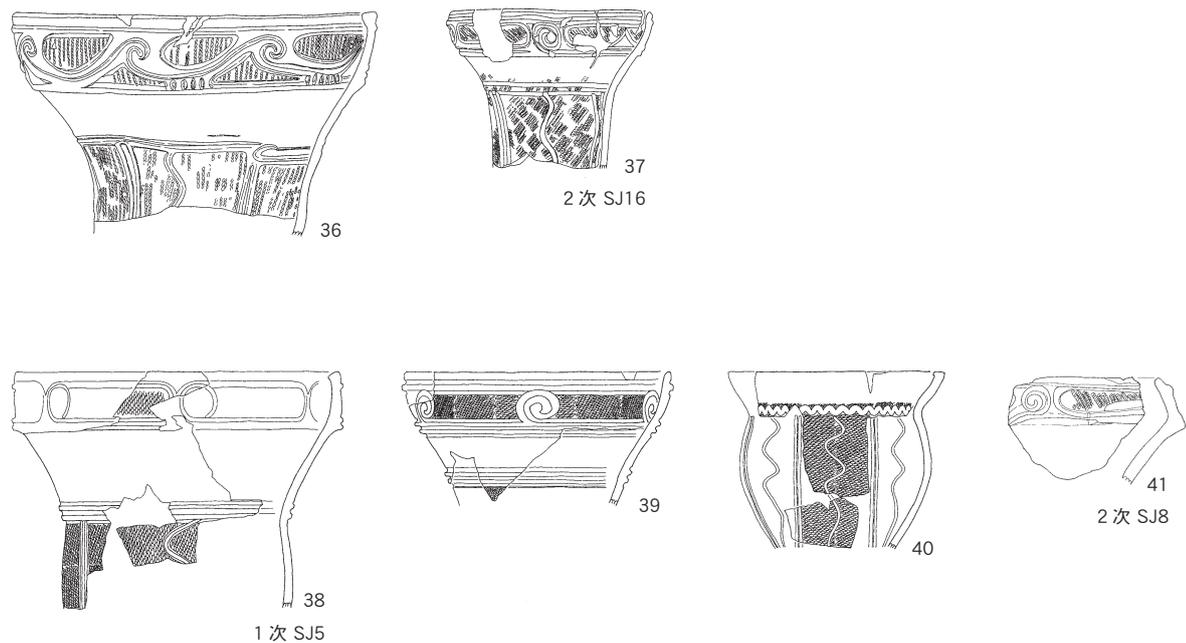
22

2次 SJ10・13

第306図 デーナタメ遺跡の出土土器集成図(1)

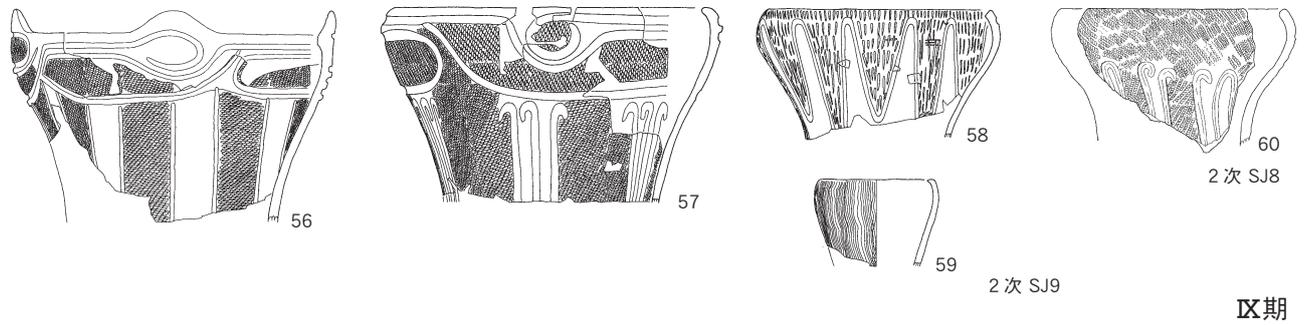
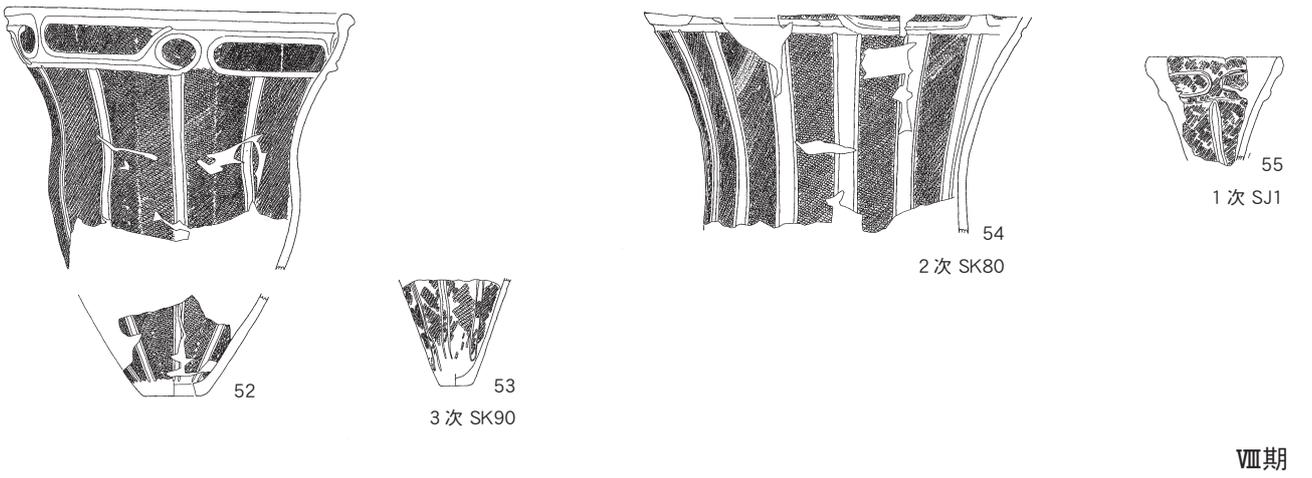
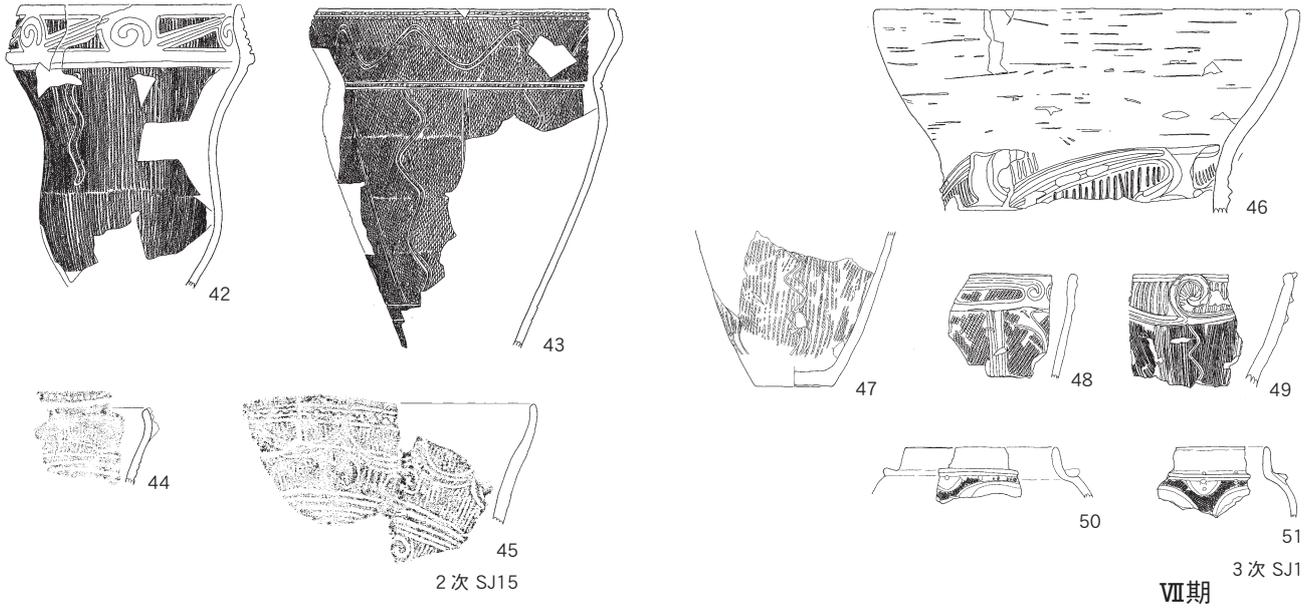


V期



VI期

第307図 デーノタメ遺跡の出土土器集成図(2)



第308図 デーノタメ遺跡の出土土器集成図（3）



63

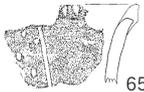
内Ⅱ a・cトレンチ



64

内Ⅰ sトレンチ

XI 期



65

内Ⅱ a・cトレンチ



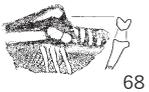
66



67

内Ⅰ gトレンチ

XII 期



68



69



70



71

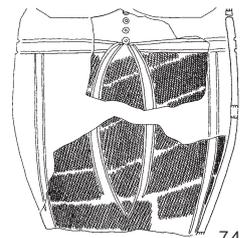


72



73

内Ⅲ D地点下層



74

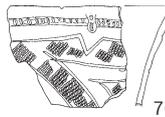
内Ⅱ aトレンチ

XIII 期



75

内Ⅱ gトレンチ



76

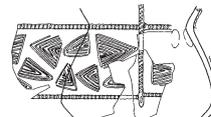
2次 SK32



77

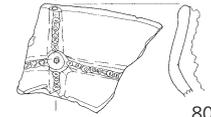
内Ⅱ a・cトレンチ

78



79

内Ⅱ gトレンチ



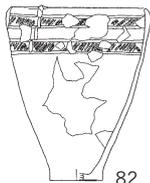
80



81

内Ⅲ cトレンチ

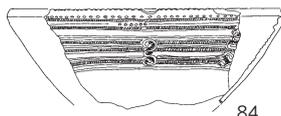
XIV 期



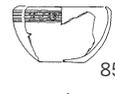
82



83

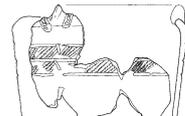


84

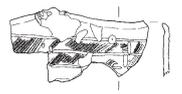


85

2次 SJ11



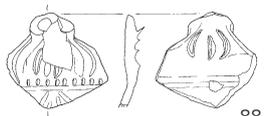
86



87

内Ⅰ H・Iトレンチ

XV 期



88

2次 SJ11



89

内Ⅲ E地点



90

2次 SK39



91

2次 SK40



92

内Ⅲ D地点上層



93

内Ⅲ D地点上層



94

2次 SJ11



95

内Ⅰ H・Iトレンチ



96

内Ⅰ Dトレンチ

XVI 期

第309図 デーノタメ遺跡の出土土器集成図(4)

帯の間に広い頸部無文帯を有する土器が主体となる。

23(第2次調査1号住居跡)、24~26(同10・13号住居跡)、27~30(同4号住居跡)を代表例として掲載した。23はモチーフの展開がⅣ期の21に似るが、口縁部無文帯の有無によって当段階とした。また、26は浅鉢形土器で、口縁部文様帯は角押し文を施すが、渦巻文と楕円形区画文をモチーフとするため当段階に含めた。31~33は第2次調査3号住居跡の柱穴上から検出された。34は浅鉢形土器、35は大型の中空突起である。

#### Ⅵ期 加曾利Ⅱ式古段階(第307図36~41)

口縁部文様帯の幅が狭くなり、モチーフは渦巻文と区画文が交互に連続して展開する。頸部無文帯を有する土器が健在で、曾利Ⅱ式土器を伴出する。

36、37(第2次調査16号住居跡)、38(第1次調査5号住居)、39~41(第2次調査8号住居跡)を掲載した。36は連結する渦巻文が入り組み状に展開する。37は区画文内に沈線で波状文を描き、区画を分断する。39、40は炉体土器で、曾利Ⅱ式と共伴する。41は浅鉢形土器である。

#### Ⅶ期 加曾利Ⅱ式新段階(第308図42~51)

口縁部文様帯の幅はさらに狭くなり、頸部の無文帯が消失する。その結果、胴部文様帯と口縁部文様帯は連結し、隆帯等による区画が明確な段階である。連弧文土器を伴う遺構が多くなる。

42~45(第2次調査15号住居跡)、46~51(第3次調査1号住居跡)の資料を掲載した。42は断面が矩形の隆帯による区画文である。43の曾利Ⅱ式土器と44、45の連弧文土器が共伴する。加曾利Ⅱ式系の土器は48のように磨り消しにより懸垂文を描く。46は曾利系の炉体土器である。49も曾利系の深鉢形土器で、50、51の有孔罎付土器が共伴する。

#### Ⅷ期 加曾利Ⅲ式古段階(第308図52~55)

口縁部文様帯と胴部文様帯の境界が曖昧となり、一部では胴部からモチーフが貫入する段階である。懸垂文は幅の広い磨消文となる。

52、53(第3次調査90号土坑)、54(第2次調査80号土坑)、55(第1次調査1号住居跡)を掲載した。

#### Ⅸ期 加曾利Ⅲ式新段階(第308図56~60)

口縁部文様帯の区画が大きく崩れて連弧状となり、胴部文様帯の貫入が顕著となる。懸垂文に蕨手文を描くようになる。また、口縁部文様帯をもたない土器が出現する。

56~59は第2次調査9号住居跡から出土した一括資料である。58は綾杉状の短沈線が区画内を充填する曾利系のモチーフである。60は第2次調査8号住居跡の覆土中から検出された蕨手文を描く深鉢形土器である。

#### Ⅹ期 加曾利Ⅳ式段階(第308図61、62)

遺構は確認されていないが、内容確認調査及び第4次調査の砂道跡から出土した資料を掲載した。61は深鉢形土器の口縁部片で、62は胴部片である。モチーフは微隆起線により口縁部へ貫入する弧状の文様と縄文帯による懸垂文である。

#### Ⅺ期 称名寺Ⅰ式段階(第309図63、64)

遺構は確認されていないが、内容確認調査により土器片を検出している。63は深鉢形土器の突起部である。64は縄文帯によるJ字文の端部が描かれる。

#### Ⅻ期 称名寺Ⅱ式段階(第309図65~67)

遺構は確認されていないが、内容確認調査により土器片が検出されている。いずれも胴部文様帯に平行する沈線文を描く。65、66は列点が充填されている。

#### Ⅼ期 堀之内Ⅰ式段階(第309図68~74)

深鉢形土器の口唇部に沈線を施し、胴部が直線的に立ち上がる段階である。

71は連続する円孔を口唇部に施す。72は刻みを有する隆帯による懸垂文である。73は粗製土器で、74のように綱取Ⅱ式の深鉢形土器も検出される。

#### XIV期 堀之内Ⅱ式段階（第309図75～81）

口縁部が朝顔形に外反する深鉢形土器を主体とする段階である。「8」字隆帯を口縁部に貼付し、これを起点として横位の連続刺突文を有する隆帯が廻る。胴部には縄文帯による幾何学文を描く。79～81は注口土器である。

#### XV期 加曾利BⅠ式段階（第309図82～87）

精製の深鉢形土器で、口唇部に刻みをもち、やや内屈する。また、波状を呈する口縁は3単位である。浅鉢形土器の内面は縄文帯により文様を描く。

82～85は2次調査11号住居跡出土の一括資料である。また、86、87（内容確認調査Ⅰ区のH、Ⅰトレンチ）の深鉢形土器は口唇部が内屈する。

#### XVI期 加曾利BⅡ式段階（第309図88～96）

深鉢形土器に付く突起が発達し、縦位の対向する弧線文を施す。胴部には縄文帯が大きく変化し、半円形の文様帯や「つ」字状の文様帯となる。また、斜位の集合沈線を矢羽状に施す。

88～92は精製土器で、93～96は粗製土器である。90、91はそれぞれ第2次調査の39、40号土坑から検出された。

### ② デーノタメ遺跡の中期集落の展開

ここでは前項の土器分類を基にして、第1次～第3次調査において検出された住居跡及び内容確認調査の成果を合わせ、縄文時代中期の遺構の変遷と分布について整理する。

#### Ⅲ期の住居跡（第310図）

環状集落の萌芽期にあたり、台地上では第1次調査8号住居跡、第2次調査5号、7号住居跡、第3次調査2号住居跡の4軒が確認されている。また、内容確認調査においてはⅠ区Gトレンチ、Ⅱ区iトレンチにおいて住居のプランが検出されている。住居跡の分布状況は環状集落の北西部及び南東部、南部に偏在する。それぞれ中央広場を挟んで対峙するように出現しており、すでに環状集落の萌芽を示すような配置を示す。

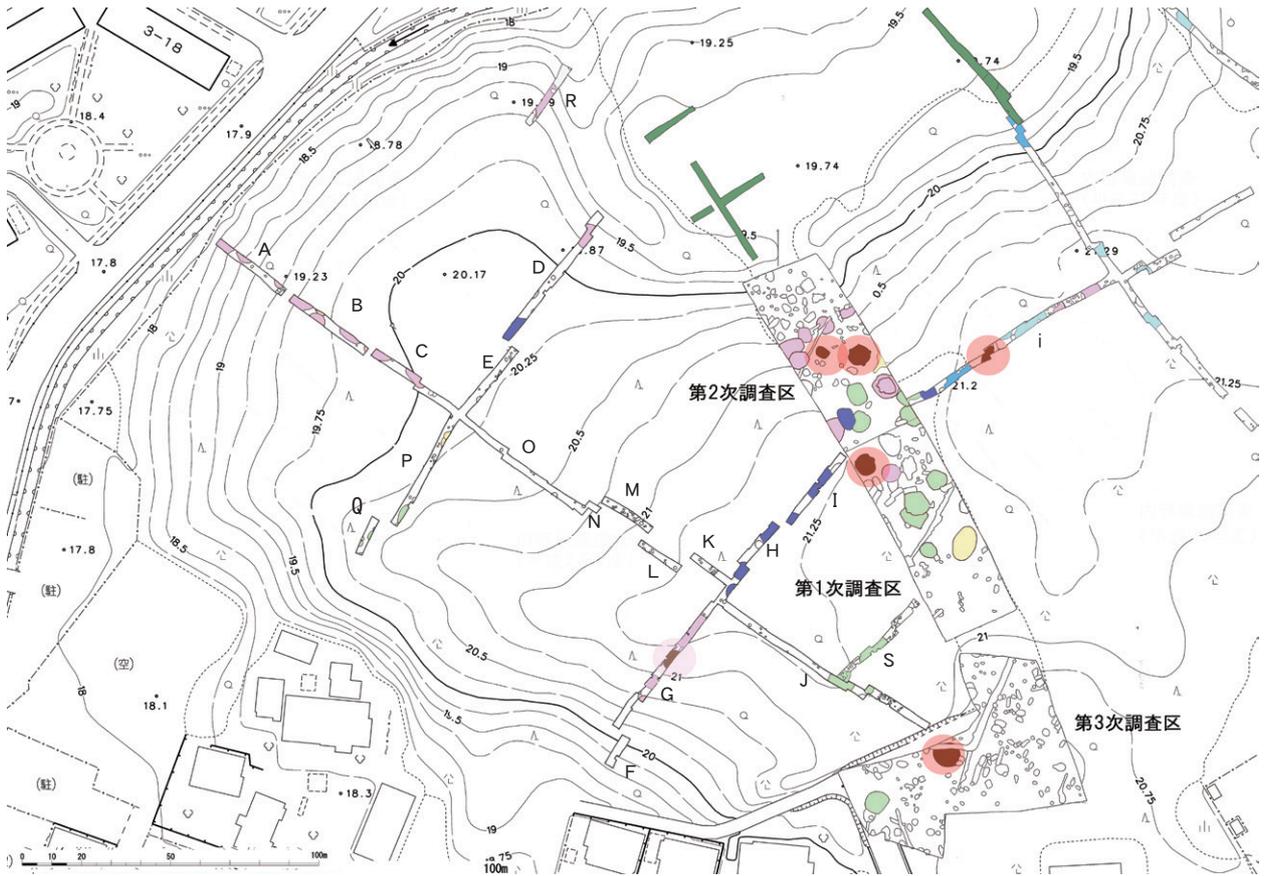
#### Ⅳ期・Ⅴ期の住居跡（第311図）

第1次調査7号住居跡、第2次調査2号住居跡の2軒は加曾利EⅠ式期古段階にあたり、第2次調査1号、3号、4号、6号、10号、12号、14号住居跡は加曾利EⅠ式期新段階に帰属する。また、内容確認調査ではⅠ区A～Dトレンチから8軒、Gトレンチから2軒が検出されている。また、Ⅱ区iトレンチにおいても2軒を確認した。

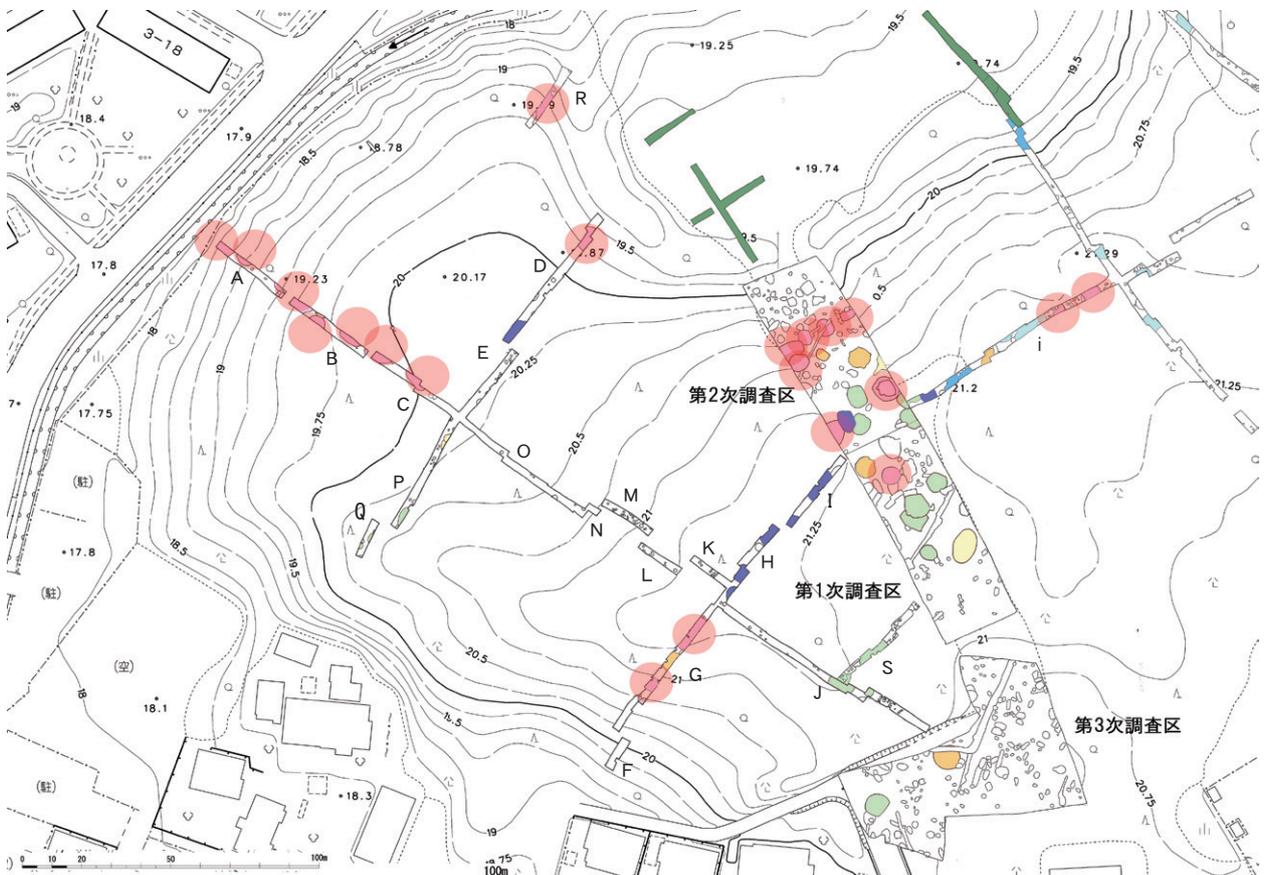
上記の住居跡はほぼ環状を示すような配置状況がうかがえ、集落の北東部に分布が集中する傾向がある。

#### Ⅵ期・Ⅶ期の住居跡（第312図）

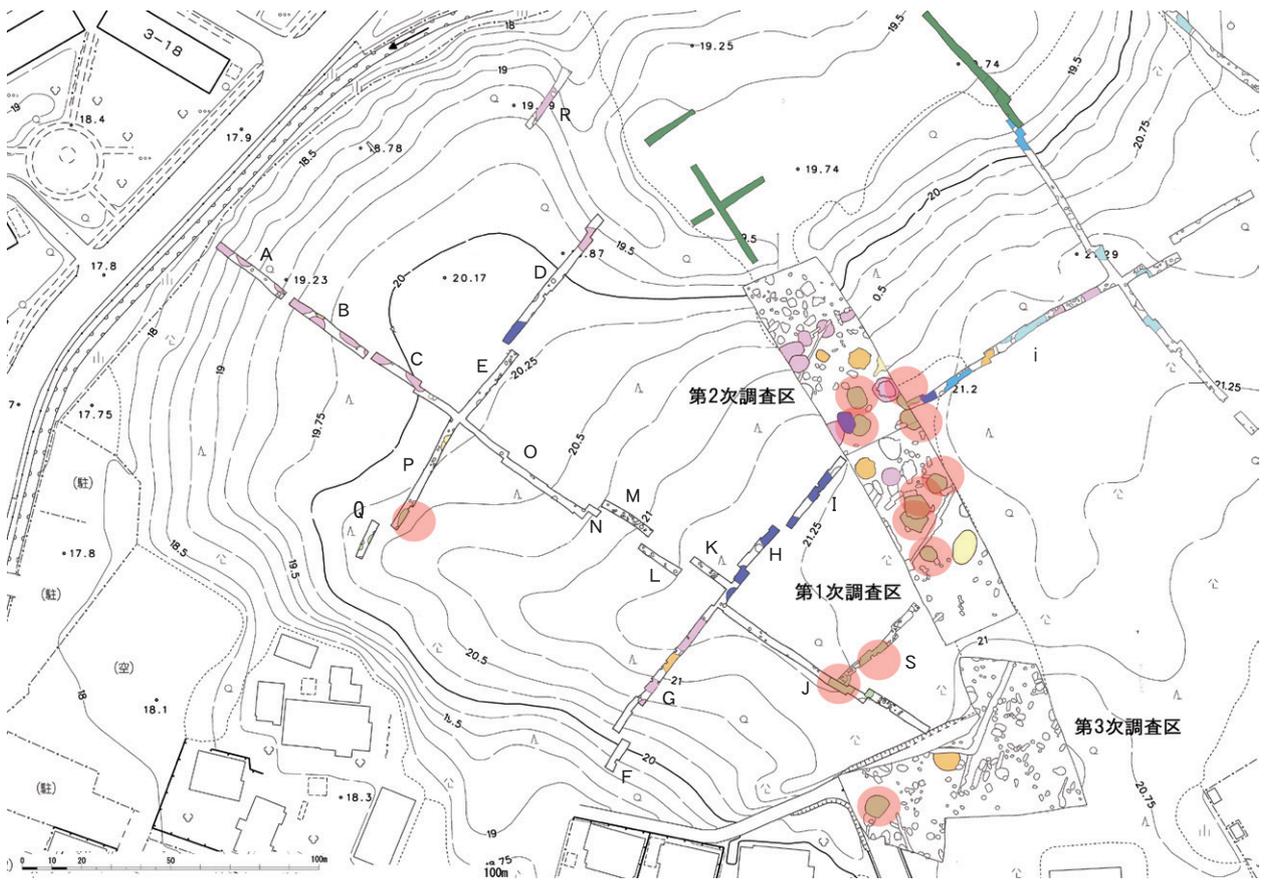
第1次調査5号住居跡、第2次調査8、16号住居跡の3軒は加曾利EⅡ式期の古段階に相当する。第1次調査3～6号住居跡、9号住居跡（第2次調査15号住居跡）、第3次調査1号住居跡の6軒は加曾利EⅡ式期の新段階に帰属する。内容確認調査においては、Ⅰ区Qトレンチから土坑群、J、S、Pトレンチにおいては住居跡のプランを3軒確認した。遺構の分布状況については、集落の南東部から南西部にかけて集中する傾向がうかがえる。このことから、加曾利EⅠ式期とEⅡ式期の分布域は一部を重複しながら、環状集落



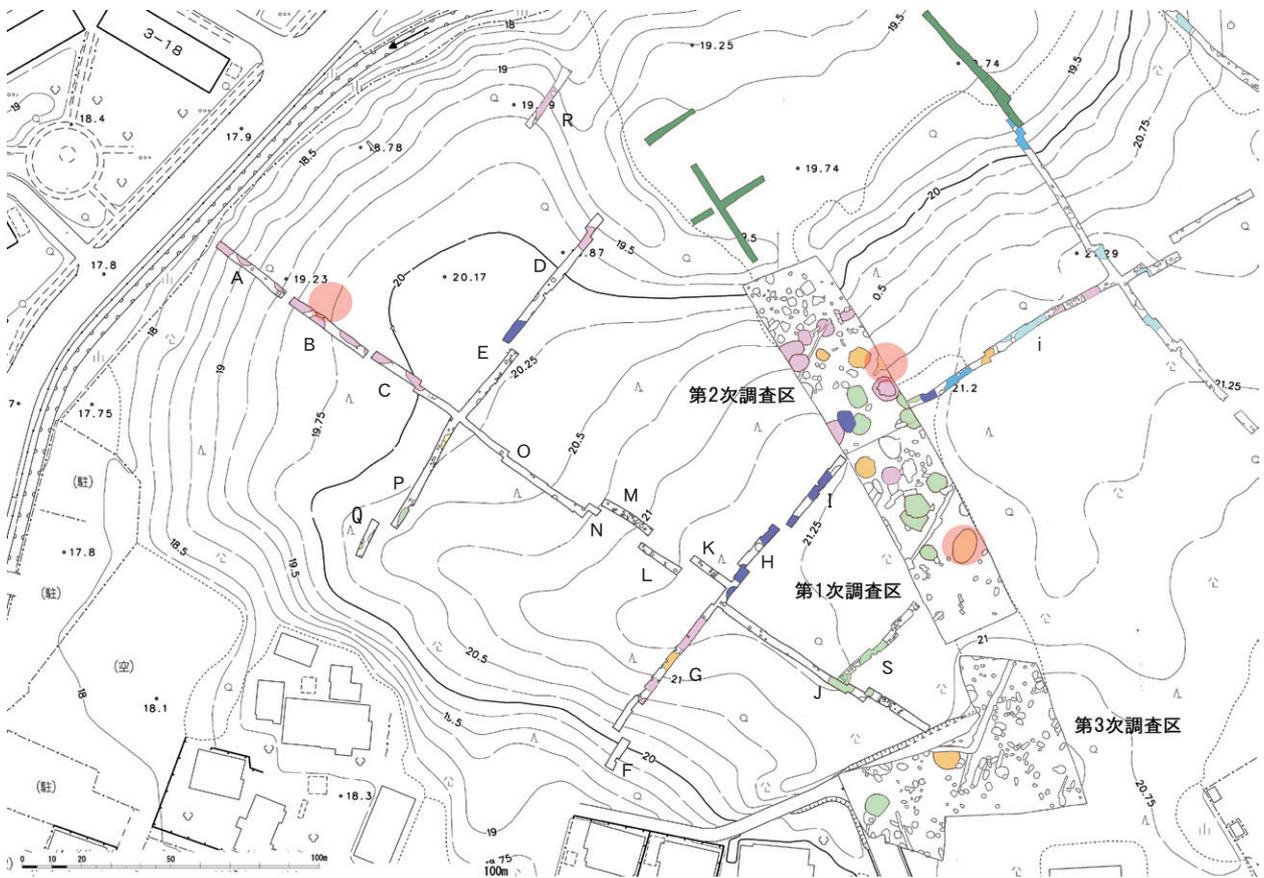
第310図 III期の住居跡



第311図 IV期・V期の住居跡



第312図 VI期・VII期の住居跡



第313図 VIII期・IX期の住居跡

の北部と南部で分かれて分布する。

#### Ⅷ期・Ⅸ期の住居跡（第313図）

住居跡が急速に減少する時期で、第1次調査1号住居跡は加曾利EⅢ式期の古段階に相当する。また第2次調査9号住居跡は柄鏡形住居で、加曾利EⅢ式期新段階である。この他、第2次調査74号土坑、第3次調査90号土坑では単独の埋甕、伏鉢が検出されている。ともに加曾利EⅢ式の古段階である。内容確認調査においては、Ⅰ区Bトレンチから住居跡が1軒、Eトレンチより土器の廃棄土坑が1基検出されている。遺構の配置状況は、環状集落全域に疎らに広く分布する傾向を示す。

#### X期の遺構

これまでの調査で住居跡は確認されていない。遺物は第4次調査砂道跡及び内容確認調査のⅠ区Cトレンチから検出されている。

上記で整理したように、デーノタメ遺跡の中期集落は勝坂Ⅲ式期～加曾利EⅢ式期にわたって継続する。集落は環状を呈し、中央広場では住居を建てることなく、おそらく無遺構のオープンスペースとして維持しながら、その周辺部に住居を配置することを徹底している。

中期集落の消長を概観すると、勝坂Ⅲ式期では環状集落の北西部及び南東部、南部の3地点に数軒規模の住居群が配置される。その後、加曾利EⅠ式期には住居数が急増して環状集落の全域に及ぶようになるが、住居の分布は北部に偏在する。また加曾利EⅡ式期においても住居は増加傾向が維持され、集落の南部に偏った分布傾向を示す。続く加曾利EⅢ式期では、急速に住居等の遺構が減少し、分布の偏りはみられない。加曾利EⅣ式期はこれまでに明確な遺構は検出されておらず、わずかな遺物の出土にとどまるため、さらに遺構は減少し、その分布は環状集落の一地点あるいは小規模に分散すると想定される。

縄文中期終末における集落の衰退については不明な点が多い。今後は縄文中期後半から後期初頭における集落の様相を明らかにすることが課題である<sup>(5)</sup>。

### ③ デーノタメ遺跡の後期集落の展開

後期集落の展開を概観すると、集落の萌芽は遺跡の北東端部における堀之内Ⅰ式期の住居群である。その後、集落は南南西へ移動し、堀之内Ⅱ式期、加曾利BⅠ式期においては中期集落が広がる遺跡の西部エリアまで進出する。

#### XI、XII期の住居跡

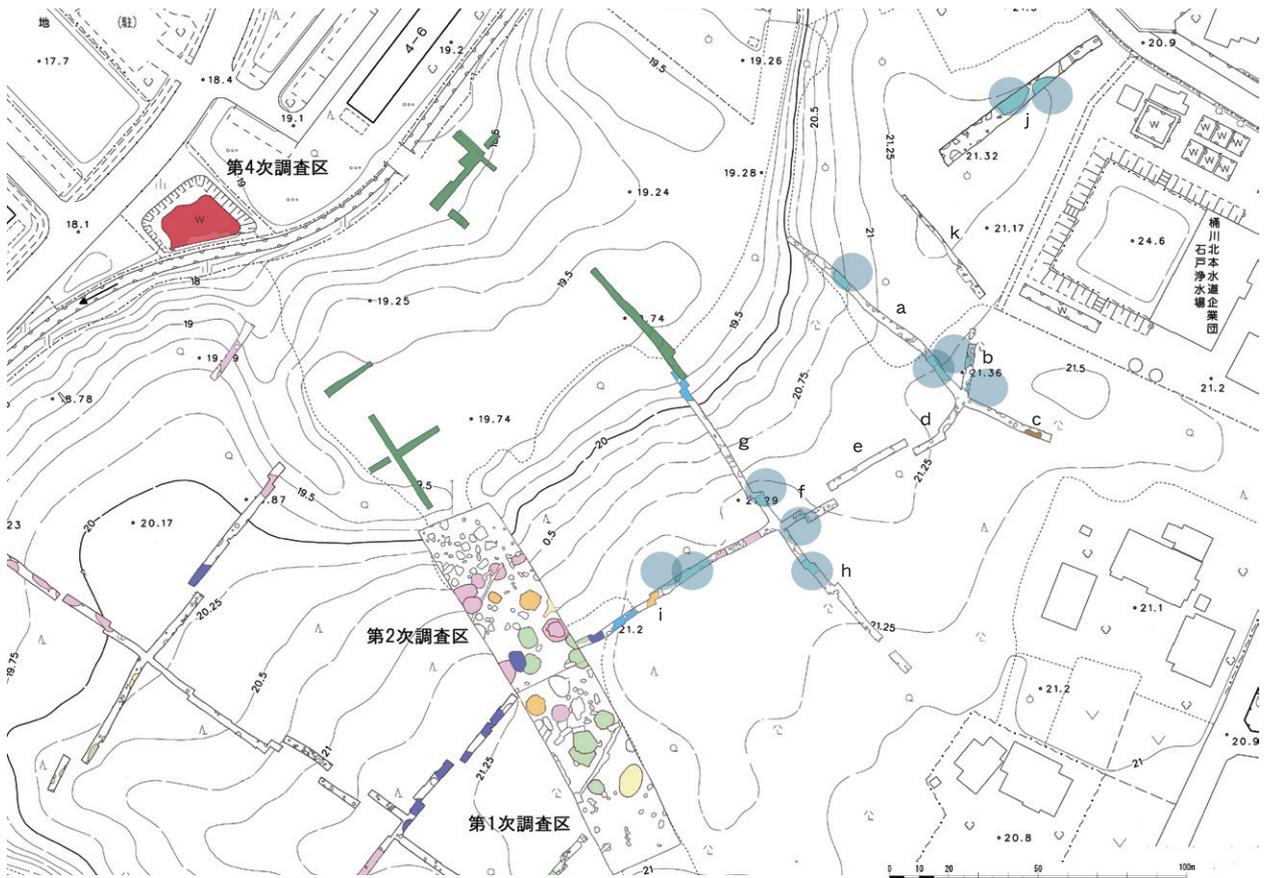
称名寺式期の住居跡はこれまでに確認されていないが、土器資料が内容確認調査によって検出されている。出土位置はⅡ区a、cトレンチとⅠ区Sトレンチである。それぞれのトレンチ付近に遺構が存在していると仮定した場合、分布密度は疎らであるが、広範囲に分布するものと予想される。

#### XIII期の住居跡（第314図）

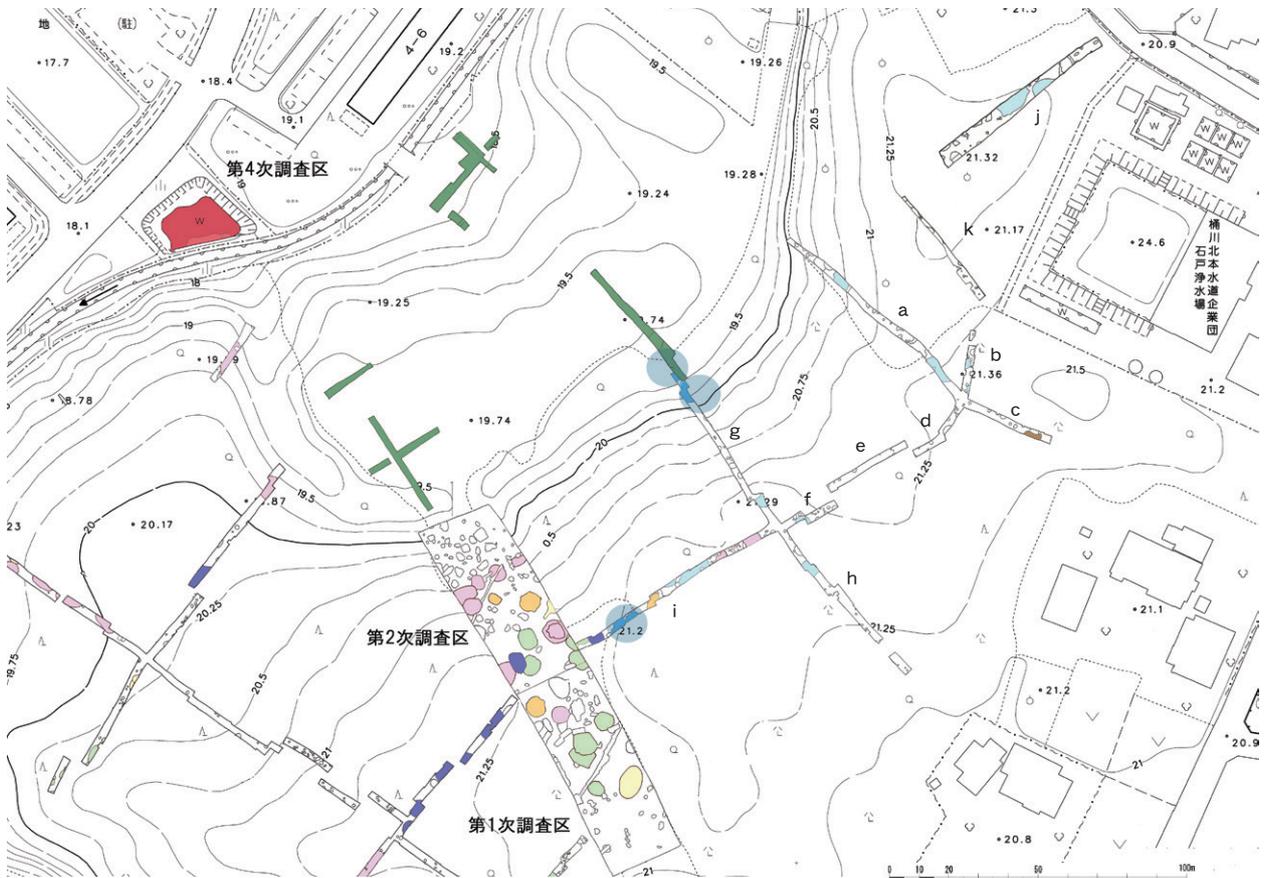
この時期の住居跡は内容確認調査Ⅱ区のa、b、f～jトレンチにおいて住居状のプランが11軒検出され、いずれも切り合い関係のない住居跡である。遺構の分布状況は台地に湾入する低位面に沿って展開する他、この低位面を貫入する小支谷を避けるように分布する。

#### XIV期の住居跡（第315図）

内容確認調査のⅡ区gトレンチ北端部とiトレンチ西部で、住居のプランを合わせて3軒検出している。また、gトレンチでは注口土器の埋納土坑も確認した。



第314図 XIII期の住居跡



第315図 XIV期の住居跡



第316図 XV期の住居跡

この時期の住居跡はⅢ期の住居群の南西部に隣接するように分布しており、このエリアの西部では、中期環状集落の住居帯と重複する。

#### ⅩⅤ期の住居跡（第316図）

第2次調査11号住居と内容確認調査のⅡ区 i トレンチ I 区 H、I、D トレンチにおいて6軒の住居跡のプランを検出している。

遺構の分布はⅢ期、ⅩⅤ期の遺構群の西側に隣接し、台地に湾入する低位面を望むように大きく弧状に展開する。集落は中期環状集落の中央広場へ進出する。

#### ⅩⅥ期の住居跡

第2次調査の後期集落に伴う土坑群から遺物が検出されている。ただし、これまでに住居跡等の遺構は検出されていない。

以上のように、デーノタメ遺跡の後期集落は遺跡の北東端部において堀之内Ⅰ式期の集落が発生し、そのまま低位面を望む地形に沿って帯状に南西部へと推移する。堀之内Ⅱ式期、加曾利Ⅱ式期においては中期集落内の中央広場部へ進出するが、中期集落が広がる北西部の台地縁までは集落は広がらず台地の平坦部にとどまる。また南側の支谷方向にも集落は広がらず、あくまで台地の低位面に対する志向が看取される。

今後の課題としては、中期終末から後期初頭の集落動向を明らかにすることである。特に中期の集落から後期集落への展開にあたっては、西部の環状集落エリアから北東端のエリアへ唐突に移動しており、後期集落の形成は遺跡の東側から新たに始まっているが、縄文中期末から後期初頭に至る集落の様相を把握しきれていないため、これを明らかにすることが課題である。

### (3) デーノタメ遺跡の集落の特徴

本遺跡では大規模な縄文時代中期と後期の集落が近接、または重複して形成されており、中期集落は長径210m、短径160mで、中央部に広場を設ける環状集落であった。一方、後期集落は弦長270m幅60mの住居帯が带状に展開しており、中期集落と後期集落の変遷をたどることができる。繰り返し述べてきたように、中・後期の集落は極めて大規模で、遺跡そのものの遺存状態も極めて良好である。また、後述するように中期及び後期の水場空間が、これらの集落と近接して遺存することも、極めて注目すべき点といえよう。

集落は縄文時代中期中葉から後期中葉まで続くいわゆる「長期継続型集落」に分類され、検出された住居跡の帰属時期は、勝坂Ⅲ式期～加曾利 B I 式期までの約1,200年間にわたることが明らかになっている。改めて集落の変遷をたどると、中期の環状集落は萌芽期から環状の形態を意識した住居の配置がなされ、その後、加曾利 E I 式期～EⅢ式期において環状集落の形態が完成するが、続く中期末から後期初頭において、遺跡は急激に衰退していく。その後、後期前葉になると再び集落の形成が遺跡の北東部から始まり、中期集落の西側エリアまで带状の大規模集落が展開するという集落の変遷を明瞭に捉えることができた。

このため、本遺跡では中期から後期へと変化する当時の古環境や集落構造、生業のあり方を、ほぼ連続した時間軸で捉えることが可能であり、これらの縄文社会の具体的な様相を明らかにできるという点で稀有な遺跡といえるのである。

## 第2節 デーノタメ遺跡と周辺の集落

### はじめに

縄文時代中期の集落においては、大規模な環状集落を拠点集落とする解釈がある。集落の規模が大きく、中央に広場を設け、居住域を計画的に配置し、継続期間が長期にわたる形態が典型的な事例とされる。また、集落内及び周辺に廃棄場や水場、墓域、貯蔵施設、祭祀場等を兼ね備えることも大きな条件である。

前節でみたように、デーノタメ遺跡はこうした拠点集落としての条件を概ね備えており、当地域を代表する大規模な環状集落と認識される。ただし、遺跡周辺には至近に同規模の集落が複数併存しており、本遺跡のみが大規模集落として突出していたわけではない。

そこで、ここではまずデーノタメ遺跡と周辺の縄文中期集落の規模や継続期間等について比較を行い、デーノタメ遺跡の集落としての特徴を捉えてみたい。

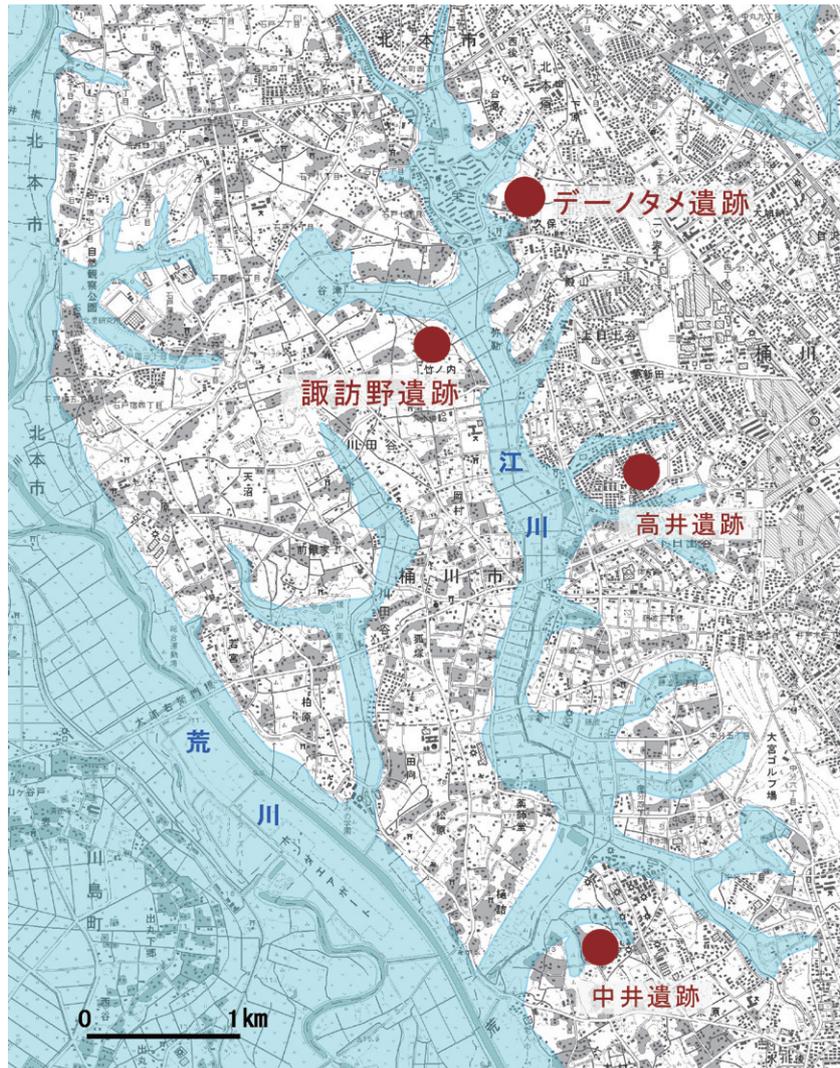
また、本遺跡の集落は縄文後期中葉まで存続し、带状に連なる後期集落が遺存しており、やはり集落の規模や継続期間等を比較することは重要な作業であると想定されるため、デーノタメ遺跡の後期集落の優位性についても併せて検討したい。

### (1) デーノタメ遺跡周辺の遺跡

#### ① 江川流域の縄文集落

デーノタメ遺跡の集落は勝坂Ⅲ式期～加曾利 B I 式期までの継続期間を有し、集落の規模も縄文時代中・後期を通じて大規模である。本遺跡の位置する江川流域では至近に同規模の中期集落が複数点在しており、極めて注目すべき歴史的環境にあったことがわかる。まずはこれら集落について検討していく。

江川は鴻巣市原馬室に源を発し、北本市、桶川市を南流して上尾市樋詰付近で荒川に合流する。この流域では北からデーノタメ遺跡、諏訪野遺跡、高井遺跡、中井遺跡という4つの縄文中期集落があり(第317図)、それぞれの遺跡はすでに調査歴があり、集落規模や消長等が明らかにされている<sup>6)</sup>。



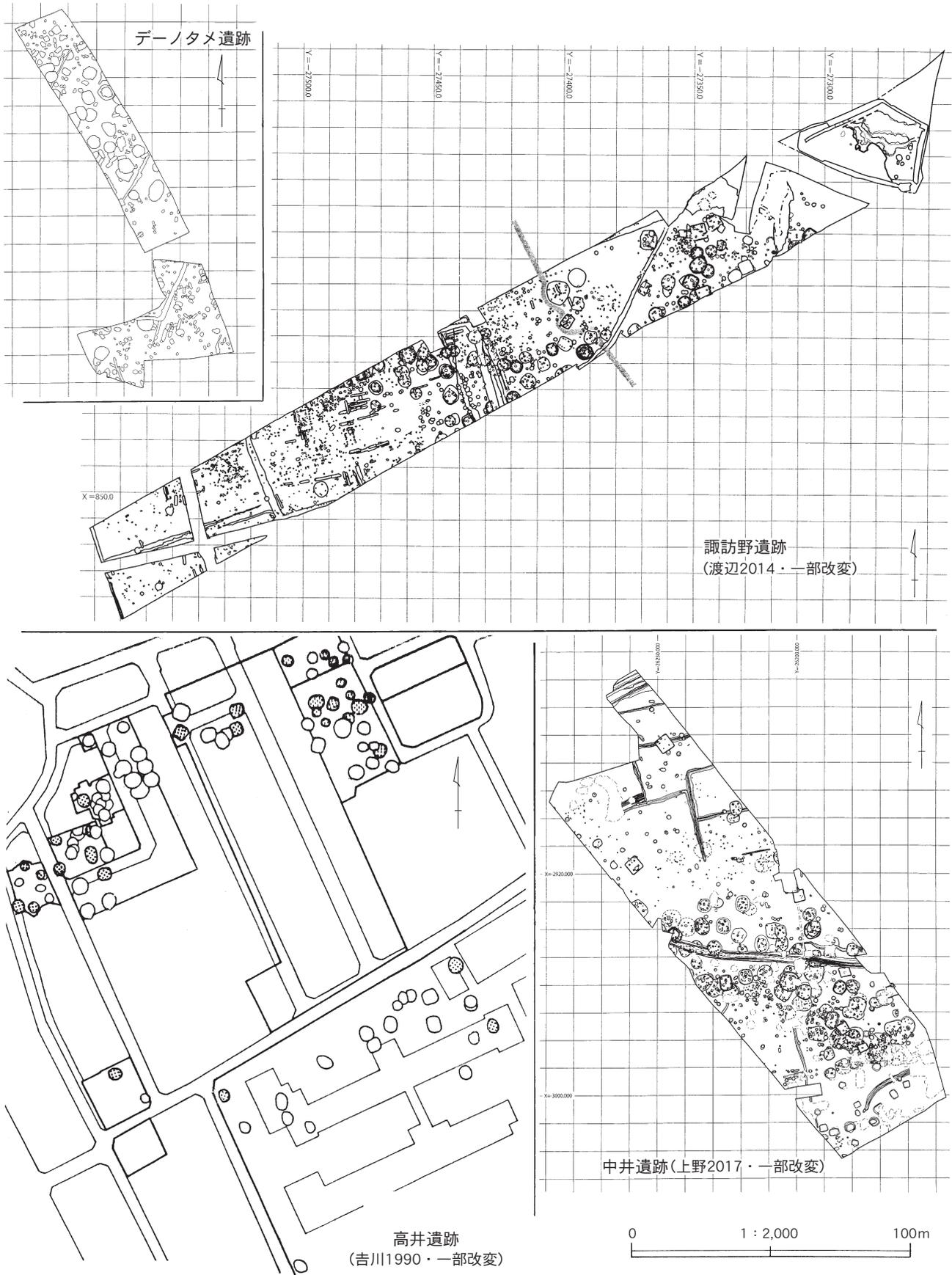
第317図 江川流域の環状集落分布図

諏訪野遺跡（渡辺2014）はデーノタメ遺跡から市境を越えて0.9km南西に所在し、これまでに約80軒の住居跡が調査されている。遺跡は江川右岸の標高22mの台地上に位置し、北側に江川の支谷を望んでいる。低地との比高差は4mである。調査は平成18・19年度に埼玉県埋蔵文化財調査事業団が行っており、その大きさは長径約180mの環状集落とされる（第318図）。

諏訪野遺跡の集落の形成は勝坂Ⅱ式期に始まる。勝坂Ⅲ式期になると小規模な住居群が分散して現れ、加曾利EⅠ式期には急激に住居数が増加する。その後、加曾利EⅡ式期で住居数が激減すると、加曾利EⅢ式期の前には集落が終焉するとみられている。縄文時代後期では中期集落の北東部の低地から堀之内Ⅱ式期の埋甕が有機質の遺物群とともに検出されている。ただし、遺跡内及び周辺では後期の住居跡が発見されておらず、集落との関係は不明である。

高井遺跡（吉川1990）は諏訪野遺跡の下流約1.5kmの左岸に位置する。遺跡は北側に谷を望む台地上に位置し、低地へ張り出す舌状台地の平坦面に占地する。集落の広がる台地上は標高21mで、低地との比高差は5mと小さいが、北側の崖線は急傾斜となっている。その規模は直径約200mの環状を呈すると想定され、現在までに約100軒の住居跡が調査されている。

中期集落の形成は勝坂Ⅲ式期に始まり、特に北部の谷筋に沿ったエリアは早くも弧状に展開する様相を示



第318図 江川流域の環状集落

す。これに対し、中央の広場を隔てた南側では住居の分布が希薄であるが、集落全体では勝坂式期においてほぼ環状の形態をうかがうことができる。その後、集落は加曾利 E I 式期において急激に膨張して最盛期を迎え、加曾利 E II 式期に至ると住居の数は漸減しつつもなお環状を維持するが、加曾利 E III 式期の前半において終焉する。

なお、高井遺跡の約200m東側には高井東遺跡が所在し、両遺跡は北側から遡行する南北方向の谷によって画されている。高井東遺跡（吉川1990）の集落は加曾利 B I 式期～安行Ⅲa 式期にわたって約30軒が分布し、台地面との比高差が約1.5mの窪地を囲んで展開する。また、この窪地から南西約150mの位置で堀之内 I・II 式期の住居群が確認されている。この高井遺跡と高井東遺跡を合わせた集落の展開は、加曾利 E IV 式期～称名寺式期の断絶期を介して<sup>(7)</sup>、後期集落は中期集落の東へと移動する様相がうかがえる。

続いて、中井遺跡（上野他2017）は高井遺跡からさらに約3.1km下流の左岸に位置する。江川が流れる低地を北西に望む台地上に展開しており、東と西が谷によって画され、集落は低地に突出した舌状台地に占地する。北側の低地と台地との比高差は約6mでやや急崖を呈するが、東側は緩やかな傾斜によって谷まで達し、南側も緩傾斜を呈している。

発掘調査により明らかにされた住居跡は約90軒である。集落は西側の浅い谷地を指向し、南側の台地肩部で規制されて環状を呈している。集落の規模は長径で約200mと推定されるが、南部に住居跡が検出されないエリアがあり、集落の開口部となる可能性がある。

集落の萌芽は勝坂Ⅱ式期で、勝坂Ⅲ式期の段階ではすでに弧状に展開する様相が看取され、最盛期は加曾利 E I 式期である。その後、加曾利 E II 式期から E III 式期前半においても住居数は維持されるが、加曾利 E III 式期後半に至って住居数が急速に減少し、集落は終焉に向かう。

また、中期環状集落の南端部では後期初頭と前葉の住居跡がそれぞれ1軒ずつ検出されている。中期後半の一時期にわずかな断絶期を挟んで後期に集落が継続するようにみえるが、住居跡はそれぞれ単独で検出されているにとどまる。ただし、集落の東側約250mでは浅い谷の対岸に山下遺跡（赤石1988）が位置し、称名寺式期～堀之内 I 式期に至る集落が展開している。

こうした集落の変遷過程は高井遺跡の様相と近似しており、中期の大集落と後期の集落が近接しつつも、その占地を違って形成するという点が共通する。

## ② デーノタメ遺跡との比較検討

前節で示したように、デーノタメ遺跡の集落は勝坂Ⅲ式期～加曾利 B I 式期までの継続期間がある。これまでみてきた江川流域の環状集落の場合、集落の継続期間はすべての集落が勝坂Ⅱ～Ⅲ式期に始まる。また、この段階で検出された住居跡は全体の割合からすれば少ないが、すでに環状を意識した展開をみせている。集落の最盛期は加曾利 E I 式期にピークがあり、加曾利 E I 式期を新段階と古段階に分類した場合、高井遺跡と中井遺跡では勝坂式Ⅲ式期から加曾利 E I 式期古段階に住居数が卓越し、諏訪野遺跡とデーノタメ遺跡は新段階で住居数が増加する。

集落の縮小期も若干の違いがみられた。諏訪野遺跡では加曾利 E II 式期において集落が逸早く終焉するが、その他の遺跡では加曾利 E III 式期までは確実に継続している。このうち、デーノタメ遺跡と高井遺跡においては加曾利 E III 式期の前半で急速に集落が縮小し、中井遺跡では加曾利 E III 式期前半まで住居数が維持され、加曾利 E III 式期後半で急激に減少する。

集落の継続性については、中期から後期に至る変遷過程に特徴がみられた。まず、諏訪野遺跡では低地に遺構が存在するものの、後期集落は周辺で確認されていない。他の遺跡と比較して、集落の終焉が加曾利 E

Ⅱ式期という早い時期で迎えることと関係があろう。

一方、高井遺跡、中井遺跡では隣接地において後期集落が確認されている。つまり、後期集落は全く新しいエリアへ移動し、とくに谷を跨いだ対岸で新たに形成されるあり方が共通する。

デーノタメ遺跡においては、中期の集落が終焉した後、後期集落が中期集落からやや離れた東方に出現する。しかし、その後は中期集落のエリアへと回帰し、最終的には環状集落の中央広場に占地するため、中期と後期の集落エリアが重複することが他の遺跡と異なる。同様に、住居域だけではなく土器の廃棄場や水場等についても、中期と後期で共通したエリアを利用している点も、本遺跡の特徴として指摘できるであろう。

以上のように、江川流域における縄文中期の環状集落は、その集落の規模等からいずれも拠点集落として位置付けることが可能である。また、集落の消長は4遺跡ともに概ね同様の傾向を示すが、一方でデーノタメ遺跡のみが同一エリアにおいて、中期集落から後期集落への継続性を示すという特徴がうかがえた。

後期集落の比較では、各遺跡において時期的な違いはあるが、高井東遺跡は北側に開口部をもつ環状を呈し、直径110mの規模を有しており、中井遺跡に隣接する山下遺跡は環状を呈し、規模は長径110mであった。デーノタメ遺跡の後期集落は住居帯がおよそ60mの幅で弧状に展開しており、その長さが約270mという点では際立って大きな集落として位置付けられる。

## (2) 埼玉県内の縄文時代中期の集落

次に埼玉県内に視野を広げ、拠点集落とされる大規模な縄文時代の中期集落を抽出し、その規模と集落の最盛期、継続期間等について整理し、デーノタメ遺跡と比較、検討の材料とする。対象とするのは大宮台地、武蔵野台地、入間台地等に所在する中期環状集落である。

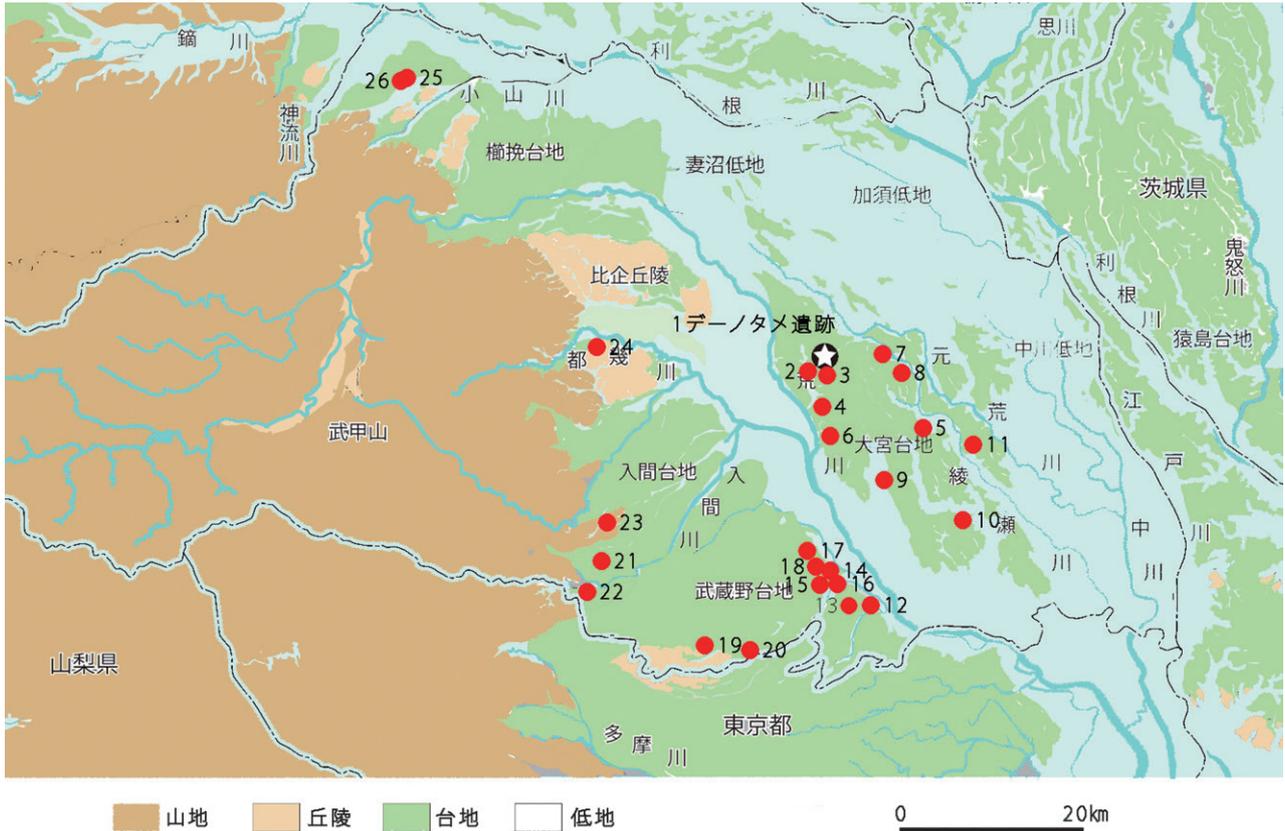
### ① 大宮台地の縄文中期集落 (第319図、第43表)

大宮台地は南北に長い島状を呈し、この台地を浸食する幾筋もの小河川沿いに多くの縄文時代中期の集落が所在する。

上尾市秩父山遺跡(赤石1978)は大宮台地東部の綾瀬川流域に位置し、集落は勝坂Ⅲ式期～加曾利EⅢ式期まで継続する。住居群は加曾利EⅠ式期をピークとし、加曾利EⅡ式期でわずかに縮小して加曾利EⅢ式期には終焉する。規模は直径約150mの環状集落と推定される。同市雨沼Ⅰ遺跡(赤石1986)は大宮台地西端にあり、荒川低地から西側へ開析する支谷をやや遡った右岸に位置する。集落は勝坂Ⅲ式期に出現し、加曾利EⅢ式期まで継続する。環状集落の規模は約100mである。

大宮台地東部の伊奈町に所在する北遺跡・原遺跡は、綾瀬川流域の低地から南西に遡行する小支谷を挟み、直線距離で約200mという距離で対峙する。北側の原遺跡(細田1985)は勝坂Ⅱ式期～加曾利EⅣ式期前半まで、南側の北遺跡は勝坂Ⅱ式期～加曾利EⅢ式期まで集落が存続する。両遺跡ともに阿玉台Ⅱ式の住居跡が検出されている。原遺跡の集落のピークは加曾利EⅠ式期であり、加曾利EⅣ式期で終焉すると考えられる。一方、北遺跡(金子1987)においては集落の消長に波があり、加曾利EⅠ式期の初期段階、EⅡ式期の初期段階でそれぞれ住居が激減する。集落の規模はともに大きく、原遺跡は長径で約200m、北遺跡は長径で180mと考えられる。

さいたま市旧大宮地区に所在する下加遺跡(山田他1988)は、大宮台地の中央を流れる鴨川中流の左岸に位置する。検出された住居群は勝坂Ⅲ式期～加曾利EⅢ式期で、早くも勝坂式期で住居数がピークに達し、加曾利EⅠ式期では一時集落が断絶する。その後、加曾利EⅡ式期において再び住居数は増加するが、加曾利EⅢ式期には終焉する。環状集落の規模は直径で約120mと推定される。



1. デーノタメ遺跡、2. 諏訪野遺跡、3. 高井遺跡、4. 中井遺跡、5. 秩父山遺跡、6. 雨沼Ⅰ遺跡、7. 北遺跡、8. 原遺跡、9. 下加遺跡、10. 馬場小室山遺跡、11. 西原遺跡、12. 泉水山遺跡、13. 西原大塚遺跡、14. 羽沢遺跡、15. 中沢遺跡、16. 松ノ木遺跡、17. 東台遺跡、18. 西ノ原遺跡、19. 海谷遺跡、20. 和田遺跡、21. 加能里遺跡、22. 落台上ノ台遺跡、23. 八王子遺跡、24. 行司免遺跡、25. 将監塚遺跡、26. 古井戸遺跡

第319図 埼玉県の主な縄文中期集落の分布

さいたま市旧浦和地区に所在する馬場小室山遺跡（柳田他2015）は、大宮台地中央部を貫流する芝川沿いに位置する。この遺跡は径50m、比高差3mほどの窪地を中心とした後・晩期の集落として知られるが、中期の住居群も同じ窪地を中心として環状に展開しており、これまでに約60軒の住居跡が検出されている。集落の継続期間は短く、勝坂Ⅲ式期に萌芽した集落は加曾利 EⅠ式期にピークを迎える。その後、加曾利 EⅡ式期では住居数が減少して終焉する。環状集落の規模は長径で約150mと想定される。

さいたま市旧岩槻市内の西原遺跡（岩井2013）は綾瀬川左岸の台地上に位置し、低地に向かって西側に大きく開口する半円形の弧状集落で、長径約150mである。住居群の萌芽は勝坂Ⅲ式期であり、加曾利 EⅠ式期をピークとする。その後、加曾利 EⅡ式期で住居数が減少し、加曾利 EⅢ式期の断絶期を経て加曾利 EⅣ式期にわずかに復活するが、後期初頭までは継続しない。

以上、大宮台地における江川流域外の中期環状集落は遺跡数が限られ、また200mを超える集落は伊奈町の原遺跡のみであった。

② 武蔵野台地の縄文中期集落（第319図、第43表）

武蔵野台地は都県境を跨いで、埼玉県と東京都に広がり、関東山地から流れる多摩川が形成した扇状地である。このため湧水点が多く、これに端を発した幾筋もの小河川が東西方向に流れている。

朝霞市の泉水山遺跡（谷井1990）は黒目川左岸の高台に位置し、直径約150mの環状集落を形成してい

る。集落は勝坂Ⅱ式期から始まり、加曾利Ⅱ式期で最盛期を迎え、その後、加曾利Ⅳ式期まで集落は継続するが、加曾利Ⅲ式期から急激に縮小する。

志木市の西原大塚遺跡（佐々木他2009）は柳瀬川の低地を望む右岸に位置し、中期の環状集落は東西方向に長楕円形を呈する。その長径は約240mと推定される。集落の形成は勝坂Ⅰ式期に始まり、加曾利Ⅱ式期においてピークを迎える。その後、加曾利Ⅲ式期において急速に減少し、加曾利Ⅳ式期で終焉を迎える。

富士見市羽沢遺跡（会田1985）は新河岸川右岸に位置し、台地を開析する支谷沿いに占地する。集落は約200mの環状集落と推定される。集落の形成は勝坂Ⅲ式期に始まり、加曾利Ⅰ式、Ⅱ式期において住居数が急激に増加してピークとなる。しかし、加曾利Ⅲ式期の住居跡は確認できず、集落の最盛期から突然終焉する状況がうかがえる。同市中沢遺跡（会田1985）は羽沢遺跡と同じ谷に面し、約1.5km西に奥まった対岸に位置する。集落は直径が約150mの環状を呈し、その形成は加曾利Ⅰ式期に始まる。その後、加曾利Ⅱ式期で住居跡が増加し、加曾利Ⅲ式期には急激に縮小して終焉するため、羽沢遺跡とは開始と終焉の時期が異なる。同市松ノ木遺跡（会田1985）は富士見江川の支流に面し、羽沢遺跡の南方約2.5kmの距離に位置する。集落は勝坂Ⅲ式期において住居が多数出現し、加曾利Ⅰ式期にピークを迎える。その後、加曾利Ⅱ式には早くも住居が減少して終焉する。集落の規模は直径約150mである。

ふじみ野市東台遺跡（坪田1990）は双環状の集落と想定され、砂川を北に望む高台に位置する。集落は東西に分かれて占地し、東集落は長径200m、西集落は長径150mと推定される。両集落の消長には時間差がなく、阿玉台Ⅱ式期、勝坂Ⅱ式期に萌芽し、加曾利Ⅰ式期に最盛期を迎える。加曾利Ⅱ式期には住居数は維持されるが、加曾利Ⅲ式期において急激に縮小し、加曾利Ⅳ式期まで命脈を保って終焉する。同市西ノ原遺跡（今井他1996）は東台遺跡と水系を異にするが、互いの直線距離は約1.5kmである。遺跡はさかい川を北に望む台地上に位置し、集落の長径は約250mと推定される。集落は勝坂Ⅱ式期に萌芽し、その後、勝坂Ⅲ式期～加曾利Ⅰ式期に住居数が増加して環状を呈する。続く加曾利Ⅱ式期でピークを迎えるが、加曾利Ⅲ式期において住居数が激減して終焉する。

所沢市の海谷遺跡（平田2007）は長径150mの環状集落である。遺跡は柳瀬川の支流が南北に流れ、馬の背状の台地上に位置する。集落は勝坂Ⅱ式期に始まり、勝坂Ⅲ式期に住居数が増加するが、加曾利Ⅰ式期でやや減少する。加曾利Ⅱ式期に至って再び増加に転じてピークをなすが、加曾利Ⅲ式期において減少して終焉となる。同市和田遺跡（平田2007）は柳瀬川の本流の左岸に位置し、河道に沿ってやや長楕円形を呈する環状集落で、長径は約200mである。集落は勝坂Ⅲ式期で多数の住居が出現し、続く加曾利Ⅰ式期で住居数がピークとなる。加曾利Ⅱ式期には集落が一時断絶し、加曾利Ⅲ式期に再び集落が形成されるが、これ以降は継続しない。

### ③ 入間台地、本庄台地、比企丘陵の縄文中期集落（第319図、第43表）

入間台地の飯能市加能里遺跡（熊澤2011）は入間川が形成した左岸の河岸段丘面に位置し、環状集落は直径約100mの規模である。その存続期間は勝坂Ⅱ式期～加曾利Ⅱ式期である。集落のピークは加曾利Ⅱ式期で、ピークから急速に終焉へと至る。同市落合上ノ台遺跡（村上他2001）は入間川の支流である成木川の右岸に位置し、台地と山地の境界付近に位置する。集落は直径約160mの環状集落である。集落の形成は勝坂Ⅰ式期に始まり、勝坂Ⅲ式期まで住居数が増加する。その後、加曾利Ⅰ式期でやや住居が減少し、加曾利Ⅱ式期で再び増加に転じてピークとなるが、加曾利Ⅲ式期に住居は急速に減少し、加曾利Ⅳ式期後半から後期初頭で終焉を迎える。同市八王子遺跡（柳戸他1999）は丘陵上の尾根に位置する環状集落で、

第43表 縄文時代中期の主な環状集落一覧

	No.	遺跡名	所在	水系	集落規模 (長径)	勝坂			加曾利				称名寺			
						I	II	III	I	II	III	IV	I	II		
大宮台地	1	デーノタメ遺跡	北本市	江川	約210m											
	2	諏訪野遺跡	桶川市	江川	約180m											
	3	高井遺跡	桶川市	江川	約200m											
	4	中井遺跡	上尾市	江川	約200m											
	5	秩父山遺跡	上尾市	綾瀬川	約150m											
	6	雨沼Ⅰ遺跡	上尾市	荒川	約100m											
	7	原遺跡	伊奈町	綾瀬川	約200m											
	8	北遺跡	伊奈町	綾瀬川	約180m											
	9	下加遺跡	さいたま市	鴨川	約120m											
	10	西原遺跡	さいたま市	綾瀬川	約150m											
	11	八幡遺跡	さいたま市	鴨川	約150m											
	12	馬場小室山遺跡	川口市	芝川	約150m											
武蔵野台地	13	泉水山遺跡	朝霞市	黒目川	約150m											
	14	西原大塚遺跡	志木市	柳瀬川	約240m											
	15	池田遺跡	新座市	黒目川・白子川	不明											
	16	嵯峨山遺跡	新座市	黒目川・柳瀬川	不明											
	17	新座遺跡	新座市	柳瀬川	約200m											
	18	吹上遺跡	和光市	白子川	約120m											
	19	膳棚遺跡	所沢市	六ッ家川	約180m											
	20	和田遺跡	所沢市	柳瀬川	約200m											
	21	海谷遺跡	所沢市	柳瀬川	約150m											
	22	西上遺跡	所沢市	柳瀬川	不明											
	23	坂東山遺跡	入間市	霞川	不明											
	24	水窪遺跡	入間市	霞川	不明											
	25	羽沢遺跡	富士見市	新河岸川	約200m											
	26	中沢遺跡	富士見市	さかい川	約150m											
	27	松ノ木遺跡	富士見市	富士見江川	約150m											
	28	東台遺跡	ふじみ野市	砂川	約200m (東集落)											
	29	東台遺跡	ふじみ野市	砂川	約150m (西集落)											
	30	江川南遺跡	ふじみ野市	福岡江川	不明											
	31	西ノ原遺跡	ふじみ野市	さかい川	約250m											
	32	花影遺跡	坂戸市	高麗川	不明											
	33	高麗石器時代遺跡	日高市	高麗川	150m											
	34	芦荻場遺跡	飯能市	南小畦川	約200m											
	35	加能里遺跡	飯能市	入間川	約100m											
	36	落合上ノ台遺跡	飯能市	成木川	約160m											
	37	八王子遺跡	飯能市	小畔川	不明											
	38	行司免遺跡	嵐山町	都幾川	約250m											
	39	将監塚遺跡	本庄市	女堀川	約200m											
	40	古井戸遺跡	本庄市	女堀川	約160m											

## 群馬県

	遺跡名	所在	水系	集落規模	勝坂			加曾利 E				称名寺		堀之内	
					I	II	III	I	II	III	IV	I	II	I	II
41	三原田遺跡	渋川市	天竜川	約130m											
42	曲沢遺跡	伊勢崎市	早川	約140m											
43	白川傘松遺跡	高崎市	榛名白川	約150m											
44	上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡	高崎市	染谷川	約150m											
45	鼻毛石中山遺跡	前橋市	神沢川	約130m											
46	五代伊勢宮Ⅳ・Ⅵ遺跡	前橋市	藤沢川・薬師川	約140m											

## 栃木県

	遺跡名	所在	水系	集落規模	勝坂			加曾利 E				称名寺		堀之内	
					I	II	III	I	II	III	IV	I	II	I	II
47	寺野東遺跡	小山市	鬼怒川	約190m											
48	槻沢遺跡	那須塩原市	津室川	約130m											
49	赤坂道上北遺跡	芳賀郡芳賀町	大川	約80m											
50	御城田遺跡	宇都宮市	駒生川	約160m											
51	藤岡神社遺跡	栃木市	旧渡良瀬川	約100m											
52	台耕上遺跡	宇都宮市	赤川	約80m											

## 茨城県

	遺跡名	所在	水系	集落規模	勝坂			加曾利 E				称名寺		堀之内	
					I	II	III	I	II	III	IV	I	II	I	II
53	宮後遺跡	茨城町	小橋川	約160m											
54	廻り地 A 遺跡	龍ヶ崎市	小貝川	約120m											

## 東京都

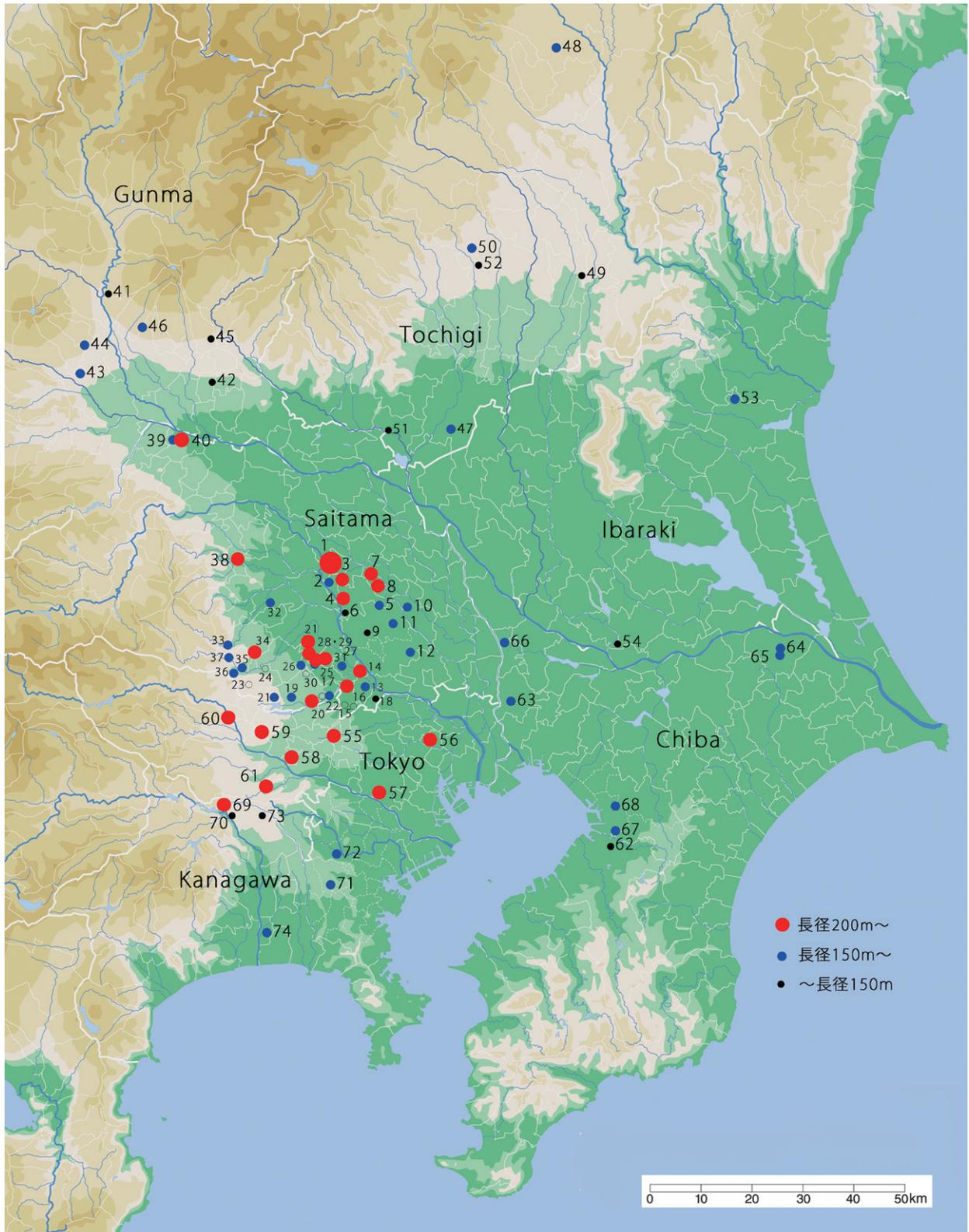
	遺跡名	所在	水系	集落規模	勝坂			加曾利 E				称名寺		堀之内	
					I	II	III	I	II	III	IV	I	II	I	II
55	下野谷遺跡（西集落）	西東京市	石神井川・富士見池	約300m											
56	小石川植物園遺跡	文京区	小石川	約230m											
57	奥沢台遺跡	世田谷区	呑・九品仏川	約330m											
58	恋ヶ窪遺跡	国分寺市	野川	約250m											
59	向郷遺跡	立川市	矢川	約320m											
60	羽ヶ田上遺跡	羽村市	多摩川	約200m											
61	TNT No.72・796遺跡	八王子市	大栗川	約220m											

## 千葉県

	遺跡名	所在	水系	集落規模	勝坂			加曾利 E				称名寺		堀之内	
					I	II	III	I	II	III	IV	I	II	I	II
62	草刈貝塚	市原市	村田川	約130m											
63	子和清水貝塚	松戸市	国分川	約200m											
64	大根磯花遺跡（西側集落）	佐原市	香西川	約160m											
65	大根磯花遺跡（東側集落）	佐原市	香西川	約160m											
66	中野久木谷頭遺跡	流山市	江戸川	約160m											
67	有吉南貝塚	千葉市	村田川	約150m											
68	加曾利貝塚	千葉市	坂月川	約130m											

## 神奈川県

	遺跡名	所在	水系	集落規模	勝坂			加曾利 E				称名寺		堀之内	
					I	II	III	I	II	III	IV	I	II	I	II
69	川尻遺跡	相模原市	相模川	約230m											
70	川尻中村遺跡	相模原市	相模川	約130m											
71	南原遺跡	横浜市保土ヶ谷区	帷子川	約150m											
72	大熊仲町遺跡	横浜市緑区	大熊川	約160m											
73	山王平遺跡	相模原市	境川	約90m											
74	岡田遺跡	高座郡寒川町	相模川	約150m(複数の環状集落)											



- 【埼玉県】1. デーノタメ遺跡、2. 諏訪野遺跡、3. 高井遺跡、4. 中井遺跡、5. 秩父山遺跡、6. 雨沼Ⅰ遺跡、7. 原遺跡、8. 北遺跡、9. 下加遺跡、10. 西原遺跡、11. 八幡遺跡、12. 馬場小室山遺跡、13. 泉水山遺跡、14. 西原大塚遺跡、15. 池田遺跡、16. 嵯峨山遺跡、17. 新座遺跡、18. 吹上遺跡、19. 膳棚遺跡、20. 和田遺跡、21. 海谷遺跡、22. 西上遺跡、23. 坂東山遺跡、24. 水窪遺跡、25. 羽沢遺跡、26. 中沢遺跡、27. 松ノ木遺跡、28. 東台遺跡、29. 東台遺跡、30. 江川南遺跡、31. 西ノ原遺跡、32. 花影遺跡、33. 高麗石器時代遺跡、34. 芦荻場遺跡、35. 加能里遺跡、36. 落合上ノ台遺跡、37. 八王子遺跡、38. 行可免遺跡、39. 将監塚遺跡、40. 古井戸遺跡
- 【群馬県】41. 三原田遺跡、42. 曲沢遺跡、43. 白川傘松遺跡、44. 上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡、45. 鼻毛石中山遺跡、46. 五代伊勢宮Ⅳ・Ⅵ遺跡 【栃木県】47. 寺野東遺跡、48. 槻沢遺跡、49. 赤坂道上北遺跡、50. 御城田遺跡、51. 藤岡神社遺跡、52. 台耕上遺跡 【茨城県】53. 宮後遺跡、54. 廻り地A遺跡 【東京都】55. 下野谷遺跡(西集落)、56. 小石川植物園遺跡、57. 奥沢台遺跡、58. 恋ヶ窪遺跡、59. 向郷遺跡、60. 羽ヶ田上遺跡、61. TNT No.72・796遺跡 【千葉県】62. 草刈貝塚、63. 子と清水貝塚、64. 大根磯花遺跡(西側集落)、65. 大根磯花遺跡(東側集落)、66. 中野久木谷頭遺跡、67. 有吉南貝塚、68. 加曾利貝塚 【神奈川県】69. 川尻遺跡、70. 川尻中村遺跡、71. 南原遺跡、72. 大熊仲町遺跡、73. 山王平遺跡、74. 岡田遺跡

第320図 関東地方の主な縄文中期集落の分布

中央広場を最高地点に置き、住居は周辺の斜面に位置している。集落の形成は勝坂Ⅰ式期で、勝坂Ⅲ式期から住居数が増え、加曾利 EⅠ式、EⅡ式期にピークとなって終焉する。

嵐山町の行司免遺跡（植木1987・1988）は長径約250mの大環状集落で、集落の全容が知れる著名な遺跡である。遺跡は外秩父山地に続く比企丘陵に接し、都幾川左岸の河岸段丘上に占拠する。集落の形成は勝坂Ⅱ式期に始まり、この段階で集落は環状を呈する。加曾利 EⅠ式、EⅡ式期において住居群は最盛期を迎え、加曾利 EⅢ式期には住居数が減少に転じ、加曾利 EⅣ式期ではさらに縮小して、称名寺式期にわずか1軒の住居の出現をもって終焉する。

本庄市の将監塚遺跡（石塚1986）は女堀川の左岸に位置し、長径約200mの環状集落である。集落の形成は勝坂Ⅲ式期に始まり、加曾利 EⅡ式期でピークを迎える。加曾利 EⅢ式期には漸減しつつも環状の様相をとどめるが、この段階で集落は終焉する。古井戸遺跡（宮井1989）は将監塚遺跡の南西約250mの位置し、直径約160mの環状集落である。両遺跡は双環状の関係にあり<sup>⑧</sup>、集落は将監塚遺跡と同様に勝坂Ⅲ式期に始まり、加曾利 EⅡ式期にピークを迎え、加曾利 EⅢ式期で終焉する。

以上、埼玉県内における縄文中期の環状集落について概観した。その結果、200mを超える大規模な環状集落は、大宮台地北部と武蔵野台地東縁部に集中することが確認できた。

#### ④ 関東地方の主な縄文中期集落（第320図、第43表）

ここではさらに、関東地方における主な環状集落に着目し、第320図にその分布状況を示した。これによれば、環状集落の分布は埼玉県内に集中しており、次いで東京都の武蔵野台地及び多摩川流域に多く、神奈川県では川尻遺跡等2遺跡が認められた。このため、200mを超える環状集落については埼玉県、東京都、神奈川県に限られ、東の千葉県、茨城県、北の栃木県、群馬県では150mを超える環状集落は認められるものの、その分布状況は散漫であるといえよう。

デーノタメ遺跡は埼玉県、東京都にまたがる集中範囲の中で、最も北側に位置することがわかる。

### （3）埼玉県内の縄文時代後期の集落

埼玉県内における縄文時代の後期集落の遺跡は、大宮台地上に分布が偏る傾向がある（会田1980）。一般的に後期の遺跡は中期に比べて遺跡数を減らすのが、武蔵野台地を含む県の南西部においては、特にその傾向が顕著である。

ここではデーノタメ遺跡の所在する大宮台地の後期遺跡について概観する。

#### ① 大宮台地の縄文後期集落（第321図）

北本市に北接する鴻巣市では赤城遺跡（新屋1988）が所在し、加須低地と称される水田下の埋没台地から検出されている。集落の中央には窪地を有し、これを中心として約80mの環状に展開する。集落は堀之内Ⅱ式期～曾谷式期まで継続するが、主体は加曾利 BⅡ式期である。同市の中三谷遺跡（富田1989）は同じく埋没台地に展開する集落で、北側に元荒川を望む。集落は低地から南へ貫入する小支谷を囲むように弧状を呈し、その規模は長径で約60mを測る。集落は堀之内Ⅰ式期を主体として堀之内Ⅱ式期で終焉する。

北本市の上手遺跡は元荒川流域から台地を開析する東西方向の支谷に面して位置する。集落は加曾利 EⅢ式期～加曾利 BⅠ式期まで継続し、北側の谷に沿って帯状に展開する。その規模は住居帯の幅が約20mで、長さは120mを超える<sup>⑨</sup>。

桶川市の後谷遺跡（村田他2007）は大宮台地の北東部に位置し、元荒川水系の赤堀川流域に所在する。台

地上の集落は加曾利 B II 式を主体として展開し、台地下の低地のすり鉢状地形には泥炭層が堆積しており、安行 I 式期～Ⅲd 式期までの木胎、籃胎漆器等の有機質遺物、土偶、土製品等を含む多彩な遺物群が検出されている。集落はすり鉢状の地形を中心として弧状に展開し、その規模は長径約100mと推定される<sup>(10)</sup>。

蓮田市の雅楽谷遺跡（橋本1990）は元荒川流域の低地から遡行する小支谷に位置する。遺跡の中心には比高差約 2 m の窪地があり、これを中心に集落が環状に展開する。その直径は約100mである。集落の継続期間は堀之内 II 式期～安行 II 式期である。同市久台遺跡は元荒川右岸の台地上に所在する。元荒川の低地に突出する舌状台地上を弧状に展開し、称名寺 I 式期～堀之内 I 式期まで継続する。その規模は長径で約80mである。

白岡市の清左衛門遺跡（大屋2015）は大宮台地の北東端部に位置し、旧利根川の日川低地に面して帯状に展開する。集落は称名寺式期～堀之内式期にピークを迎えて断絶した後、南西に移動して安行 I 式期～Ⅲ a 式期に再び形成される。同市上小笠原遺跡（杉山他2013）は古利根川に開口する開析谷に臨む。遺跡の広がる台地には谷がわずか湾入し、集落はこの谷を囲むように展開しており、長径約80～100mの弧状を呈する。堀之内 I 式期に出現してピークをなすが、一時断絶した後に加曾利 B I 式期の小規模集落が再び営まれる。

上尾市柏座遺跡（赤石1992）は市内を貫流する鴨川の支流を北に望む台地上に位置する。集落は北西と南西を谷に挟まれた舌状台地上を弧状に展開し、その規模は約120mである。集落の継続は堀之内 I 式期～Ⅱ



1. デーノタメ遺跡、2. 赤城遺跡、3. 中三谷遺跡、4. 上手遺跡、5. 後谷遺跡、6. 高井東遺跡、7. 山下遺跡、
8. 雅楽谷遺跡、9. 清左衛門遺跡、10. 上小笠原遺跡、11. 柏座遺跡、12. 戸崎前遺跡、13. 氷川神社遺跡、
14. 真福寺貝塚、15. 大木戸遺跡、16. 叭原遺跡、17. 丸山台遺跡、18. 打越遺跡、19. 馬場小室山遺跡

第321図 埼玉県の主な縄文後期集落の分布

式期と短い。

伊奈町の戸崎前遺跡（金子1997）は綾瀬川の低地へ突出する舌状台地に占地する。集落は称名寺Ⅱ式期～堀之内Ⅰ式期に限られ、継続期間が極めて短い。規模は長径で約70mと推定され、その形態は環状を呈する。

さいたま市大宮区の氷川神社遺跡（柳田2015）は芝川を遡行する谷の最奥部に位置し、武蔵一宮である氷川神社社殿を囲むように環状盛土遺構が遺存する。集落は直径150mと大規模で、その継続期間は加曾利Ⅱ式期～安行Ⅲc式期に及ぶが、晩期に至ってやや断続的な傾向を示す。前項で取り上げた馬場小室山遺跡は窪地を中心とした直径150mの環状盛土を伴う集落遺跡である。集落は盛土に沿って環状に展開し、継続期間が長く、称名寺式期～安行Ⅲd式期まで認められる。同市真福寺貝塚は学史的に著名な国指定史跡である（中村2015）。長径180mの環状盛土遺構を伴い、堀之内Ⅰ式期～安行Ⅲd式期まで継続する。集落は綾瀬川から遡行する谷に面し、盛土は谷に向かって開口する。同市大木戸遺跡は荒川低地から遡行する谷の奥部に位置し、集落は谷に北面する台地上に展開する。継続期間は堀之内Ⅰ式期から加曾利Ⅱ式期で、規模は長径で約80mである（金子2018）。

川口市の吠原遺跡（宮崎1986）は芝川の低地部から北に遡行する谷の最奥部に位置する。集落は谷を南東に望む舌状台地に占地し、長径50mの環状を呈する。継続期間は称名寺Ⅰ式期から堀之内Ⅰ式期である。

## ② 武蔵野台地の後期集落

武蔵野台地における縄文後期の集落については、前述したように規模、継続期間を把握できる遺跡が少ない。和光市丸山台遺跡は荒川低地に開口する谷に面した台地上に占地する（野中1992）。集落内には小支谷が貫入し、これを囲むように住居跡群及び掘立柱建物跡群が環状に分布する。その規模は長径150m、短径100mの規模で、継続期間は堀之内Ⅰ式期～加曾利Ⅱ式期であるが、主体は堀之内Ⅰ式期である。

富士見市の打越遺跡（会田1985）は、遺跡の北側が新河岸川の支谷に面した台地上に位置している。集落は堀之内Ⅰ式期から加曾利Ⅱ式期まで継続し、その規模は直径約100mである。

## （4）デーノタメ遺跡の特徴と重要性

ここまで埼玉県内に所在する縄文時代中期の環状集落について、大宮台地、武蔵野台地、その他の台地、丘陵ごとに概観してきた。これによると、環状集落の形成時期については多くの遺跡で勝坂式期にその萌芽を認めることができる。その後、集落のピークは概ね加曾利Ⅱ式期後半から加曾利Ⅲ式期とする遺跡が大半で、このうちの一部では集落の最盛期の直後に突如として終焉に向かう遺跡が存在した。また、加曾利Ⅲ式期以降まで継続する多くの集落でも、加曾利Ⅳ式期～Ⅴ式期には急激に住居数が減少するという傾向を示す。

つまり、環状集落の多くは縄文中期終末の段階で終焉に向かい、これ以降も集落が継続する事例は極めて少ない。管見では加曾利Ⅴ式期から称名寺式期まで集落が継続した嵐山町の行司免遺跡が唯一の事例といえよう。

この集落の消長については地域的な差異も確認できる。大宮台地と武蔵野台地における集落の形成時期に注視すると、武蔵野台地では勝坂Ⅰ式期、Ⅱ式期に始まる事例が散見され、大宮台地よりもわずかに先行する傾向がある。さらに、先の述べた最盛期の加曾利Ⅲ式期直後に終焉する遺跡は、傾向として武蔵野台地の集落に多い。

また、環状集落の規模においては、上記の環状集落のうち嵐山町行司免遺跡とふじみ野市西ノ原遺跡の長径250mを最大とするが、集落規模が300mに迫る事例はなく、長径が200mを超える事例も決して多くはな

かった。したがって、環状集落の長径が200m台という規模は、縄文時代中期における集落の最大にして限界値を示していると考えられる。

デーノタメ遺跡の環状集落について改めて示すと、その継続時期は勝坂Ⅲ式期～加曾利 EⅢ式期で、県内における他の環状集落と同様の傾向を示していた。また、集落の規模については、長径で210mを超える規模を有しており、最大規模の集落の一つとして認識できる。これらのことから、デーノタメ遺跡は縄文時代中期の大環状集落の典型的な遺跡と位置づけることができよう。

次に縄文後期の集落について整理すると、前述のとおり、埼玉県内における後期集落は県南の大宮台地周辺に偏在する傾向が認められた。後期集落の多くは台地上の窪地もしくは台地を貫入する支谷の谷頭を囲むように展開している。このため、集落の形態は窪地の一方や谷に向かって集落が開口しており、馬蹄形を呈する事例が多い。その規模は長さが150mを超える集落も認められるが、一般に100m以下の集落が多く、200mを超える集落は確認できなかった。

また、集落の継続期間については、後期初頭及び前葉を起点とする集落では長期に継続する事例がなく、土器型式ではいえば1、2型式で終焉する集落が多い。これに対し、後期中葉以降に形成される集落では晩期まで継続する事例が多い傾向にあった。

デーノタメ遺跡の後期集落においても、住居跡が確実に認められる時期は堀之内Ⅰ式期～加曾利 BⅠ式期までと短く、上記の傾向と同様である。また、本遺跡の集落形態は台地に湾入する地形に沿って弧を描いて帯状に展開するが、北側の台地の低位面へ大きく開口するという点では、他の後期集落と共通していることになる。ただし、弧状に連なる集落の東端と西端を繋ぐ270mという規模は、この時期の集落としては破格の大きさといえよう。

最後にデーノタメ遺跡の集落についてまとめておきたい。本集落は縄文中期の勝坂Ⅲ式期から後期の加曾利 BⅠ式期まではほぼ継続するため、土器型式は都合10型式に及び、集落の存続期間は実に1,200年にわたっていたことになる。このうち、中期集落の規模は長径で210mを超えており、「関東地方最大級」であることが確認できた。さらに、後期集落についても類例のない大きさであることは併せて注目すべき点である。

また、中期集落と後期集落が重複する事例がほとんど認められない中<sup>(11)</sup>、本遺跡では後期集落の最終段階で中期集落の中央まで進出していることも特徴の一つである。したがって、中期から後期の集落の展開を一つの遺跡の中で確認できるという点も他の遺跡にはない特徴であり、デーノタメ遺跡の重要性と優位性を示している。

なお、第320図に示す関東地方の主な環状集落は、すでに調査が進んで失われているものが多い。これに対し、デーノタメ遺跡の環状集落はほぼ全体が遺存していることも、併せて評価すべき点であろう。

### 第3節 低地の様相と利用形態

#### (1) デーノタメ遺跡と周辺の低地

##### ① 台地と低地の位置関係

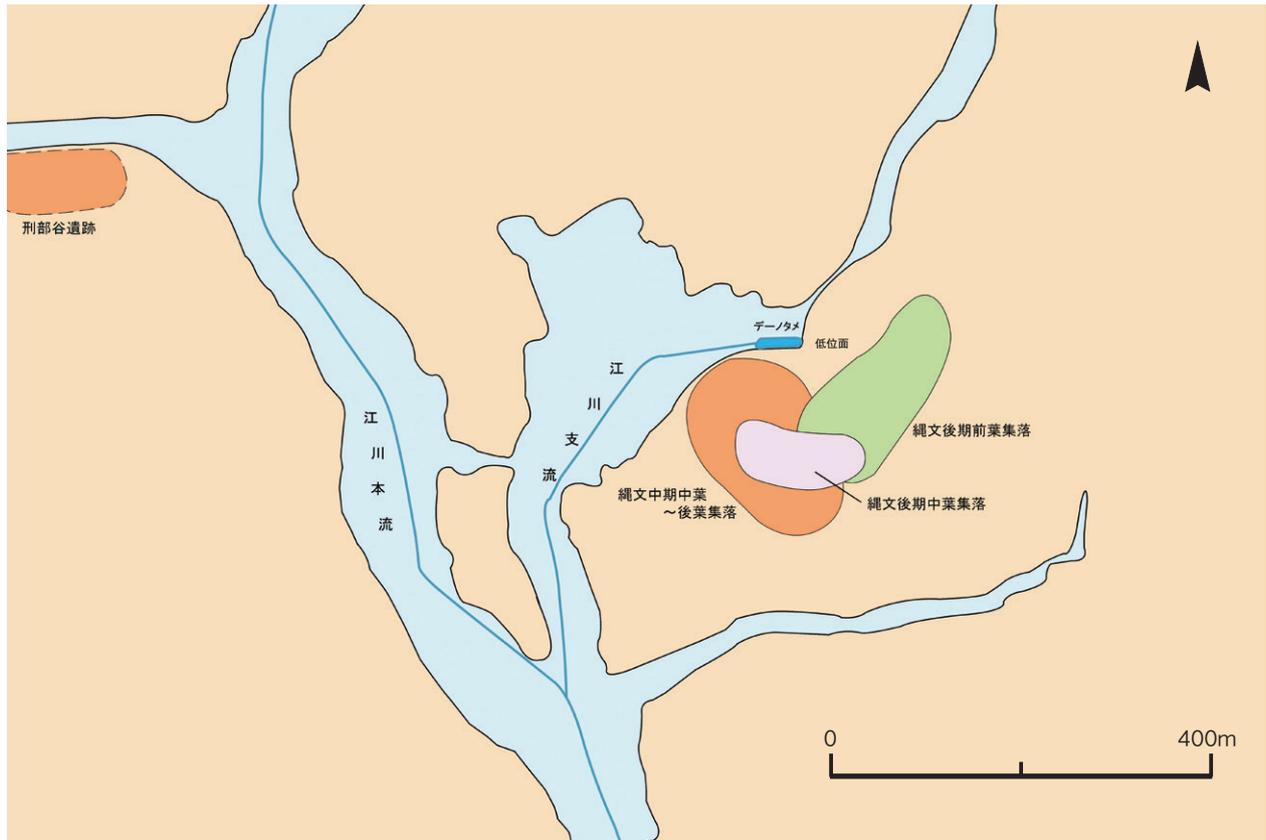
デーノタメ遺跡は荒川水系である江川の支流に位置している。江川は大宮台地の北西部を開析する約7kmの小河川で、荒川低地から約5km遡った地点で北東へ分枝しており、遺跡はこの支流に沿った左岸の台地上に占地する。現在、本遺跡の北西に広がる低地の大半は、昭和40年代に日本住宅公団が行った北本団地の造成によって原状を失っているが、昭和36年に撮影した航空写真では、造成前の地形の状況を詳しく確認することができる（第322図）。

これによれば、江川支流は北東へ分枝した後に谷幅を広げ、約1km遡った付近で広く台形状の谷頭を形成しており、谷頭の南東部には「デーノタメ」と呼ばれる湧水点が位置していた。ただし、このデーノタメ付近は東西約60m×南北約45mの規模で矩形に谷頭状を呈するものの、支流は細流となってさらに北東へと遡行しており、デーノタメ付近はとくに谷幅が狭まっている様子がうかがえる。

台地上に広がる縄文時代の集落のうち、遺跡西部の中期集落はこの谷に直接臨む台地上に、東部の後期集落は後述する段丘状の低位面を挟んで谷頭状の低地に臨んでいる。このため、L字状に展開する中期及び後期集落からみると、デーノタメの湧水点はまさに扇央に位置し、低地はこのデーノタメを起点に北西から南西へと広がっており、集落の縄文人にとって関わりの深い水辺空間であったと想定される。同写真によれば、支流の西側には南北に細長く台地が伸び、その西側には江川の本流が南北に貫流している。また、台地上に展開する集落の約400m南側では、江川の小規模な支流が東西に流れており、集落は北の谷頭と南の支流に挟まれた舌状台地の中央に位置することから、比較的变化に富む水域環境にあったことが理解でき



第322図 デーノタメ遺跡周辺の航空写真（昭和36年）



第323図 デーノタメ遺跡周辺の低地復元図

る（第323図）。

とくに集落は北側の湧水点を含む低地を背負うため、低地への強い関わりを看取することができる。同じく江川流域に位置する至近の諏訪野遺跡（桶川市）、高井遺跡（同左）、さらに中井遺跡（上尾市）といった縄文中期の大環状集落、さらにデーノタメ遺跡の対岸に位置する同時期の刑部谷遺跡においても同様の立地で、江川流域の環状集落に共通する占地形態と理解できる。

## ② 台地と低地間の低位面

デーノタメ遺跡の地形の特徴は台地と低地との比高差が約3mと小さく、また後期集落の北側に段丘状の低位面が広がる点である。この低位面は北から南の台地側へ湾入し、南北約80m×東西約170m、約1haの規模を有する。標高は19m台で、南側の台地面とは約1.5m、北側の低地面とは約1.5mの比高差があり、低地との境界にデーノタメ（湧水点）が位置する。

この低位面の形成過程は不明であるが、湧水起源の池沼の名残をとどめたものと想定される。縄文時代の中期集落と後期集落は、この段丘を望むように位置しており、その利用形態に関心もたれてきたが、平成30年度の内容確認調査では、集落の一部がこの低位面の南西部に及ぶことが明らかとなっている。

なお、低位面は近年まで畑地として利用され、クリ畑や菜園として利用されていた。地下水位が高く、平成29年度の内容確認調査の際には、長雨の影響によってわずかな掘削でも地下水が湧出し、滞水することが確認されており、台地上よりも明らかに湿潤な環境で、表土より下層では少なからず水の影響を受けている。

この基盤層の上には基本的に灰褐色土（Ⅰ層）、黒褐色土（Ⅱ層）、暗茶褐色土（Ⅲ層）が層序をなし、後

2層が縄文中・後期の遺物を含むため、当時の生活面であったと判断される。基盤には灰褐色粘土質層が厚く堆積しており、調査当初は沖積世の粘土層と理解していたが、清水康守氏、小川政之氏の調査によって水の影響で脱色したローム層であることが明らかとなった。両氏の調査によれば、堆積物中の重鉱物は斜方輝石が、軽鉱物は斜長石が多く、火山ガラスはバブルウォール型のため大里ロームの特徴をもつという<sup>(12)</sup>。したがって低位面は集落が展開する台地上から連続した洪積面で、洪積世の終期には浅間山の噴火活動の影響下にあったことがわかる。

### ③ 泥炭層の分布

平成19～20年度に調査を実施した第4次調査区では、南部を除いて基盤層（V層・IV層）の上に灰褐色砂層（Ⅲ層）、茶褐色泥炭層（Ⅱ層）、黒褐色泥炭層（Ⅰ層）が堆積する（第IV章第192図）。このうち、Ⅲ層とⅡ層は縄文中期に相当し、Ⅱ層は暗褐色層（Ⅰb層）を挟む範囲ではⅡa層とⅡb層に区分された。Ⅱ層は木本泥炭、Ⅰ層は草本泥炭と区分される堆積物で、無遺物層であるⅠ層の時期は縄文晩期に比定されている。

また、調査区南部では縄文中期の砂層（b2層）及び後期の砂層（b1層）、泥炭層（a層）という連続的な堆積を確認したが、泥炭層は中期と後期が不連続で、内容確認調査のⅢ区D地点（低位面北部）においても中・後期が重なる泥炭層は確認できていない。

平成30年度は遺跡周辺の泥炭層の広がりや遺存状況を確認するため、第4次調査区の北側に2か所、東側に2か所のボーリング調査を実施したところ、縄文時代と想定される泥炭層が4か所すべてで検出された（第VI章第12節参照）。泥炭層は、第4次調査区北側の2地点では標高15m前後に約50cmの厚さで堆積し、東側の2地点ではやはり標高15m前後に堆積が認められ、おおむね木本泥炭に比定できる。このため、現在のUR北本団地が位置する低地の造成エリアにおいても、地下に縄文時代の生活面が泥炭層とともに遺存している可能性は高く、今後も注意を要する。今のところ泥炭層については分布の一部を把握したにとどまるが、今後はより詳細な泥炭層の広がりや時期、遺物の有無等について明らかにしていくことが課題である。

## （2）低地の遺構と利用形態

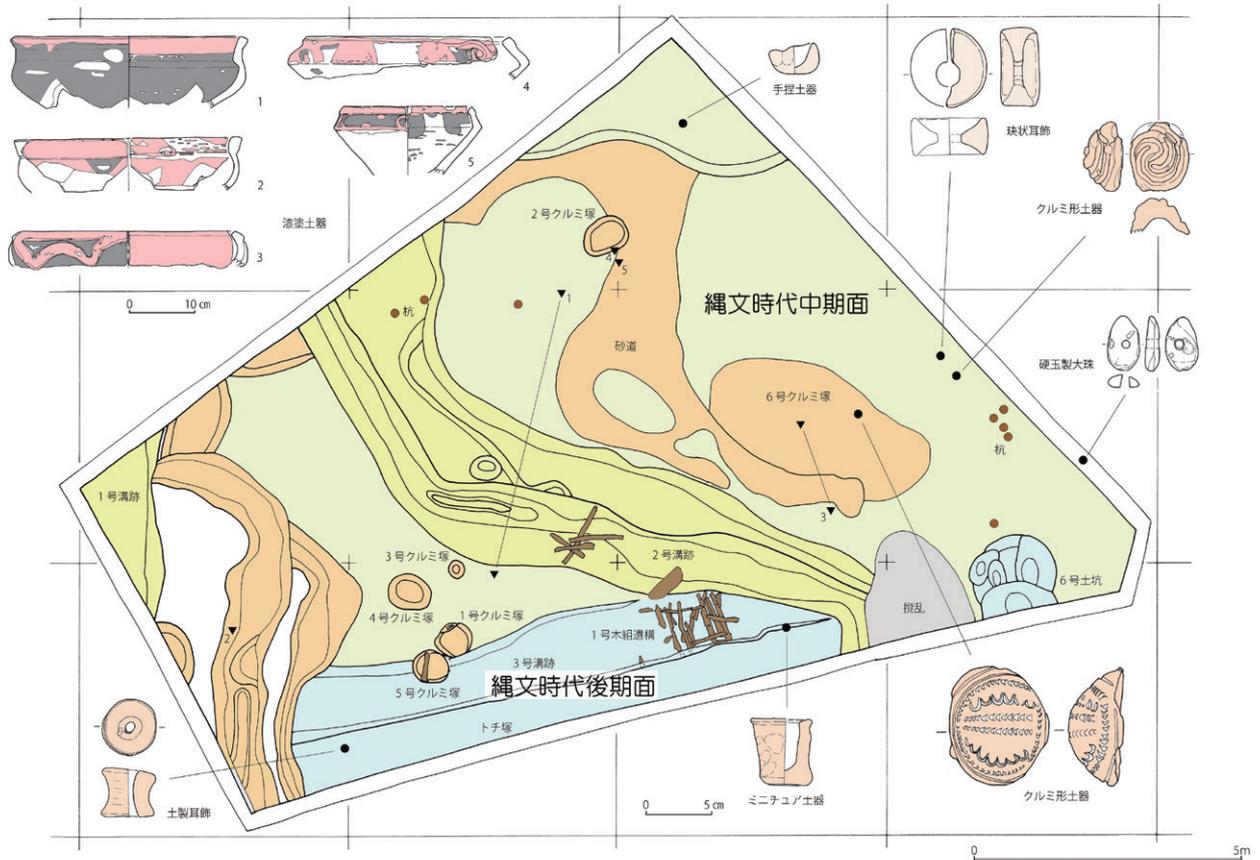
### ① 第4次調査区の遺構の構造と遺物

第4次調査区は縄文時代中期の環状集落と後期中葉集落が展開する台地直下に位置する。現状では雑木林に覆われた台地斜面の裾部から約10m離れるが、縄文中・後期に比定される泥炭層下に堆積する青灰色基盤層（V層）は、台地から傾斜する大里ロームの可能性が高い。

調査区の南東から北西に堆積する縄文時代中期の砂層（Ⅲ層）と泥炭層（Ⅱa・Ⅰb・Ⅱb層）が堆積するエリアは、砂層の堆積状況から小河川の流路跡と想定され、流路の窪みに泥炭層が堆積したとみられる。当時の湧水点の位置については判然としないが、仮に現代のデーノタメ付近が湧水点であったとすれば、調査区はデーノタメから湧出した流路のすぐ下流ということになる。調査区北東部には白濁色粘土層の高まり（A層）があり、台地側に対する対岸と認識され、流路の幅はおよそ8mと想定される。中期の遺構はこの流路跡を中心にクルミ塚、溝跡、土坑、砂道、杭列等が認められ、これらの遺構を含む泥炭層では多量の中期土器、漆塗土器、石器等を包含する（第324図）。

また、調査区南部の台地縁にはこれに沿う支流の一部が認められる。支流は西から東方へと流れており、主として縄文時代後期の遺構と遺物が分布し、遺構では溝跡、木組遺構、トチ塚、土坑などが確認された。

なお、これら縄文時代の生活面を壊すように弥生時代末から古墳時代初頭の2号溝跡が本流に沿って掘削されており、オール状木製品、棒状木製品等が出土している。



第324図 第4次調査区の主な遺構と遺物

## ② 縄文時代中期の水場空間

調査区の大半に分布する縄文時代の砂層（Ⅲ層）と泥炭層（Ⅱa・Ⅱb層）では、中期の土器・石器を多く包含する。その大半は破損して接合関係に乏しく、個体に復元できる土器が極めて少ないのが特徴である。おそらく集落で破損した土器を台地下の低地まで運び、廃棄したものと想定される。

土器の廃棄は台地上及び段丘状の低位面においても認められ、第2次調査の8・10・16号住居跡では住居の廃絶後に破損した土器を一方向から投げ込んだ状況が、低位面（Ⅲ区E地点）でも廃棄に伴う土器集中が認められた。このように、土器の廃棄は集落内外の複数のエリアで行われているが、第4次調査区の廃棄は範囲と量で群を抜く。その状況はあたかも泥濘な湿地に土器を撒き、足場を固める意図があったかのようであった。

このように調査区内から出土した土器は、一部に前期諸磯c式土器を含むものの、大半は中期の所産で、Ⅲ層・Ⅱ層から出土する土器は加曾利EⅠ・Ⅱ式を主体とし、これに勝坂Ⅲ式と阿玉台Ⅰb～Ⅳ式が共伴する状況であった。ちなみに、後期の遺構、泥炭層中から出土する土器は極めて少なく、そのあり方は中期と後期で対照的である。

なお、中期の土器中には多くの漆塗土器を含んでいた。器形がわかるものは、ほぼ浅鉢形に限定され、土器型式は加曾利E式を中心とし、わずかに阿玉台式と勝坂式土器を含む。

### a 植物遺体の廃棄

泥炭層では土器とともに多くの植物遺体が検出されている。調査中に目視で取り上げた植物遺体は47分類

群、遺構の覆土等から水洗選別で検出されたものは117分類群である。このうち最も顕著な植物遺体はオニグルミ核で、縄文時代中期・後期を問わず、砂層及び泥炭層中に含まれていた。オニグルミ核は調査区でカウントしただけでも約12,000点にのぼる。未カウントの資料を含めるとその数量は膨大であり、核そのものが大きく遺存状態も良いため、とくに存在感が大きい。なお、縄文時代に多用されるクリについては、調査区における果実の検出は限られており、クリの加工、とくに皮剥きやその後の一括廃棄を裏付けるような出土状況は認められなかった。

一方、後期の泥炭層及び砂層ではクルミ核以上にトチノキ種子がとくに目立っており、これら大型の植物遺体に限れば、縄文中期ではオニグルミ、後期ではトチノキが際立った存在といえる。これらの植物遺体は、自然落下のもの、動物の食痕を残すものを含むため、すべてが人に利用されたものとは限らない。確実に廃棄されたものと特定できるのは、クルミ塚及びトチ塚から出土した植物遺体である。

#### b クルミ塚出土のクルミ核

クルミ塚は第4次調査区内でとくに注目すべき遺構で、1号から6号までの6基が検出されており、いずれも縄文時代中期の所産であった。これらクルミ塚のうち2号・6号クルミ塚では砂を敷いた砂道跡が接しており、層位的にも同時期に比定され、クルミ塚の形成に関わっていた可能性が高い。

クルミ塚は遺構の形態により、①平坦形、②皿形、③円筒形、④広範囲累積形、に分類できる。6基のクルミ塚のうち、①平坦形は3号クルミ塚、②皿形は1・2・4号クルミ塚（第325図）、③円筒形は5号クルミ塚、④広域累積形は6号クルミ塚が該当する。

これらの規模は1・2・4・5号が長径で70～90cm、3号が40cmと小規模で、6号のみが長径で約5mと大きい。もともと、1～5号は周囲のクルミ核の分布と比較しても核の集中状況が顕著であるが、6号はやや核の集中が散漫で（第IV章第194図）、中央が凹面を呈して覆土は4層に分類され、時間をかけて形成されたものである。年代測定では勝坂Ⅱ式期～加曾利EⅡ式期と時間幅が認められた（工藤2017）。ちなみに、その他のクルミ塚の時期は第44表のとおりで、2号クルミ塚は加曾利EⅡ式期、1・3～5号クルミ塚は加曾利



第325図 2号クルミ塚

第44表 クルミ塚一覧

No.	遺構名	形態	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)No.	クルミ核数	時期
1	1号クルミ塚	皿形	0.70	0.65	0.80	137	加曾利EⅢ式期
2	2号クルミ塚	皿形	0.90	0.65	0.90	262	加曾利EⅡ式期
3	3号クルミ塚	平坦形	0.40	0.25	—	109	加曾利EⅢ式期
4	4号クルミ塚	皿形	0.81	0.62	0.15	553	加曾利EⅢ式期
5	5号クルミ塚	円筒形	0.70	0.62	0.38	472	加曾利EⅢ式期
6	6号クルミ塚	広域累積形	4.80	2.50	0.78	約3,000	勝坂Ⅱ式～加曾利EⅡ式期

※時期は年代測定による

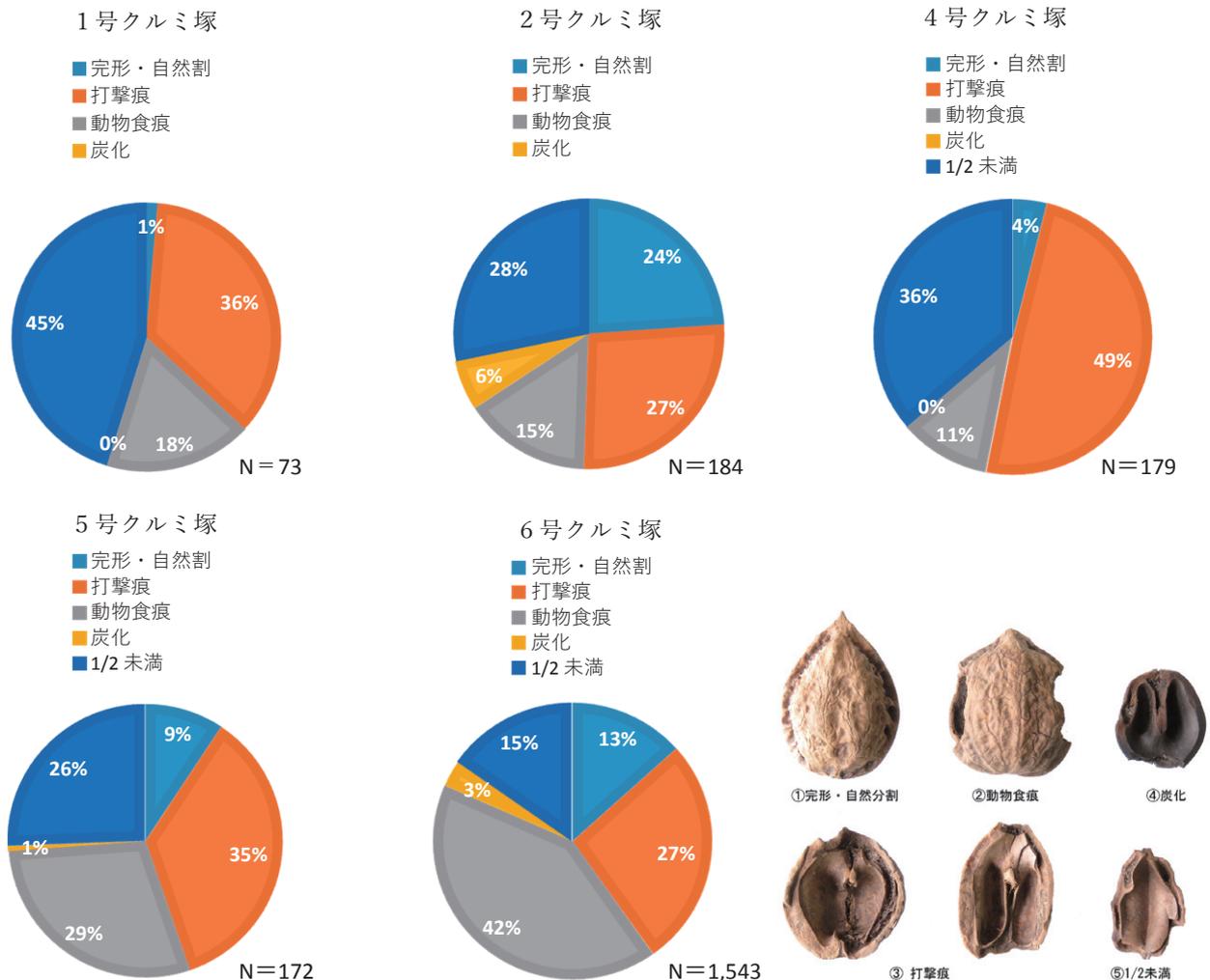
Ⅲ式期に比定されている<sup>(13)</sup>。

また、クルミ塚から出土したクルミ核の内訳は、目黒まゆみ氏等の分析によれば、核は遺存状態から①完形、②1/2、③1/2未満に分類される。さらに①はa痕跡なしとb動物食、②はa自然の割れ、b動物食痕のほか、c動物食痕炭化 d打撃痕、e打撃痕炭化、f不明、の5つに細分されるという（目黒・佐々木2017）。

ここでは上記の分類をやや単純化し、①完形と自然分割、②動物食痕、③打撃痕、④炭化、⑤1/2未満と不明に分類してそれぞれの割合を示してみた（第326図）。その結果、1・2・4・5号クルミ塚では、⑤1/2未満を除くと人為による③打撃痕が最も多く、1号クルミ塚では36%、2号では27%、4号では49%、5号では35%を占める。これに次ぐのは②動物食痕または①完形か自然分割で、①完形・自然分割は2号クルミ塚で24%、②動物食痕は5号クルミ塚が29%と多い傾向を示す。

なお、規模の大きい6号クルミ塚では②動物食痕が42%と最も多く、③打撃痕が27%、①完形・自然分割が13%と次いでおり、他の小規模のクルミ塚とは傾向が異なる。動物食痕が圧倒的に多い理由としては、6号クルミ塚の範囲が不明瞭なためにクルミ塚以外のクルミ核もカウントしているか、規模が大きいため人為による廃棄核とともに、周囲から雑多な核が混入した可能性が考えられるであろう。

以上のうち、総じて割合の多い③打撃痕のあるクルミ核は、核の頂部と底部を欠損するが、これは台石上に立てたクルミ核に対し、叩き石を用いて垂直方向に打撃を加え、核を分割した結果と想定される。本来ク



第326図 クルミ塚出土のクルミ核の分類と割合



第327図 クルミ形土製品出土状況



第328図 尖頭状木製品の端部（表・裏）

ルミ塚とは、人がクルミを食用とするために加工し、その残滓となった核を集積した遺構であるとすれば、このように人為で破損したクルミ核が多い傾向は当然の結果と理解できる。

ところが、クルミ塚を構成するクルミ核の中には、上述のように加害のない完形や自然分割のほか、アカネズミやリス等の食痕をもつ核を無視できない割合で含んでいる。また、クルミ塚の中にはクルミ核の他にも後述する微細なベリー類等の種実のほか、一部には土器、漆器片等も共伴していた。したがって、クルミ塚では生業活動で生じたクルミ核や種実の残滓とともに、生活用具の破損品も同時に廃棄していた可能性があり注意しておく必要がある。

6号クルミ塚ではクルミ形土製品が出土しているが（第327図）、こうした呪いの道具を共伴することは、本遺跡のクルミ塚がクルミ核を主体とする種実類の残滓とともに、土器等の生活用具を同時に埋納する儀礼的な痕跡であった可能性をうかがわせている。縄文人の生業活動においては常に儀礼的な行為を伴っていたと想定すれば、クルミ塚はこうした生業活動と儀礼の一体性を示す痕跡として評価すべきかもしれない。

また、クルミ塚でもう一つ注意しておきたいのは、数量は少ないものの、④の炭化したクルミ核を含む点である。炭化した核は動物食痕を有するものと人為的な打撃痕を有するもの双方に認められた。炭化は人の燃焼行為に起因するが、クルミ核は油分を含むため、燃焼した際の火力が極めて強いという。多くの核が炭化せずに遺存している状況に照らせば、とくに燃料として積極的に利用されたとはいえないが、一部の炭化核はこうしたクルミ核の性質を期待した燃焼の痕跡であるか、儀礼に伴う燃焼行為であった可能性についても想定しておきたい。

### c 小杭群と木製品

第4次調査区では縄文時代の杭を13点検出した。C4グリッドとE4グリッドに偏在し、縄文時代の低地遺跡としては出土数が少ない。C4グリッドでは6本が東西に並んでやや蛇行した列状を呈するが、極めて小規模である。また、E4グリッドでは7本が集中するが列状とはいえない。このうち、北側の4本は丸木ではなく加工された材が打ち込まれており、2点はクヌギ材をミカン割りしたもの、もう2点はクリ材を用いた割材であった（第268図13～15）。ミカン割りした2点は割り面が平滑で、笏形、刀形の木製品を杭に転用したものであろうか。笏形の1点は（同図14）は年代測定によると加曾利EIV式期という結果であった。なお、この小杭群から1m北にはクルミ形土製品と珧状耳飾、1.2m南東にはヒスイ製大珠が出土しており、これらを儀礼の痕跡と想定することもできる。

また、D4グリッド出土の尖頭状木製品（同図16）はクヌギ材をミカン割しており、尖頭部を丁寧に磨いて平滑にした優品である（第328図）。その先端は民俗事例にみられる「粥ばし」に似た形態を呈しており、神の依代として用いられた可能性がある。年代測定では勝坂Ⅱ式期という結果で（工藤2017）、集落形成の極初期の所産として注目される。

### ③ 縄文時代後期の水場空間

縄文時代後期の遺構群は調査区の南部に限定され、溝跡や土坑等の遺構、植物遺体が認められた。このエリアは台地縁に沿う支流の流路跡で、底面の傾斜から本流とは逆の東方向へ流れ、本流に合流していたと想定される。

この流路跡では、基盤層（V層）の上に暗黄褐色砂層（b2層）、その上に黄褐色砂層（b1層）が堆積し、さらにb1層を削るように幅約1.4mの3号溝跡が流れ、暗褐色泥炭質層（a層）が覆土となっている。3号溝跡の覆土中には木材、植物遺体を多く含むが、植物遺体の中で最も顕著な存在はトチノキの種皮である。とくに3号溝跡の南側はトチ塚の一部と想定され、b1層中にはトチノキの破碎した種皮を主体とし、トチノキの未熟果も多く認められた。

また、3号溝跡の東部では棒状の割材や丸木を敷いた木組遺構が検出されており注目される。

#### a トチ塚

トチ塚は調査区南辺の壁断面にトチノキの種皮が東西8m、厚さ10～15cmの規模で堆積している状況を観察したことで認識した。調査区側のb2層中にはその一部が広がっていたが、種皮の分布はやや疎らであった。同エリアは台地上の集落から斜面を下りた低地の水際にあたり、ここで縄文人がトチノキの皮剥き等の加工作業をした痕跡と認識される。

なお、トチ塚の北辺にあたる3号溝跡の南側は、トチノキの種皮とともに未熟果が共伴していた（第329図）。未熟果は母樹から落下したものと想定されるため、縄文時代後期には台地の斜面から低地にかけて、とくにトチノキ林が覆っていた景観を想定することができる。

#### b 1号木組遺構と問題点

1号木組遺構は3号溝跡の東部に位置し、支流部の流路方向と直行するように棒状の割材と丸木を平行して敷いた遺構で、完掘時には3号溝跡の規模を超えた木敷遺構であることが明らかとなった。

本遺構の検出時は、3号溝跡に設けられた木組遺構であると認識していた（第349図）。3号溝跡の覆土を精査する段階から木材が集中し始め、掘り進めるに従って木敷きの上にこれと直行する棒状の材が認められ、これら交差する材で柵形を組んだ状況が看取されたためである。また、この棒状の木材の周辺では材に沿ってトチノキ種子片が集中しており、トチノキ種子の「水さらし」を想定させる状況がこの認識を強めたといえる。

しかしながら、調査を進めると基底部の木敷遺構は3号溝跡を超えて南側へと伸びており、3号



第329図 トチノキの種子（成熟果と未熟果）

溝跡で完結する遺構でないことが明らかとなった。このため、本遺構の構築当初は支流の流路に広くデッキ状に棒状の材を敷き並べており、何らかの作業に伴う施設であったと想定されるが、本遺構を砂層（b1層）が覆い、これを浸食する3号溝跡が形成された段階で、この木敷の一部を再利用して小規模な木組遺構とした可能性もあろう。

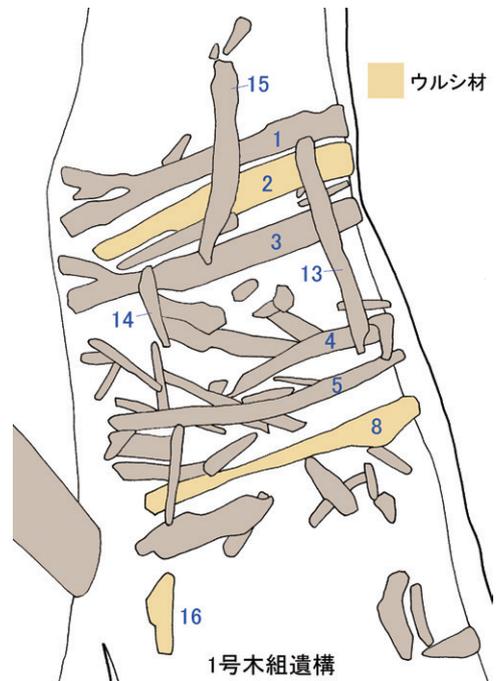
なお、本遺構では施設を固定するための杭がまったく認められず、桁形に材を構築し、再利用したという根拠に乏しい。初期の木組遺構として知られる寺野東遺跡 SK077遺構（堀之内式期）は、溝に材を敷き並べる点で共通するが、その周囲に杭を密に囲う状況が異なっている（江原1997）。

ちなみに、1号木組遺構の構成材のうち、樹種が明確な材はクリ6点、ウルシ3点、カエデ属4点、その他3点で、それぞれの材の樹種及び年代分析の測定値は第45表のとおりである。構成材のうち、ウルシ材を中心に4点の年代測定を行ったところ、その結果は加曾利 EIV～称名寺Ⅱ式期とやや年代幅が認められた（第Ⅵ章第2節）。このうち、杵材の年代もその範囲に位置しており、木敷材の年代幅には収まっていることになる。縄文中期末から後期初頭にかけて木敷遺構が長期に利用され、改修または再利用されていたことを示すものであろうか。いずれにしても、木組遺構の初期の事例とすることには問題ないであろう。

なお、木組直下から出土したトチノキ種皮は、年代分析で堀之内Ⅱ式期～加曾利 B I 式期初頭頃という結果であった（第Ⅵ章第2節）。このため、トチノキ種子と木組遺構との年代的な整合は取れていないが、木組遺構直下のトチノキが新しいという矛盾もあり、今後検討の余地を残している。

第45表 1号木組遺構の樹種と年代測定値（工藤2017）

No.	遺物No.	樹種	較正年代 (cal BP, 2σ)	時期 (土器型式)
〔敷材〕				
1	100	クリ		
2	101	ウルシ	4580-4435 (93.9%)	称名寺式期
3	102	カエデ属		
4	103	カエデ属		
5	104	クリ		
6	105	カエデ属		
7	106	クリ		
8	107	ウルシ	4650-4525 (64.5%)	加曾利 EIV式期
9	109	クリ		
10	111	コナラ節		
11	112	コナラ節		
12	113	オニグルミ		
〔杵材〕				
13	1	カエデ属	4525-4420 calBP (95.4%)	称名寺式期
14	2	クワ		
15	3	クリ		
16	115	ウルシ	4430-4290 (95.4%)	称名寺式期

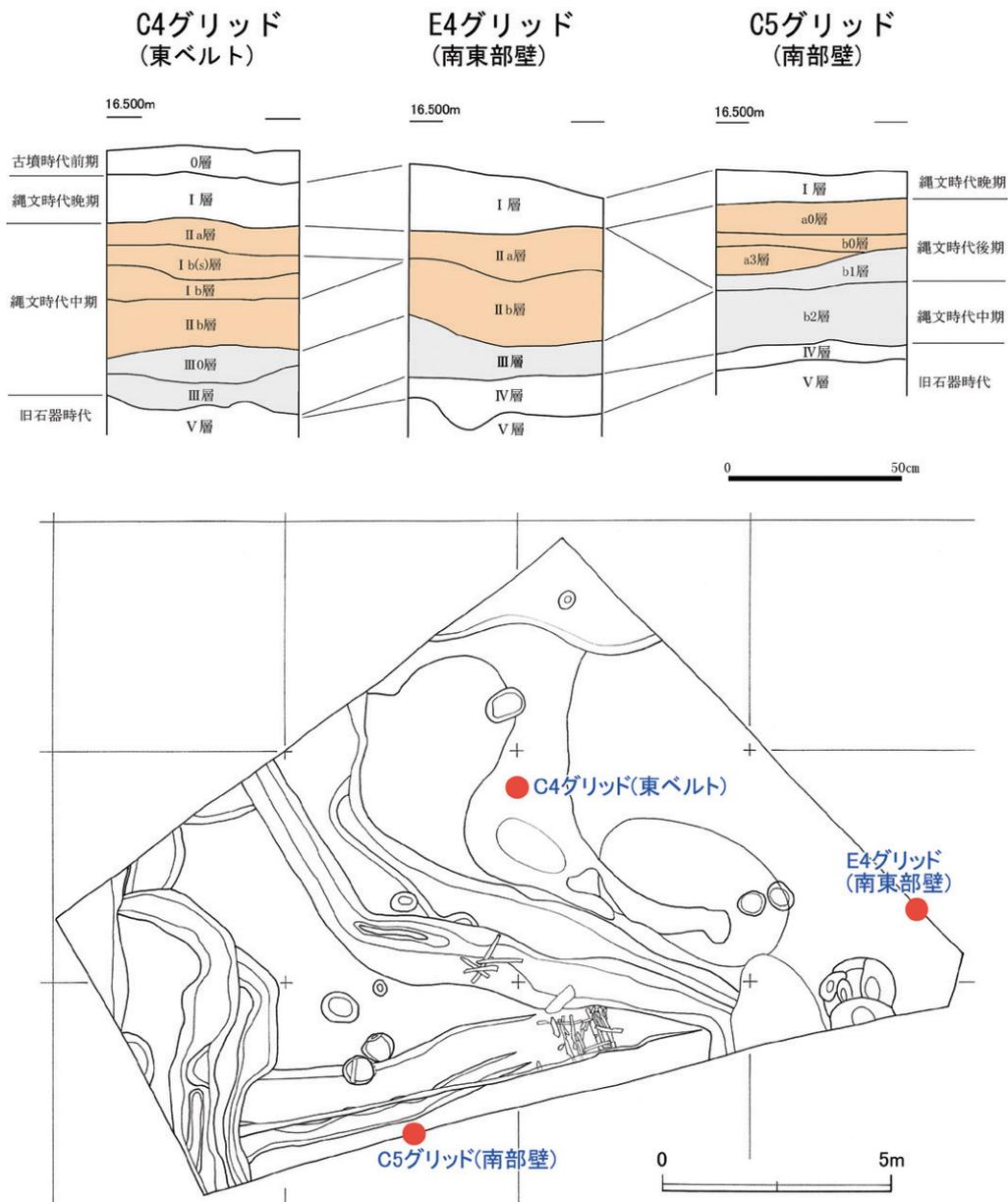


第4節 集落の環境と資源利用

(1) 周辺の環境と変化

① 花粉分析にみる植生と変遷

第4次調査では本遺跡が営まれた当時の植生を明らかにするため、埼玉県立自然の博物館の協力により花粉分析を行った。第1回目の花粉分析は調査中の平成20年5月1日に調査区南東部（E4グリッド）において堆積物をサンプリングし、楡井尊氏（同館学芸員）が分析した。その後、楡井氏は平成28年度に縄文時代中期と想定する調査区中央部（C4グリッド）及び後期と想定する調査区南部（C5グリッド）の堆積物についても追加の花粉分析を行っている（第330図）。このため、第4次調査区内で花粉分析を行ったのは都合3地点となる<sup>(14)</sup>。



第330図 第4次調査区の花分析地点と基本層序

さらに、平成29年度の低位面北部（デーノタメ付近）を対象とする内容確認調査では、縄文時代後期中葉に比定される堆積物をサンプリングし、翌年度に吉川昌伸氏に花粉分析を依頼した。これら花粉分析の結果は第Ⅵ章第3節に掲載しているが、ここではこれらのデータを基に、改めて遺跡の植生環境について概観してみたい。

第330図の基本層序に示すV層（青灰褐色基盤層）は、縄文時代の砂層・泥炭層下の基盤層である。楡井氏の分析によれば、このV層では台地上にマツ属単維管束亜属やトウヒ属が多く、コナラ属コナラ亜属を交える針広混合林が広がり、低地ではハンノキ属が優占しているという。冷温帯北部～冷温帯の気候の植生であり、完新世初頭の氷期から後氷期の移行期に比定されており、前述のとおりV層を大里ローム層に比定する結果と整合する。

このV層とI層の間の堆積物が縄文時代中期～後期層に比定することができ、E4・C4グリッドのⅢ～Ⅱa層は主として中期、C5グリッドのb2層は中期、b1層とa層は後期の堆積物に比定され、中期と後期の泥炭層は不連続に堆積している。ここで検討するのはE4・C4グリッド、C5グリッドにおける縄文時代中・後期層中の花粉分析の結果である。

## ② 低地の植生とクルミの利用

前述のとおり、V層段階の低地ではハンノキ属が優占しており、おそらく樹種はハンノキと想定される。その後、V層と大きな時間的ギャップをもって堆積する縄文時代中期のⅢ層～Ⅱa層では、低地ではクルミ属が顕著な増加傾向を示しており、減少するハンノキ属と好対照をなすことから、低地では集落の形成とともにクルミ属が優占していったとみられる。

調査区から数万点のオニグルミ核が出土していることはこの分析結果と整合し、また、このことから分析結果のクルミ属はオニグルミに比定される。また、C5グリッドのⅢ層相当に比定されるb2層では、ハンノキが急減し、クルミ属が増加しており、同様の傾向を示している。

花粉分析におけるクルミ属の割合はE4グリッドⅡa層のピークで約25%、C4グリッドⅠb層で約20%、C5グリッドb2層で約20%となっており、いずれも大きな割合を占めている。おそらく、縄文中期の集落下の低地はオニグルミが優占する景観であったと想定されよう。

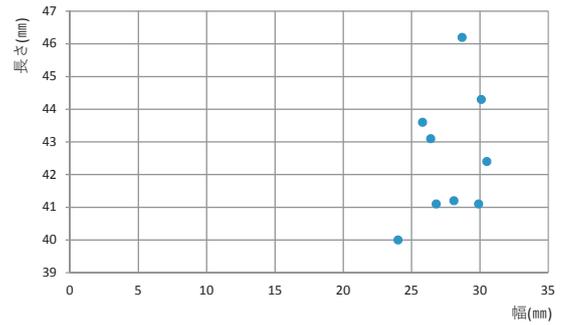
なお、近隣における縄文中・後期の遺跡との比較では、同時期の花粉分析を行ったさいたま市南鴻沼遺跡のクルミ属は10%未満（森2015）、同大木戸遺跡では約7%（金子2018）、県外の東京都東村山市下宅部遺跡では10数%（田中2006）、神奈川県相模原市勝坂遺跡（鈴木2015）では5%未満という結果である。いずれの遺跡でも本遺跡の比率を下回っており、これら遺跡の低湿地では必ずしもクルミ属が優占していない。現在のオニグルミの生育状況をみると、北本市内の河川敷や谷津では点在または小規模な疎林状を呈する事例が多く、ヤナギ類やハンノキがしばしば広範な低地林を形成するあり方とは異なっており、同様の生育状況が想定されよう。

ちなみに、第4次調査区から出土したオニグルミ核のうち、遺構から出土した完形の核366点の長さを計測したところ、中期の核は19.4～46.2mmで平均は31.8mm、後期の核は23.4～46.1mmで平均32.5mmという結果であった（目黒他2017）。これと比較するため、市内に分布するオニグルミ核を採集して計測したところ、北本自然観察公園の65個体の長さの平均は35.7cm、最大で41.1cm、最小で26.2cm、荒川河川敷で採取したオニグルミ核59個体の長さの平均は33.2mm、最大で34.8mm、最小30.3mmであった<sup>(15)</sup>。

このためデーノタメ遺跡出土のオニグルミ核は現生のクルミ核よりも平均値で0.7～3.2mm下回るが、目黒氏が指摘するように、第4次調査区の2号クルミ塚では長さ46.2mm、3号溝跡では46.1mmと大型のクルミ核

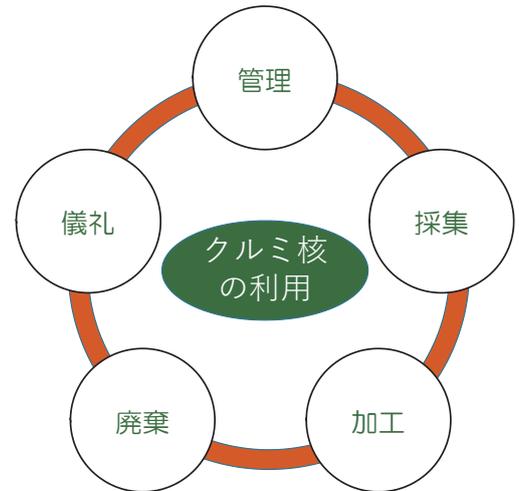
第46表 長さ40mm以上のオニグルミ核

No.	遺構	番号等	長さ	幅	厚さ	備考
1	2号クルミ塚	5-1	44.3	30.1	27.2	完形
2		5-2	43.1	(26.4)	19.4	一部欠損
3	4号クルミ塚	21	42.1	—	(28.2)	アカネズミ食痕
4	5号クルミ塚	25	41.1	26.8	25.3	完形
5	6号クルミ塚	Ⅲ層	41.1	29.9	26.0	完形
6		Ⅲ層	40.0	24.0	21.8	完形
7		袋402	40.6	—	26.7	アカネズミ食痕
8	6号土坑	2層	41.2	28.1	22.0	完形
9	3号溝跡	No.173	42.6	—	20.5	アカネズミ食痕
10		No.226	42.4	30.5	—	アカネズミ食痕
11		463	42.1	—	20.1	アカネズミ食痕
12		433-1	46.2	28.7	26.0	完形
13		433-2	43.6	(25.8)	24.3	アカネズミ食痕



第331図 40mmを超えるオニグルミ核の縦横比

を含んでおり、一部では大型化の傾向を看取することができる。この2点の計測値は、核は高さに比して幅が比較的狭く、縦長の傾向を示している。そこで、参考までにクルミ塚等の遺構から出土した長さ40mm以上のオニグルミ核を抽出し、その計測値をまとめたのが第46表である。13点のうち約半数はアカネズミの食痕があるため、大型のクルミは逸早くアカネズミに食害されており、まさに人とネズミが競合関係にあったことがうかがえる。また、第331図は長さとのわかる9点について、その相関を散布図で示してみた。その結果、長さ40mm～46mm強のオニグルミの幅は25mmから30mmの間にはほぼ収まるが、その分布は長さの値が増しても幅は大きく変動していない。つまり、大型のクルミ核は縦に長さを増し、頂部がより尖がる形態を示すのが特徴である。



第332図 クルミ利用のステージ

なお、クルミの植生管理に関する研究は管見にして知らないが、以上のようなクルミ林の優占状況及び大型化した一部クルミ核等から、本遺跡では縄文人によるクルミ林の一定の管理を認めてよいと想定できる。

ただし、第4次調査区の後期層の花粉分析ではクルミ属が減少傾向にあり、10数%と上記の近隣遺跡と同様の割合を示していた。また、同調査区から約60m東方に位置する内容確認調査Ⅲ区D地点の後期中葉（加曾利BⅡ式期）の花粉分析でも、クルミ属は約7%という値であった（第Ⅵ章第3節（2））。後期段階ではトチノキが急増する傾向にあるため、相対的にクルミ属の比率が下がった可能性はあるが、本遺跡においてもクルミ属の林分は中期から後期にかけて減少していく傾向にあったことが想定される。

このようにみえてくると、本遺跡の縄文中期当時、集落下の低地ではクルミ林が広く優占しており、クルミ林の一定の管理がうかがえる。縄文人はこのクルミ林でオニグルミを収穫し、その場でクルミ核を分割、加工し、種子以外の残滓を廃棄してクルミ塚を形成した。同時にそれは儀礼的な側面も垣間見られるようである。

以上のように、クルミの利用にはいくつかの場面があり、これを示すと第332図のようになるであろう。

### ③ 台地の植生と変遷

#### a 花粉分析から

台地上の植生は、C4グリッド及びE4グリッドにおける楡井尊氏の花粉分析によると、縄文時代中期の段階（Ⅱ層）でコナラ亜属が高率を占め、次いでクリ、ニレ属、ケヤキ属、エノキ属、ムクノキ属、アカガシ属、カエデ属等が認められる（第Ⅵ章第3節（1））。コナラ亜属を中心とする落葉広葉樹林が広がっており、一部に常緑樹を伴っていたことがわかる。とくに虫媒花であるクリが比較的高率であることは、至近の集落周辺にクリの林分が優占していた状況がうかがえる。また、E4グリッドではⅡa・Ⅱb層において虫媒花であるウルシの花粉が少量検出されており、やはり至近に管理されたウルシの林分が存在していた証左となろう。なお、C4グリッドではウルシの花粉が認められていないが、C4グリッドがE4グリッドよりも約6m台地側から離れているためと推測される<sup>(16)</sup>。

調査区南部のC5グリッドは縄文中期とともに後期の層準を含んでいる。集落形成期の層位は基盤層上のb2層で、考古学的な調査の所見では縄文中期にあたり、その上の層準となるb1～a0層は土器の出土に乏しいが縄文後期前葉から中葉に比定される。

楡井氏によるこれら層準の花粉分析では、縄文中期のb2層段階ではC4・E4グリッドの分析結果とほぼ同様の植生で、クリが高率を占め、トチノキが増加していく傾向を示している。その後、b1～a0層の後期段階でもこの傾向が継続し、とくにトチノキの伸長が著しく、a2層段階では風媒花のコナラ亜属を上回って約25%とピークをなしている。吉川昌伸氏の調査によれば、トチノキの花粉は樹幹から3～6mの範囲で10%という結果であることから（吉川2019）、C5グリッドはまさにトチノキ林の内に位置しており、その林分は他の風媒花の花粉を低率とするほどの厚みをもっていたということであろう。

このトチノキがピークを迎えるa2層は、年代測定では堀之内Ⅱ式期に比定されている（工藤2017）。平成27年度の内容確認調査によって、サンプリング地点から約90m南方の台地上では、堀之内Ⅱ式期～加曾利BⅠ式期の集落が展開していることが明らかとなっており、この集落造営時にトチノキの利用がピークとなるのである。a0層段階以降、トチノキは急速に減少に転じるが、これと相反する傾向を示すのが台地上ではエノキ属/ムクノキ属、低地ではクルミ属という結果となっている。

また、低位面の直下（内容確認調査Ⅲ区D地点）においては、縄文時代後期中葉の泥炭層が遺存している。出土遺物は加曾利BⅠ・Ⅱ式の土器を中心としており、年代分析においても同時期との結果が得られている。この堆積物の花粉分析の結果、クリ及びトチノキの比率はともに40%を超える高率であった。このため、分析を行った吉川氏は「分析地点の傍までクリとトチノキの樹冠が広がっていたと考えられる。」とし、風媒花の花粉の比率が低いことから「調査地点の周辺ではクリやトチノキが優勢で、コナラ亜属やエノキ属－ムクノキ属は少し離れた場所に分布していたと推測される。また、周辺の林にはカエデ属やムクロジ属、コクサギ属、クルミ属、ケヤキ属、カヤ類なども混成していただろう。」と所見を述べている。この他「細粒微粒炭が多量に含まれることから、調査区近傍の台地縁では植物燃焼を伴う生業が行われていた」と指摘しており、焼畑的な火入れを示唆している点は興味深い（第Ⅵ章第3節（2））。

この遺跡北部の低位面は本遺跡の地形の特徴の一つで、このエリアを縄文人がいかにか活用していたのか疑問となっていたが、花粉分析の結果により、トチノキとクリが優占する林が維持され、定期的に火入れの作業が行われていた可能性が明らかとなった。

なお、このD地点の花粉分析ではウルシは認められていない。やや湿潤に過ぎる環境のため、ウルシはさらに南の台地上に林分を設けていたのであろう。また、前述のとおりクルミ属の花粉は検出されているが、第4次調査区の後期面（b1層・a層）と同じく、トチノキ、クリ等の虫媒花を下回っており、クルミは

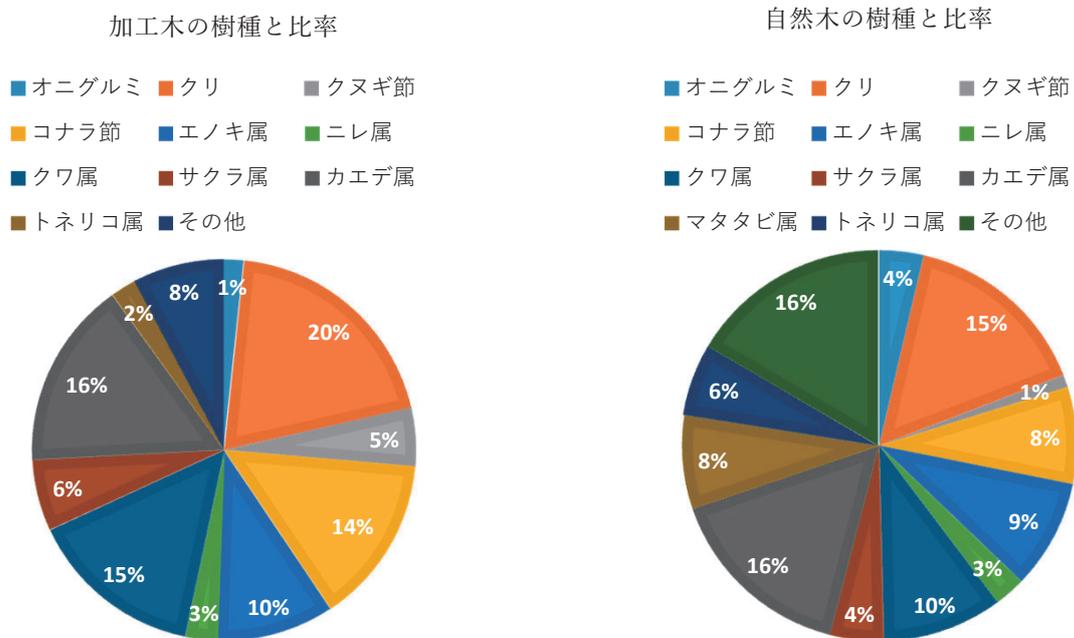
低地に疎林状に残されていた景観がうかがえる。

b 調査区出土の木材から

上記の花粉分析のほか、遺跡周辺の植生については第4次調査区から出土した自然木、加工木材からもうかがうことができる。能城修一氏が行った出土木材の樹種調査は総数が871点である（能城2017）。このうち縄文時代中期の自然木と分類した387点中では、カエデ属（15.8）が最も多く、クリが15.0%でこれに次ぎ、クワ（9.8%）、エノキ属（9.0%）、コナラ節（8.0%）、マタタビ属（7.8%）、サクラ属（4.4%）と続いている（第333図）。また、加工木材の182点では、板材と割材が大半を占めており、樹種はクリが19.8%と最も多く、カエデ属が15.9%、クワ属（14.8%）、コナラ属コナラ節（14.3%）、エノキ（9.9%）と続いており、上位の5種は変わっていない。クリの割合が大きいものの、他の遺跡との比較では突出しておらず、カエデ属が多いのが特徴といえる。カエデ属は花粉分析でも安定的に出現しているが、とくに材の利用が多かった点に注意したい。

能城氏はこれらの樹種の構成から「台地上にはコナラ節やエノキ節などからなる明るく開けた落葉広葉樹林が成立し、林床にはクワ属が多く、フジやマタタビ等の蔓植物が絡んでいたと想定される。」と指摘する（第Ⅵ章第6節）。

この傾向は後期においてもほぼ変わらず、カエデ属が13点、クリが9点と多い。一方で花粉分析において後期に拡大するトチノキの出現数が少ないのは注意すべき点である。一般にトチノキは花をつけるまでに長い年月を要するといわれ、自然状態で40～50年、人が手を加えても30年かかるという（吉川2008）。陽樹にして数年で実をつけるクリとは大きく異なっており、このためトチノキはクリのように容易に更新できず、管理方法や材の利用にも大きな違いがあったはずである。むしろ、果実の利用が優先された結果、積極的な材の利用は控えられていたものと想定される。



第333図 第4次調査区出土の加工木、自然木の主な樹種と割合  
(能城2017より作成)

## (2) 植物資源の利用

これまで、花粉分析を中心に集落周辺の植生環境について概観してきた。すでにオニグルミ核や木材等の縄文人の利用についても適宜触れてきたが、ここでは改めて縄文人の植物資源利用に着目してみたい。第4次調査に伴う自然科学的調査では様々な分析を行ったが、とくに木材ではウルシの利用について、種実では現場取り上げや水洗選別、土器の圧痕分析で抽出された大型植物遺体のうち、マメ類とベリー類の利用について整理する。

### ① ウルシの利用

能城修一氏の分析によれば調査区で確認された871点の木材のうち、ウルシ材は6点であった。その内訳は1号木組遺構の構築材である3点 (No.101・107・115)、4号土坑出土の半割材 (No.10)、B4グリッドⅢ層出土の割材 (第267・269図)、グリッドⅢ層出土の自然木である。第4次調査区は調査面積が狭小であること、杭等の木製品が少ないことからウルシ材の点数は多くないが、ウルシは木材、漆製品、花粉という3つのカテゴリで確認されている。このうち漆製品の内訳は、中期では①漆塗土器、②木胎漆器、③漆塗礫、後期では④腕輪、⑤漆塗糸が加わり、中期の漆器製作の道具ではパレットと想定される土器、ベンガラをすり潰した磨石がそれぞれ1点ずつ出土している。このうち、最も出土量が多いのは①の漆塗土器で、およそ1,000点が出土した。

前述のとおり、漆塗土器で器形がわかるものはほぼ浅鉢形、土器型式は加曾利E式が大勢を占め、わずかに阿玉台式と勝坂式土器を含んでいる。

土器の表面に漆を塗って描かれた文様は、基本的に黒漆を下地とし、その上に赤漆でモチーフを描いている。破片が多いためモチーフの全容を知ることはできないが、大別すれば無文で平滑な土器の表面にモチーフを描くものと、隆帯に沿って赤漆を塗ってモチーフを際立たせる2種がある。平滑面に描かれるモチーフは大柄で、渦巻文や三角文、台形文、半円文、T字文等を組み合わせ、数単位で横位に展開するものが多く、加曾利E式土器の一般的な文様とは異なるものである。こうした漆を塗る道具にはヘラ、ハケ、筆等を想定しているが、今のところ明確になっていない。第334図のように平行する条線を残すものはハケが想定され、第335図のように大ぶりのモチーフの縁を細線で整えているものでは、ヘラや筆を使い分けているようにもみえる。漆の塗り方や道具の特定については今後の課題である。

なお、台地の集落から出土する浅鉢形土器には、漆の塗膜を残すものが若干認められる。これらは器面が丁寧に磨かれて平滑をなし、漆を塗ることを前提として焼成前に器面を調整していることがわかる。第2次調査15号住居跡から出土した浅鉢形土器 (第336図) はその典型である。

また、土器の表面をコーティングする漆の塗膜は、本田貴之氏等の分析により赤色の1層構造と赤色、茶色の2層構造、茶色、赤色、赤色の3層構造が確認されている (第VI章第9節)。顔料は中期、後期ともに



第334図 刷毛目状の痕跡



第335図 モチーフ縁の調整



第336図 土器の調整面

ベンガラが用いられ、一部にはパイプ状ベンガラが認められている。

一方、木胎漆器として明確なものは中期の2号クルミ塚から出土した匙と後期の3号溝跡（1号木組遺構の西側）から出土した腕輪、6号クルミ塚出土の木胎漆器装飾部片（第Ⅳ章第270図）が注意される。このうち、2号クルミ塚の漆塗匙は黒色に発色しているが、黄土色と黄色漆の2層構造で、とくに黒色の顔料は認められていない。生漆に近いものを2層に塗布し、黒色に見せているものと想定される。

腕輪は直径約10cmの大きさと想定され、環状のヒゴをテープ状の素材で螺旋に巻き、その上に粘土状の胎を盛って成形した後、赤漆を塗って仕上げている。赤漆の顔料は水銀朱である。上部には連続する矩形の窪みがあり、単純に脱落したものか、Rを描く矩形のパーツをはめ込んだものか、今のところ不明である。

また、木胎漆器装飾部片は容器等の突起部先端の一部が遺存したものと想定されるもので、木部を失っている。上部の4か所にドーナツ形のスタンプ文が連続する。ただし、ドーナツ形は個々に形状が異なり、単純に同一の施文具（スタンプ）を押圧したものではない。このため、中央に穴の開いた円盤状のパーツを嵌め込み、それが脱落した痕跡とも考えられる。腕輪とともに構造分析を行い、腕輪の窪みはテープ痕、装飾部は白玉形のパーツをはめ込んだものと推定されているが（第Ⅵ章第10節）、今後も精査が必要であろう。

なお、縄文中期の赤色顔料はベンガラを、後期には水銀を用いる傾向にあるが、中期の4号溝跡から出土した木片は水銀を用いている。これが中期に遡るものかどうか今後も検討が必要である。

## ② 大型植物遺体からみた植物利用

調査区から出土した大型の植物遺体は、現場で目視によって取り上げたものと資料整理中に回収されたもの、さらに遺構の覆土や柱状サンプル等の堆積物から水洗選別によって抽出されたものに大別される。この他、土器に圧痕として残された種実等があり、ここではそれぞれの方法で得られた植物群のうち、とくに縄文人が積極利用したと想定される分類群について整理しておきたい。

### a 現場取り上げと水洗選別の大型植物遺体

現場取り上げの植物遺体については概ね遺構や出土層位の帰属時期から縄文中期と後期に分け、調査結果をそれぞれ掲載した（第Ⅵ章第4節（2）・（3））。この中で、縄文中期の木本植物では42分類群、草本植物では31分類群、合計73分類群が確認され、縄文後期では木本植物が23分類群、草本植物では4分類群の計27分類群が確認されている。

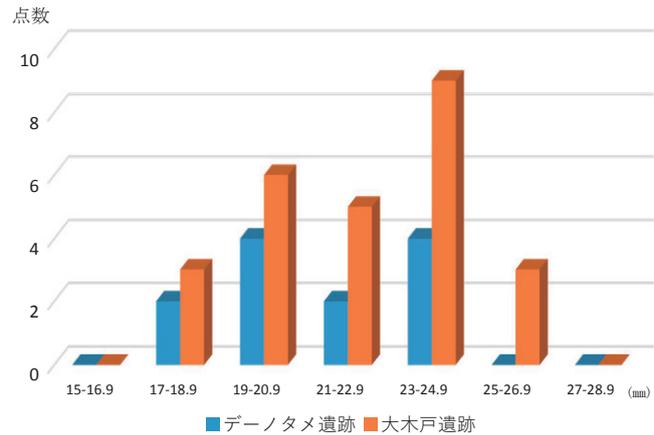
縄文中期の植物分類群のうち、食用可能なものでは堅果類のクリ、コナラ属クヌギ節、ナラガシワ、コナラ、コナラ属コナラ節、オニグルミ、トチノキがあり、その他にサクラ属サクラ節、キイチゴ属、ナシ亜科、クマヤナギ属、ヒメコウゾ、コウゾ属、クワ属、キハダ、クマノミズキ、ミズキ、マタタビ属、ニワトコ等のベリー類、ダイズ属（炭化）、アズキ亜属（炭化）、サンショウ、ヒシ属のほか、エゴマ、シソ属等の栽培種があげられる。

上記のうち、6号クルミ塚3層（分析No.24）ではサクラ属サクラ節核の完形が60点、欠損個体で105点が、キハダ種子も欠損を含めて28点が検出されている。6号クルミ塚では調査中にサクラ節核を目にすることが多く、部分的に集中箇所が認められた。

穀斗が目立っていたのはナラガシワである（第337図）。現在のナラガシワの分布は局所的で、平野部から山地下部の河川沿いに稀に認められるとされるが（須田2018）、縄文中・後期の低地遺跡ではさいたま市南鴻沼遺跡、大木戸遺跡、東京都東村山市下宅部遺跡等においても出土事例は少なくない。本遺跡では穀斗が認められることから、当時の低地に面した調査区周辺に生育していたと想定され、花粉分析が示すコナラ亜



第337図 ナラガシワの殻斗出土状態



第338図 ナラガシワ殻斗幅の分布

属はナラガシワが多くを占めていた可能性がある。縄文人のナラガシワ利用についてはその痕跡に乏しいが、食料として利用していたとすれば、果実の大きさという点では効率がよい堅果類であったといえよう。上記の遺跡ではいずれも殻斗の出土が顕著で、むしろ果実が少ない。果実はアカネズミ等が食したか、人が食用としたためであろうか。

なお、第4次調査区から出土したナラガシワの殻斗について、山本華氏が12点を計測しており（第VI章第4節（2））、殻斗幅は最小で17.9mm、最大で24.2mm、平均で21.2mmである。また、後期のナラガシワを多く検出した大木戸遺跡では、殻斗の最小幅が17.0mm、最大幅が25.9mm、平均は22.0mmで（金子他2018）、本遺跡を上回っている。中期から後期にかけて大型化したものかにはわかには断じがたいが、現生の殻斗幅を約20mmとすれば、縄文遺跡から出土するナラガシワの殻斗は比較的大きな傾向を示しており注意を要する。第338図に両遺跡の殻斗幅の分布を参考までに示しておく。

#### b 水洗選別の植物遺体

第4次調査においては各遺構の覆土、柱状試料等の堆積物をサンプリングし、佐々木由香氏の指導により市教育委員会が水洗選別して植物遺体を抽出、分類した。抽出、分類した植物遺体の同定はパレオ・ラボへ2回に分けて委託した。

同定された植物遺体は木本植物が44分類群、草本植物では73分類群の合計117分類群であった（第VI章第4節（1））。このうち、縄文人が有用利用したと想定される種実としてはブドウ属、キイチゴ属、サクラ属サクラ節、クマヤナギ属、ヒメコウゾ、コウゾ属、クリ、オニグルミ、トチノキ、キハダ、サンショウ、クマノミズキ、ミズキ、マタタビ属、ニワトコの木本類、コウホネ、ササゲ属アズキ亜属、ヒシ属、エゴマ、シソ属の草本類、合わせて20分類群があげられる。

上記のうち、コウゾ属、クワ属、キハダ、マタタビ属、ニワトコのベリー類はとくに出現頻度が高く、本遺跡の特徴の一つといえよう。このため、この5分類群については別項にて後述することとしたい。

このほか、出現頻度が比較的高い植物遺体としてはカラムシ属があげられる。勝坂Ⅲ式期の2号クルミ塚ではカラムシ属の果実が48点、加曾利EⅢ式期の5号クルミ塚では83点（同左）、1号木組遺構の直下b2層では61点（いずれも300cc中で欠損個体含む）が確認されている。カラムシ属はおそらくカラムシであろう。カラムシは「苧麻」ともいわれ、古来より布の原料とされており、縄文人もカラムシの繊維を衣類等の素材としていたと考えられる。クルミ塚出土の果実は意図的に廃棄されたものと想定されるが、至近の低地

に面した斜面には、カラムシが繁茂していた状況をうかがうことができる（第339図）。

c 土器圧痕

土器圧痕の調査は、第1次調査から第4次調査で出土地点を記録して取り上げた土器を対象とし、佐々木由香氏の指導の下、佐野隆氏、大網信良氏等の協力を得て平成25年8月25日と同年9月25日の2回にわたって行った。

その結果、144点の圧痕レプリカを作成し、このうち67点を種実圧痕として抽出している。その内訳は木本植物ではムクノキ核、エノキ核、コナラ節コナラ節幼果・子葉、キハダ種子、ミズキ核、ニワトコ核の6分類群、草本植物ではカナムグラ核、ダイズ属種子、子葉、ササゲ属アズキ亜属種子、シソ属果実の4分類群である（第Ⅵ章第5節）。

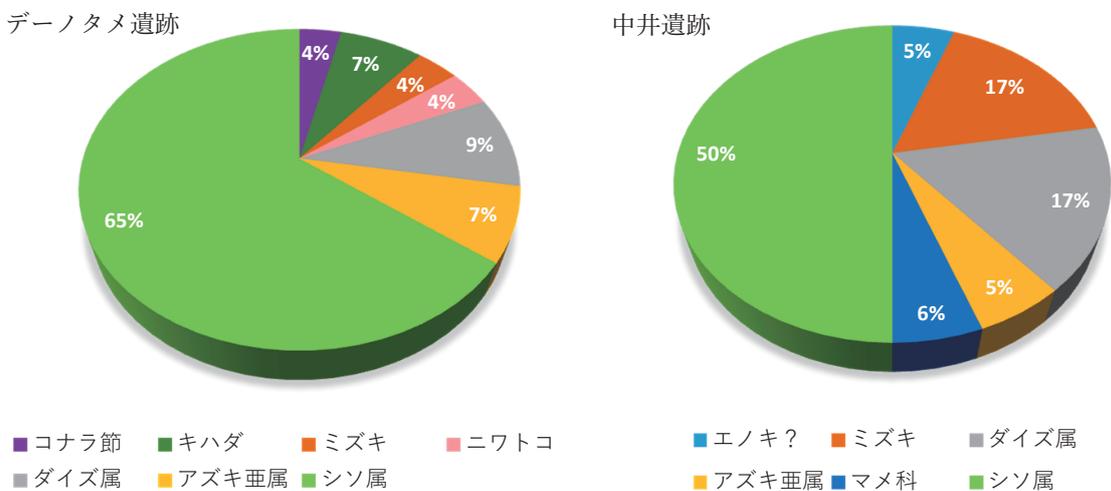
それぞれの出現数はシソ属が34点と最も多く、キハダとアズキ亜属の4点、ダイズ属3点、コナラ属コナラ節とミズキ、ニワトコが2点、ムクノキとエノキ属、カナムグラが各1点となっており、その割合を示すと第340図のようになる。

ちなみに、同じ江川水系で同時期に併存した中井遺跡における圧痕調査の結果では、土器圧痕の総数は18点でその種別と割合は第340図のとおりである（上野・佐々木2018）。両遺跡で共通するのはミズキ、ダイズ属、アズキ亜属、シソ属の4分類群で、いずれも縄文人が有用利用したと想定される。ともにシソ属が最も多く、ダイズ属、アズキ亜属のママ科がこれに次ぐ<sup>(17)</sup>。

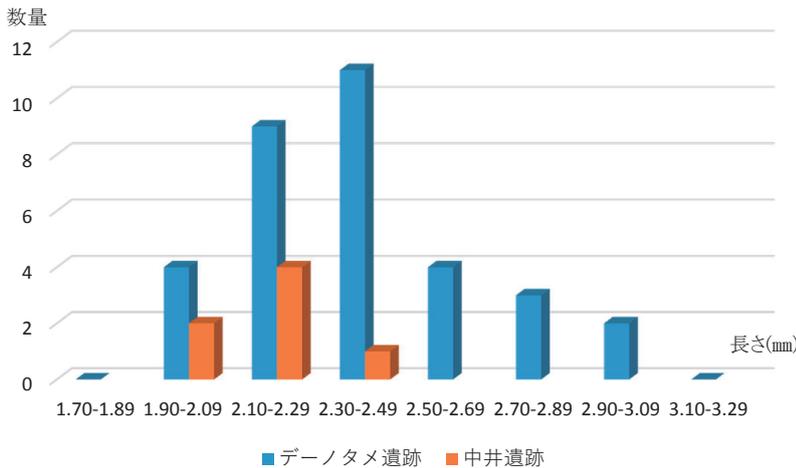
このうち最も多いシソ属は、これまで長さが2mm以上のものをエゴマ、2mm以下のものをシソ属として分類してきたようであるが、近年、那須浩郎氏らの指摘によって必ずしも大きさのみで分類はできないとされる（那須他2015）。参考までにデーノタメ遺跡と中井遺跡におけるシソ属の大きさの分布を第341図に示してみた。本遺跡では2.30~2.49mmの大きさが11点と最も多く、2.10~2.29mmの9点がこれに次ぐが、2.3mm以上が20点と半数を超えており、エゴマタイプのものが比較的多い傾向がうかがえる。



第339図 カラムシの生育状況  
(北本市高尾8丁目)



第340図 デーノタメ遺跡・中井遺跡における土器圧痕植物の種別と比率



	デーノタメ遺跡	中井遺跡
長さ(mm)	数量	数量
1.70-1.89	0	
1.90-2.09	4	2
2.10-2.29	9	4
2.30-2.49	11	1
2.50-2.69	4	
2.70-2.89	3	
2.90-3.09	2	
3.10-3.29	0	

第341図 シソ属の長さとおと数

### ③ マメ類の利用

近年、縄文時代のマメ類の栽培に関心が集まっている。上記の土器圧痕の分析では、マメ科についてはダイズ属種子3点、アズキ亜属種子4点が確認された。このうち、ダイズ属はいずれも勝式Ⅲ式土器に圧痕が残されており、1点は2号クルミ塚出土(KD2-No.3)、もう1点は縄文中期のⅡb層の出土(Ⅱb-No.43)である。

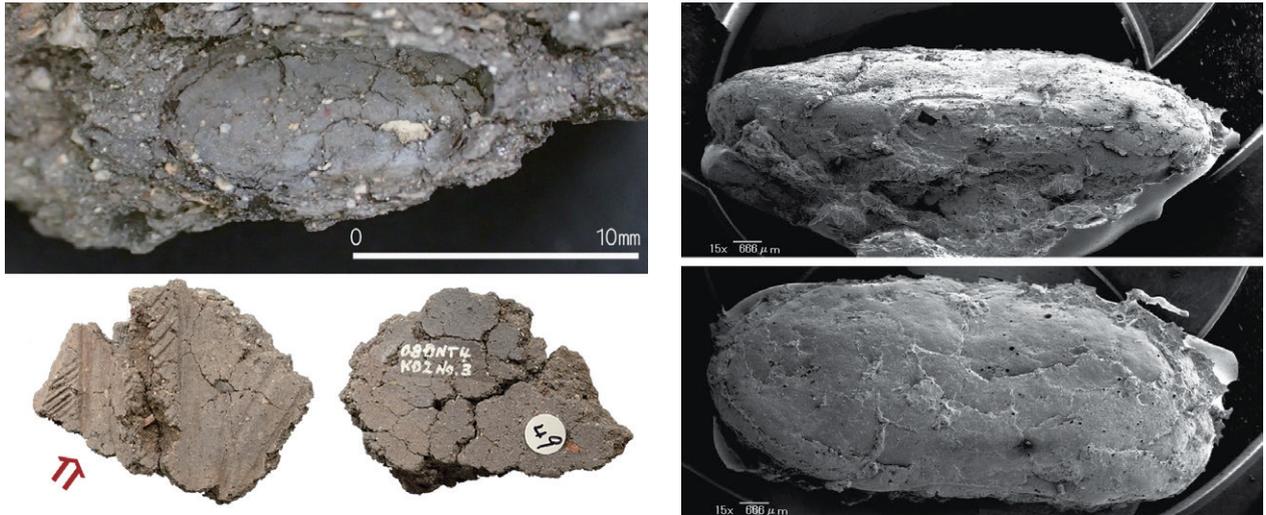
このうち、2号クルミ塚から出土した圧痕土器は、土器片の断面に種子圧痕が認められ、胎土中に埋め込まれていたものと想定される(第342図上)。この種子圧痕は長さが11.61mm、幅が計測範囲で4.81mm、厚さが3.20mmを測り、細長く扁平な形態が特徴で、現生のツルマメの最大長(10mm)を超える。栽培型と推定され、おそらく関東地方では初めて栽培型のダイズ属圧痕が確認された事例となる。この圧痕は山梨県北杜市酒呑場遺跡から検出された勝坂式土器の圧痕、長さ11.8mm、幅5.7mm、厚さ3.7mm(保坂他2008)とほぼ同形・同大であり、両地域において同タイプのダイズがほぼ同時期に栽培されていたことがわかる点で貴重な発見である。

また、第4次調査Ⅱb層出土の圧痕土器は土器片の内側2か所に種子圧痕が認められ(第342図左下)、長さはそれぞれ8.62mm、8.91mmである。ともにダイズ属の子葉と同定され、同一の子葉が分割して圧痕として残った可能性があり、報告者は水分を含んで膨張した後に分割したと推測する。

なお、県内では同じ江川水系の中井遺跡において認められたダイズ属の種子圧痕は、長さ4.92mm、幅2.87mm、厚さ2.10mm(上野他2018)、多量のダイズ属の圧痕を残す和光市越後山遺跡の事例では17点の平均で長さが4.4mm、幅3.3mm、厚さ2.9mmと現生のツルマメのサイズに近い(金子他2015)。これらとの比較では本遺跡で確認されたダイズ属の圧痕は栽培化の傾向が明瞭である。

なお、第4次調査区では圧痕の他に炭化したダイズ属の種子が6号土坑最下層から1点検出されている。この種子は年代測定の試料としたもので、測定の結果、縄文後期前葉の堀之内Ⅰ式期に比定されている(工藤2017)。

次にアズキ亜属について検討する。前述のようにアズキ亜属の種子圧痕は4点の土器で確認されており、全容が知れる圧痕は勝坂Ⅲ式土器に認められた2点である(第342図右下)。このうち1点は第1次調査8号住居跡から出土した深鉢形土器の外面に認められ、長さ6.14、幅3.96mm、厚さ(3.01mm)、もう1点は第2次調査15号住居出土の深鉢形土器の外面に認められ、長さ5.52mm、幅3.58mm、厚さ(2.16mm)という計測値である。



2号クミ塚出土ダイズ属圧痕土器（右は圧痕の走査型電子顕微鏡写真 山本華撮影）



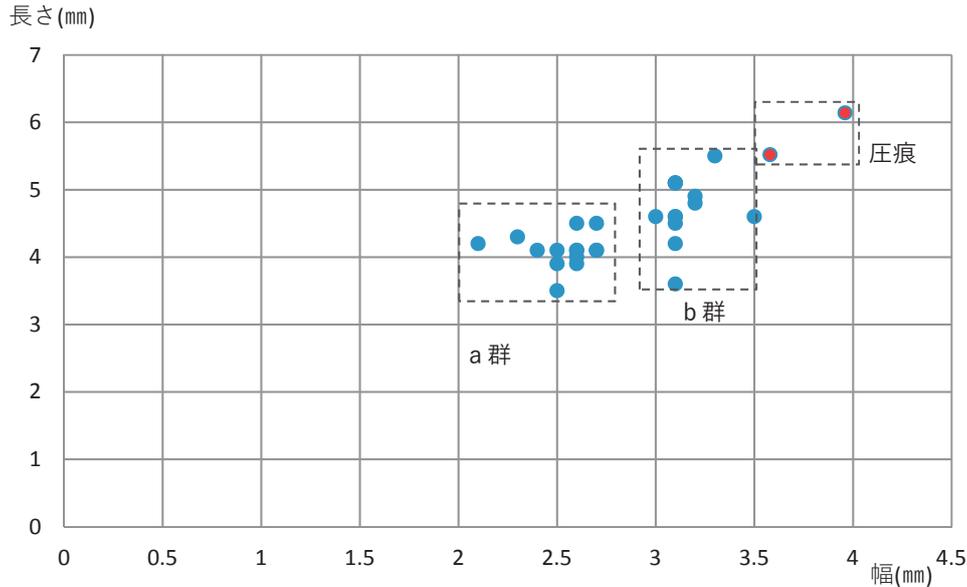
2号クミ塚出土ダイズ属圧痕土器（右は圧痕の走査型電子顕微鏡写真 山本華撮影）

第342図 土器の圧痕に残されたマメ類

このほか、第4次調査区では炭化アズキ垂属種子が現場取り上げの15点と水洗選別で抽出された12点を合わせて27点が検出されている。第343図は山本華氏等が計測した炭化アズキ垂属種子と圧痕のアズキ垂属種子のデータを基に、長さとの幅の相関で大きさの分布を示したものである。これによると、炭化アズキ垂属の長さは3.5～5.5mmまで連続的に分布するが、長さが4mm付近で幅が2.2～2.7mmのグループ（a群）と長さが4.3mm付近で幅が3.0～3.5mmのグループ（b群）に分けることができ、a群は幅の広いタイプでb群は幅の狭いタイプである。

ちなみに、市内で現生のヤブツルアズキの熟した種子を採集し、燃焼実験を行ったところ、炭化アズキの特徴は長さが平均で6%、幅は7%膨張し、厚さは5%縮小するという結果であった。このため、炭化アズキの形態は長さよりも値の小さい幅が膨張し、幅よりも値の大きい厚みが収縮することで、両者の値が近づき、より俵形に近くなるのが特徴である。

また、第343図の規模の大きな2点（赤点）は、勝坂Ⅲ式土器で確認した圧痕の計測値を示したもので、明らかに炭化アズキ垂属種子よりも大型である。ただし、やはり市内で採集した現生の熟したヤブツルアズ



※ 赤点は圧痕のアズキ亜属

第343図 アズキ亜属の炭化種子と圧痕の長さとの分布

キの水漬けまたは煮沸による膨張率を実験したところ、ともに長さの平均が約1.4倍となることが明らかとなっている。このため、仮に圧痕内のアズキ亜属種子が土器内の水分を含んで膨張していた場合、膨張率の1.4を割り返すと、長さは4.39mmと3.94mmという値となる。さらに土器焼成時の収縮分を補正（112%）すると（中山2015）4.92mm、4.42mmとなり、グラフ中の炭化アズキ亜属種子b群の値に近似するといえる。このため、この圧痕が特に大きな種子を選別されたと考えるよりは、圧痕内のアズキ亜属は水分を含んで膨張した個体であった可能性があるともみてよいであろう。

いずれにしても、これらに結果から縄文中期段階では、本遺跡のダイズ属では栽培化が進んでいた状況が、アズキ亜属ではダイズ属ほど大型化の傾向が顕著でないことがわかる。

#### ④ ベリー類の利用

##### a クルミ塚出土のベリー類

第4次調査区における中期の遺構のうち、とくに注目すべき遺構は6基のクルミ塚で、すでにクルミ塚出土のクルミ核については若干の検討を加えてきた。そこで指摘したとおり、クルミ塚ではクルミ核が可視的に目立つため、便宜的に「クルミ塚」と称するが、実はクルミ核以外に微細な植物遺体や土器等の遺物を多く含んでいる。第VI章第4節（1）で示したように、クルミ塚の覆土を水洗選別したところ、ベリー類の液果を多く含んでいた。ここではまず、佐々木由香氏・山本華氏が作成した第47表（山本他2017）を基に検討を進めたい。

この表によれば、縄文人が有用利用したと考えられるベリー類の種実は、キハダ・ブドウ属・コウゾ属・ニワトコ・クワ属・マタタビ属の6分類群、その他に有用利用または栽培したと想定されるものにアズキ亜属・シソ属・エゴマの3分類群が認められ、ここではオニグルミを加えたこれら10分類群を対象とする。

分析試料はクルミ塚中の堆積物を300ccの単位ごとに水洗選別したもので、第47表の数値は分析試料をクルミ塚ごとに合算している。これら有用植物のうち、最も多く検出されたのはコウゾ属の367点で、クワ属302点、ニワトコ223点、マタタビ属216点、キハダ211点と続き、この5分類群が突出して多い傾向を示す。

第47表 クルミ塚から出土した大型植物遺体

(佐々木・山本2017より抜粋)

分類群		遺構	1号クルミ塚	2号クルミ塚	3号クルミ塚	4号クルミ塚	5号クルミ塚	6号クルミ塚	
		時期	加曾利 EⅢ	加曾利 EⅡ	加曾利 EⅢ	加曾利 EⅢ	加曾利 EⅢ	勝坂Ⅱ-加曾利 EⅡ	
		水洗量	1,200cc	1,500cc	600cc	900cc	1,200cc	900cc	
1	木本	オニグルミ	核・炭化核	(72)	(70)	(13)	(310)	(293)	(23)
2		キハダ	種子	11 (16)	14 (12)	8 (16)	19 (18)	24 (25)	22 (26)
3		ブドウ属	種子	2 (1)	2 (4)	(1)	1 (2)	2	7 (9)
4		コウゾ属	核	71 (20)	21 (9)	27 (17)	65 (29)	60 (32)	12 (4)
5		ニワトコ	核・炭化核	38 (6)	30 (12)	15 (3)	49 (13)	29 (13)	11 (4)
6		クワ属	核	20 (8)	17 (6)	33 (21)	76 (32)	22 (12)	30 (25)
7		マタタビ属	種子	21 (17)	15 (23)	15 (16)	19 (23)	10 (6)	32 (19)
8	草本 (栽培)	アズキ亜属	炭化種子	2 (1)	1 (4)	(1)	3 (3)	6 (7)	4 (1)
9		シソ属	果実・炭化	1 (1)	2 (1)			2	1
10		エゴマ	果実・炭化		1	1 (2)	1	6 (1)	5

このうち、コウゾ属・クワ属・ニワトコ・マタタビ属はベリー類、キハダは液果であるがアイヌでは香辛料等に利用されるものである（福岡1995）。

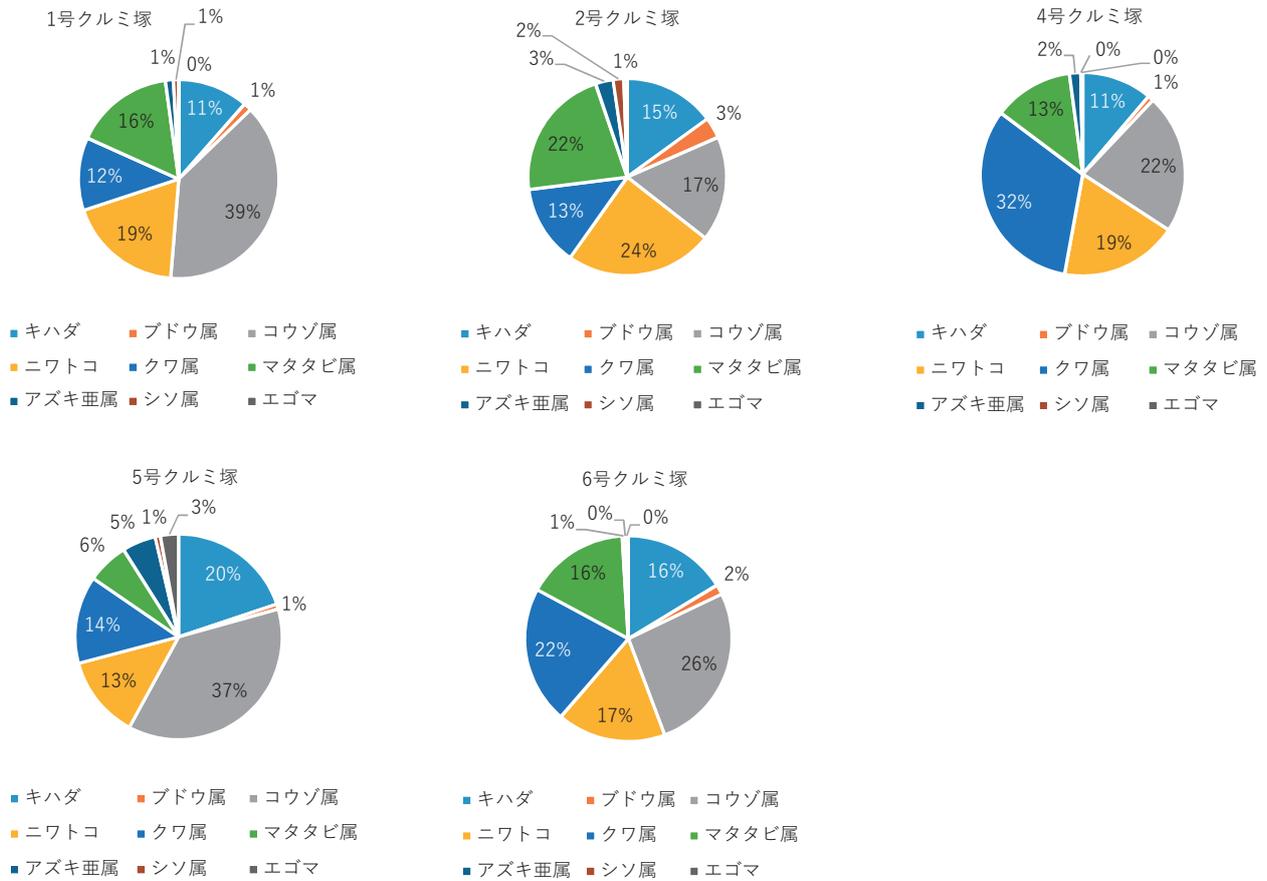
これら有用植物の比率をクルミ塚ごとに示すと第344図のようになる。クルミ塚ごとに比率は異なるが、いずれも上記の5分類群が多い傾向は変わらない。クルミ塚から出土しているこれらの種実類は、絶対数としては必ずしも多くなく、微細なものであるが、自然に紛れ込んだものではなく、意図的に持ち込まれたものと考えられる。

そこで、調査区中のクルミ塚とその周辺の泥炭層中の主な植物遺体の構成を比較することにした。第345図は3号クルミ塚及びこれと同時期で土器等を多く含むⅡb層（No.1018・1019）を比較したものである。これによると3号クルミ塚ではやはりクワ属・コウゾ属等の5分類群が多いのに対し、Ⅱb層ではこの5分類群が少なく、湿生植物のホタルイ属・ポントクタデが多いという傾向を示しており、クルミ塚との差異が認められる。このため、クルミ塚はクルミ核とともに微細な有用植物を人為的に持ち込んで形成したものと判断することができよう。

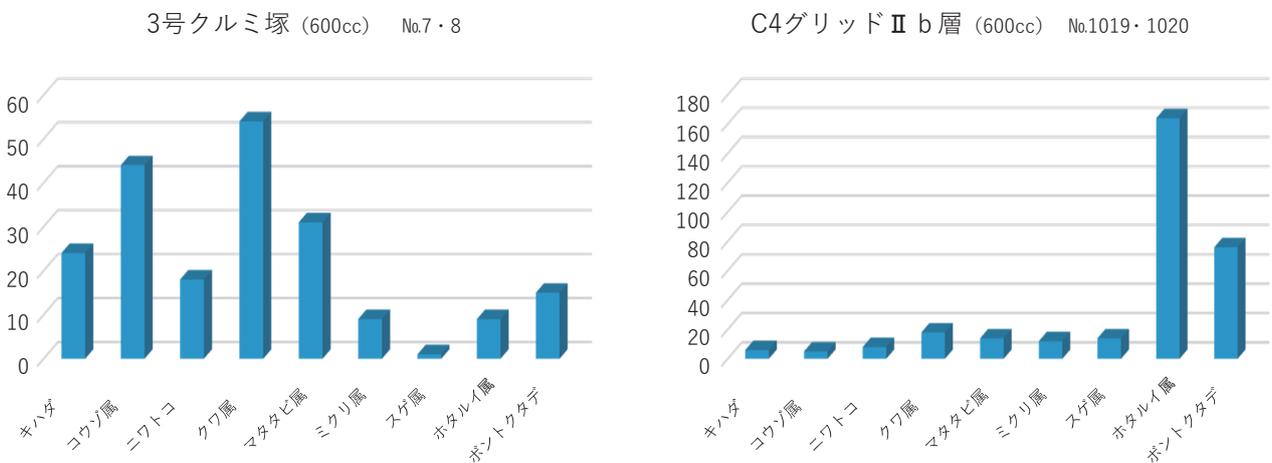
次にクルミ塚に含まれる有用植物の利用時期やクルミ塚の形成時期を考えるため、上記10分類群の花期と結実時期を第346図に示してみた。これによると、ニワトコ・コウゾ属・クワ属の3分類群は花期が4月～5月、結実期が6月～7月であり、マタタビ属・キハダ・ブドウ属・オニグルミは開花期が5月～7月、結実期は9月～11月、エゴマ・シソ属・アズキ亜属は花期が8月～9月で結実期が9月～10月となる。

したがって、これら有用植物の結実時期は6月～7月の梅雨から夏期と9月～11月の秋期のという2時期に分かれることになる。クルミ塚が夏期と秋期の2段階を経て形成されたのか、ベリー類の核等が保存され、秋期の1時期に形成されたかどうかは残念ながら堆積物の産状が不明のため推定できない。ただし、先にみた湿生植物のポントクタデがクルミ塚にも混入していることを注視すれば、この結実期が10月頃であるため、クルミ塚の主体たる形成時期が10月～11月頃であったものと想定してよいと考える。

なお、これらの果実については、参考として第347図に現生の写真を示した。



第344図 クルミ塚別有用植物の比率



第345図 3号クルミ塚及びIIb層中の植物遺体

No.	種 実	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1	ニワトコ				■	■							
	花期				■	■							
2	コウゾ属 (ヒメコウゾ)				■	■							
	花期				■	■							
3	クワ属 (ヤマグワ)				■	■							
	花期				■	■							
4	マタタビ属 (サルナシ・マタタビ)					■	■						
	花期					■	■						
5	キハダ						■	■					
	花期						■	■					
6	ブドウ属 (ヤマブドウ)							■	■				
	花期							■	■				
7	オニグルミ						■	■					
	花期						■	■					
8	エゴマ								■	■			
	花期								■	■			
9	シソ属 (シソ)								■	■			
	花期								■	■			
10	アズキ亜属 (ヤブツルアズキ)								■	■			
	花期								■	■			

第346図 クルミ塚出土の有用植物カレンダー



ニワトコ



ヒメコウゾ



ヤマグワ



サルナシ



マタタビ



キハダ



ヤマブドウ



オニグルミ



ヤブツルアズキ

第347図 クルミ塚出土の有用植物（現生の果実等）

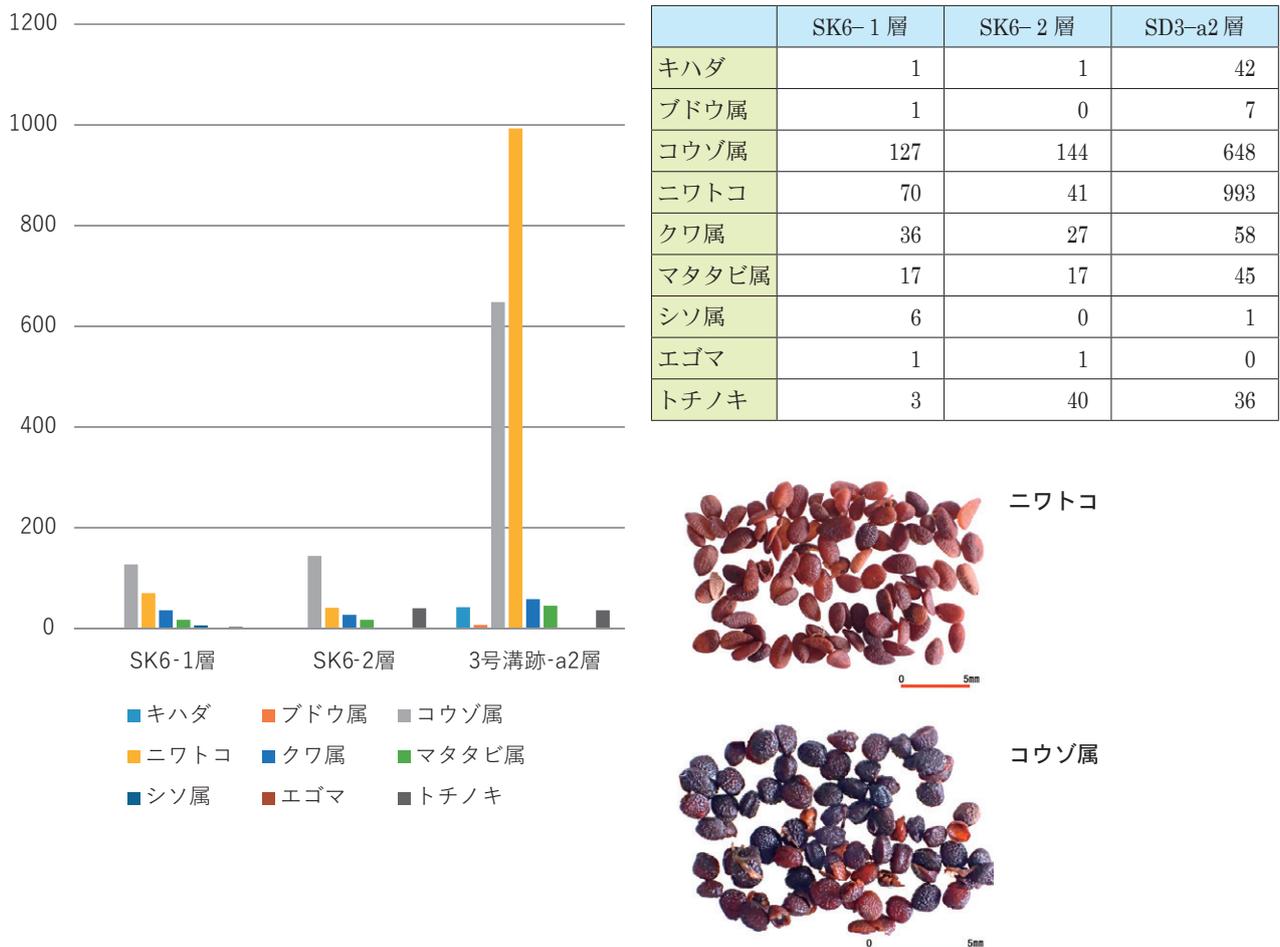
b 縄文時代後期の遺構とベリー類

縄文後期の遺構から検出された種実類についても示しておきたい。対象とする遺構は6号土坑と3号溝跡である。後期の遺構が中期の遺構と異なる点は、トチノキの種皮が多く含まれることである。

第348図に示すように、6号土坑の1層・2層ではコウゾ属、ニワトコ、クワ属の順で有用植物が多く検出され、中期と同じくマタタビ属、キハダ、アズキ亜属、エゴマ等が少量ながら含まれる。ちなみに6号土坑は年代測定で堀之内I式期に比定されている（工藤2017）。

また、トチ塚に接する3号溝跡の最下層（a2層）は年代測定で堀之内II式期に比定され、この層では300ccの堆積物中にニワトコが993粒、コウゾ属が648粒も含まれていた。以下はクワ属58粒、マタタビ属45粒、キハダ42粒と続き、検出量の多い上位の5分類群は中期と同傾向を示すが、a2層中ではとくにニワトコとコウゾ属が突出している。6号土坑等でもこの2分類群が多いことから、後期の堆積物中においては、ベリー類の中でもこのニワトコとコウゾ属の2分類群がとくに多い傾向を示しているといえよう。

a2層中におけるニワトコとコウゾ属の集中度は突出している。3号溝跡の他の層位でもこの2分類群が多い傾向を示すが、これほどの集中は認められない。このため、a2層中の事例は、ニワトコとコウゾ属のベリー類をシロップや酒等に利用した後、その残滓を溝に一括して廃棄した状況が想定できるであろう。



第348図 6号土坑・3号溝跡 a2層出土の有用植物（300ccごと）

### (3) 遺跡周辺の植生と植物利用

ここまで、第4次調査区の各種試料の分析結果をもとに、デーノタメ遺跡周辺における植生環境と縄文人の植物利用について概観してきた。①花粉分析、②樹種分析、③大型植物遺体分析、④土器圧痕分析の結果は、その試料と分析方法の特性によって少しずつ異なるが、複数のチャンネルによる分析は集落周辺の植生や縄文人の生業にかかわる情報をより豊かにするものといえる。

①～④の調査によって明らかになった植物分類群は147分類群に及ぶ。花粉分析は当時の集落周辺の台地や低地の植生を示し、樹種分析では縄文人が利用した樹木や集落周辺の木本類を、大型植物遺体分析では縄文人が食料とした木本類や草本類、または集落周辺の植物相を詳細に示している。また、土器圧痕分析では人の生活により密着した有用植物の存在を顕著に示すものであろう。

上記の147分類群のうち、集落または集落後背地に生育していた木本類等を環境別に整理すると次のようになるであろう。

#### 台地上（集落付近）

高木：クリ・ウルシ・ムクロジ・キハダ・トネリコ属（シオジ節・トネリコ節）サクラ属・ケンボナシ・カエデ属（イタヤカエデ・ミツデカエデ）・エノキ属・ムクノキ属（ムクノキ）・ナラガシワ・アカメガシワ・コブシ・イイギリ・ニガキ・ハクウンボク

小高木・低木：サンショウ・イヌザンショウ・カラスザンショウ・ツクバネウツギ属・ウコギ・タラノキ・イボタノキ属・ニシキギ属・ハリギリ・オオカメノキ・ミツバウツギ・

#### 台地縁（集落付近）※台地上の集落付近の林縁を含む

高木：トチノキ・ミズキ・クマノミズキ

小高木・低木：クワ属・ニワトコ・コウゾ属（ヒメコウゾ）・カマツカ・キイチゴ属・クマヤナギ・ナシ亜科・ムラサキシキブ属・クサギ

つる性：マタタビ属・ブドウ属・フジ・ツルマサキ

#### 台地上（後背地）

高木：イヌガヤ・アカガシ亜属・コナラ節（コナラ）・クヌギ節・サクラ節・ニレ属・ケヤキ属・カバノキ属・クマシデ属・ブナ属

#### 低地（集落下）

高木：クルミ属（オニグルミ・ヒメグルミ）・サワグルミ属（サワグルミ）・ハンノキ節

また、147分類群のうち、とくに縄文人が利用したと想定される植物群は、第48表に示す50分類群が想定できる。縄文人はこうした植物群を集落の周辺に意図的、計画的に配してその植物の性質や利用形態に応じた管理を行っていたと考えられる。もっとも、この50分類群は第4次調査区の試料分析によって明らかになったもので、当然のことながら、縄文人はこれ以外にも多くの植物資源を利用していたはずである。

なお、昆虫相を分析した森勇一氏の分析によれば、縄文時代中・後期を通じてコガネムシ科のヒメコガネとコアオハナムグリが多産していた状況を明らかにし、遺跡周辺が「縄文里山」というべき環境にあったと指摘している（第Ⅶ章第7節）。ヒメコガネはダイズを食害する害虫として知られ、英名を *soy bean beetle*、つまりダイズのカブトムシという名をもつ。このコガネムシはマメ類以外にもブドウやクリの葉も食害するため、本種の多産は集落周辺における縄文人のマメ栽培やクリ、ヤマブドウ等の積極的な植生管理を反映したものとイえる可能性がある。

第48表 デーノタメ遺跡周辺の有用植物一覧

	No.	花粉分析	樹種分析		植物遺体分析		圧痕分析
			自然木	加工木	水洗選別	現場取り上げ	
木 本 植 物	1			イヌガヤ			
	2				ブドウ属	ブドウ属	
	3			サクラ属			
	4				サクラ属サクラ節	サクラ属サクラ節	
	5				キイチゴ属	キイチゴ属	
	6			カマツカ			
	7		ナシ亜科		ナシ亜科		
	8			ケンボナシ属			
	9	ニレ属・ケヤキ属		ニレ属			
	10				クマヤナギ属	クマヤナギ属	
	11	エノキ属・ムクノキ属		エノキ属			エノキ属
	12				ヒメコウゾ		
	13				コウゾ属	コウゾ属	
	14			クワ属	クワ属	クワ属	
	15	アカガシ亜属					
	16	クリ属		クリ	クリ	クリ	
	17	コナラ亜属		コナラ属クヌギ節			
	18					ナラガシワ	
	19				コナラ		
	20			コナラ属コナラ節	コナラ属コナラ節	コナラ属コナラ節	コナラ属コナラ節
	21					コナラ属	
	22			オニグルミ	オニグルミ	オニグルミ	
	23	クルミ属					
	24			ヌルデ	ウルシ属-ヌルデ	ウルシ属-ヌルデ	
	25	ウルシ属		ウルシ			
	26	カエデ属		カエデ属			
	27				ミツデカエデ		
	28				イタヤカエデ	イタヤカエデ	
	29	トチノキ属		トチノキ	トチノキ	トチノキ	
	30	キハダ属	キハダ		キハダ	キハダ	キハダ
	31				サンショウ	サンショウ	
	32				サンショウ属		
	33		ミズキ		ミズキ	ミズキ	ミズキ
	34		クマノミズキ類		クマノミズキ	クマノミズキ	
	35			マタタビ属	マタタビ属	マタタビ属	
	36			トネリコ属シオジ節			
	37		ニワトコ		ニワトコ	ニワトコ	ニワトコ
	38				タラノキ	タラノキ	
草 本 植 物	39			コウホネ			
	40			ダイズ属		ダイズ属	
	41			ササゲ属アズキ亜属	ササゲ属アズキ亜属	ササゲ属アズキ亜属	
	42			マメ科			
	43			アサ			
	44			カラムシ属	カラムシ属		
	45			ヒシ属	ヒシ属		
	46			エゴマ	エゴマ		
	47			シソ属	シソ属	シソ属	
胞 子	49	ハナヤスリ亜科					
	50	ゼンマイ属					

最後に検討の過程で疑問となったいくつかの点を述べておきたい。水洗選別された植物分類群中ではイタヤカエデとミツデカエデの種子が確認されている。カエデ属は調査区出土の自然木と加工木の分析においてクリとともに出土数が多く、本遺跡の特色といえるが、水洗選別では上記の2種を含んでいた。カエデ属は陽樹で成長が早く、更新が容易な材として利用されていたのであろう。また、東北のマタギやアイヌの事例では、カエデの樹液利用がよく知られている。樹液は寒暖差が大きい1月～3月の初春に採取するといひ、カエデ属のうちイタヤカエデの樹液は他のカエデ類と比較して糖分、カリウム、カルシウム等の成分が最も多いという<sup>(18)</sup>。資源を多角的に利用する縄文人であれば、貴重な糖分の確保のためにカエデの樹液を利用していた可能性は高いと考える。

同じく糖分の確保として想定できるはトチノキを蜜源とする蜂蜜の利用である。トチノキは在来の蜜源樹としては質、量ともに優れ、糖度は77%以上で独特の香りがあるという(星崎2009)。縄文後期におけるトチノキの拡大に伴い、ミツバチの利用を行っていた可能性についても検討の余地はあろう。

また、水洗選別で抽出された種実のうち、コウゾ属はコウゾとヒメコウゾ、クワ属はヤマグワ、マタタビ属はマタタビとサルナシ、キイチゴ属は多様なキイチゴ類の利用を想定できるが、今後はこれら属レベルの分類から種レベルの分類の可能性についても検討していくことが求められる。



第349図 1号木組遺構

## 第5節 今後の課題と活用に向けて

### (1) 遺跡の特色と今後の課題

デーノタメ遺跡は縄文時代中・後期の集落遺跡で、集落の全体が良好に遺存している（第350図）。また、集落の規模が大きく、集落が利用していた水辺の活動空間が台地下の低地に遺存していることが大きな特色である。この低地遺跡では多量の漆塗土器や植物遺体が狭小な調査区から濃密に出土し、当時の環境や縄文人の漆工技術、食の実態にせまる重要な情報が得られている。

こうした遺跡の主な特徴と歴史的な価値は以下ようになる。

- ① 縄文時代中・後期集落の規模が大きく、遺存状況が良好である。
- ② 集落が縄文時代中期中葉から後期中葉まで、約1,200年間にわたって営まれた。
- ③ 生業活動を行った台地下の低地遺跡が良好に遺存し、その構造がわかる。
- ④ 縄文時代中期～後期の環境や資源利用とその変化がわかる。
- ⑤ クルミ、トチノキ、ベリー類等、有用な植物遺体の情報が豊富で、当時の食がわかる。
- ⑥ 漆塗土器を始めとする漆製品の情報が豊富で、当時の漆工技術がわかる。

これら6項目の特色は、①の大規模であるという条件を除けば、縄文時代中・後期の集落遺跡が本来有していた要素といえるが、これらが総体として遺存している遺跡は関東地方ではほとんど残されていない。本遺跡が首都圏の住宅都市に位置するという点からみても、極めて稀有な事例といえよう。

現在、本遺跡の面積である約6haのうち、これまでに行われた発掘調査は全体の約6%にとどまっており、遺跡の遺存状況が良好な半面、その構造等については不明な点が少なくなかった。このため、文化庁及び埼玉県教育委員会の指導とともに、平成28年度からデーノタメ遺跡調査指導員会を組織し、専門委員会や毎年度ごとの内容確認調査を実施することで集落の規模、構造、変遷を明らかにしてきたが、今後も同様の調査を継続していく必要がある。

また、本遺跡を特色づける台地下の低地には、縄文時代中・後期の泥炭層中に当時の生活面が遺存している。現状ではUR北本団地の造成によって低地の大半は埋め立てられているが、平成30年度に実施した第4次調査区周辺のボーリング調査では、いずれも泥炭層が良好に遺存しており、今後も泥炭層の範囲と遺存状況、その時期等について明らかにしていく必要がある。

なお、デーノタメ遺跡の位置する江川流域では、至近に諏訪野遺跡、高井遺跡、中井遺跡という縄文時代中期の200m級の大環状集落が連綿と分布する。とくにデーノタメ遺跡、諏訪野遺跡、高井遺跡の3集落は2km圏内に同時併存しており、縄文時代中期の江川流域が、注目すべき歴史的環境にあったことがうかがえる。とくにデーノタメ遺跡と諏訪野遺跡は江川を挟んで0.9kmの距離で対峙し、やや距離の離れた「双環状」ともいえる位置関係にあり、これら拠点集落間の社会的関係や資源利用、領域の問題等を遺跡間の比較によって明らかにしていくことも課題である。

こうした調査上の課題のほか、遺跡の保存と活用について地域住民の理解を得るため、啓発事業を推進することも重要な課題である。これまで、本遺跡



第350図 デーノタメ遺跡の景観

の調査成果については、市広報による特集記事、市役所ロビーにおけるスポット展示とリーフレットの配布、地域の要望に応える出前講座のほか、シンポジウム、現地説明会等の開催をつうじて発信してきた。とくに北本市文化センターホールを会場に実施したシンポジウム「デーノタメ遺跡が拓く縄文の世界Ⅰ」の第1回目では（平成28年度）、実に810人の参加者があり、会場は大変な熱気に包まれた。同時に開催し、約1,500人が観覧した「デーノタメ遺跡出土品展」と合わせ、遺跡の概要について広く周知できたといえる。翌年度の第2回では「縄文時代の環境と食」をテーマに開催し、550人の参加者があり、同時開催の出土品展ともども多くの観覧があった（文化庁補助事業）。また、2回のシンポジウムの開催に合わせて資料集2冊、リーフレットを作成し、市内の各小・中学校へ配布している。

シンポジウムの参加者のアンケートによると、市民は59.3%、市外が40.7%、県外の方が7.4%という結果で、市民の関心の高さとともに県外の反響も認めることができた。第2回目のシンポジウム（平成29年度）の参加者もほぼ同じ傾向であり、参加者のコメント欄では「デーノタメ遺跡を教育、生活の中で活用することで、より豊かな市民生活につながる」「観光資源としての有効活用を期待する」等の意見が出されている。

今後もこうした啓発活動を継続し、遺跡の成果と魅力について発信することにより、遺跡の保存と活用について地域住民を始めとする多くの人々に理解を求めていく必要がある。



第351図 第2回シンポジウムの様子

## （2）遺跡の保存と活用に向けて

現在、デーノタメ遺跡の大半は雑木林、屋敷林、竹林に広く覆われている。芽吹きの際には林縁でクサイチゴやニワトコが白い花を咲かせ、調査区の跡地にはコゴミがあちらこちらで顔を出す。雑木林はコナラ、クリ、クヌギ等で構成され、遺跡を取り巻く環境はまさに縄文の森を彷彿とさせるものがある。ただし、これらの植生はこれまでの調査で明らかになってきた縄文時代中・後期の植生とは異なる部分が少なくない。

当時は集落の周囲にクリが卓越し、ウルシが管理され、後期にはトチノキが拡大しており、周辺にはナラガシワ、キハダ、イタヤカエデなどの落葉広葉樹林が覆っていた。また、低地にはオニグルミの林が広がり、明るい林縁にはニワトコ、ヒメコウゾ、ヤマグワ等の低木が、さらにヤマブドウやサルナシ等のつる植物が絡んでおり、集落の周囲は縄文人が利用する有用植物によってはるかに豊かであったと想定される。

このため、遺跡の保存・整備にあたっては、花粉分析や木材、植物遺体等のデータに基づき、当時の「縄文の森」を復元していくことが求められる。台地上の竹林のエリアにはクリ、キハダ、段丘状の低位面のオープンスペースにはトチノキ、ニワトコ、低地にはオニグルミ等を配置し、デーノタメの湧水点付近にはヒシやヒルムシロが浮かぶ開水面を造成するイメージである。

また、台地上の一部にはウルシを植栽し、育成から漆掻きに至る一連の管理や、堅果類やベリー類についても栽培・管理を行い、縄文人の生業活動を知的リクリエーションとして事業化し、森の保全と活性化を行っていくことは管理者と参加者双方に効果のあるものと期待される。とくに堅果類やベリー類、栽培したマメ類などを収穫し、これらを加工して味わう「食」をテーマとした事業は、魅力的なものになるであろう。

こうした森の再生事業と合わせ、森の中の集落エリアでは住居跡の復元も有効な手法である。史跡という

日常とは異なる空間に立ち、縄文時代の生活を疑似体験することで、来訪者には学びと発見の喜び、癒しを提供することが期待できる。さらに定期に行うイベント（まつり）は市内外の交流を生み出し、まちの活性化につながるものである。これは先進地の多くの史跡が実証しているところであろう。

史跡におけるこうした学習活動やイベントは、参加者が遺跡の重要性や魅力を知り、遺跡の保存・活用を理解していくことにもつながっていく。それは史跡がこれまで果たしてきた教育や観光的な面での役割といえるが、今後はこれにとどまらず、産業や福祉、人口減少等の問題にも史跡が向き合い、まちづくりの核として地域にどう貢献できるのかが求められている。

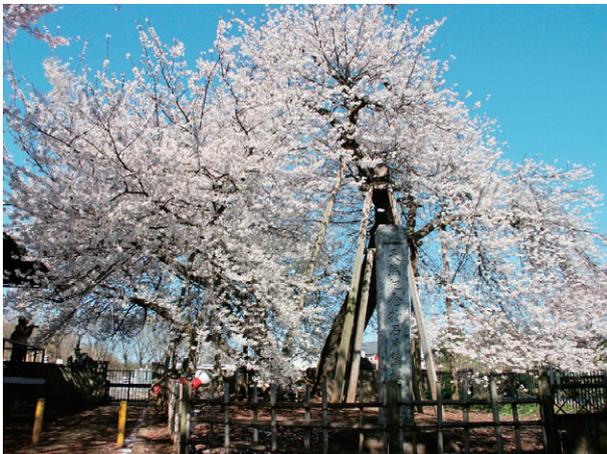
本遺跡の保存・活用に向けた方針は、地権者を始めとする地域住民の意見が十分に反映されるよう努めることを前提とし、その要点は次のようになる。

- 1) 北本市の歴史的遺産として将来に伝えていくため、遺跡の保存・活用・整備を進める。
- 2) 保存にあたってはできる限り遺跡の範囲を確保する。
- 3) 整備にあたっては現在の森を活かしつつ、縄文の森を復元する。
- 4) 活用にあたっては縄文時代の生活を体験・学習できるものとするほか、さまざまな文化活動の拠点とする。
- 5) 史跡内の緑地、広場を地域住民の憩いの場とし、防災時の拠点とする。

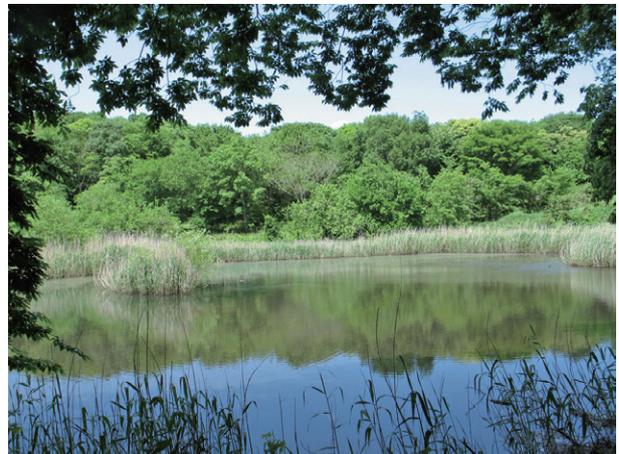
なお、デーノタメ遺跡は埼玉県の中央部に位置しており、都心からのアクセスが良い。公共交通を利用した場合、JR 高崎線で東京駅から北本駅までが約50分、駅からバスで約10分の距離にあり、バス停の目の前には遺跡が広がっている。また、自家用車を利用すると、現在では圏央道の開通により、東京駅から約1時間でアクセスできるようになった。県内はもとより、県外から来訪者を遺跡に呼び込むためには大きなアドバンテージになると考える。

また、市内に著名な観光資源は少ないが、国指定天然記念物の「石戸蒲ザクラ」、里山の自然を残す「埼玉県立北本自然観察公園」、東日本最大の「グリコピア・イースト」等が遺跡の東西に点在する。また、令和元年4月には県内では初の森林セラピー基地の認証を受け、北本自然観察公園内の遊歩道が森林セラピーロードとして設定されている。デーノタメ遺跡がこれらの観光資源と連携していくことも有効であろう。

デーノタメ遺跡を保存・活用していく上では、これを地域の貴重な文化遺産として位置づけ、文化活動の拠点及びまちづくりの核として、将来にわたって活かしていくことが必要である。そのためには、この遺跡を中心とするさまざまな活動を市民とともに進め、市民に愛され、誇りとなる遺跡となるよう努めていかなくてはならない。



第352図 国指定天然記念物「石戸蒲ザクラ」



第353図 埼玉県立北本自然観察公園

註

- (1) 現状では台地と低位面は低い崖線により区画されているが、平成30年度の内容確認調査において、低位面に台地から続くロームが埋没していることが明らかにされた。また、この埋没ロームを確認面として台地直下における住居跡が検出されている。
- (2) 墓坑として考えられる遺構は、第3次調査における90号土坑である。いわゆる伏鉢の形態で、1基のみの検出にとどまった。検出状態は勝坂期の住居跡に堆積した覆土を掘り込んで構築されていた。遺物は加曾利 EⅢ式期に帰属する。
- (3) 第4次調査において、Ⅲ層中から関山Ⅰ式～諸磯c式の土器片が少なからず検出されている。泥炭層中の昆虫遺体における年代測定でも諸磯c式期の年代が得られており、前期の遺構が遺存している可能性がある。
- (4) 第4次調査における水辺空間も中期集落と後期集落の共有がみられた。ただし、遺構、遺物群は圧倒的に中期に帰属するものが多く、後期の遺構群は1号木組遺構、3号溝跡、6号土坑等で、概ね台地直下の調査区南部に集中している。
- (5) デーナタメ遺跡内では加曾利 EⅣ式期～称名寺式期の住居跡は確認されていない。南側に隣接する榎戸遺跡では称名寺式期の住居群が検出されており、集落の移動を示唆するが、近年の内容確認調査では加曾利 EⅣ式期～称名寺式期の遺物が検出されており、遺構群が存在する可能性は高い。
- (6) 『デーノタメ遺跡概要調査報告書』（磯野他2017）において、諏訪野遺跡、高井遺跡との距離的に近接することを報告したが、江川下流域での中井遺跡においても大規模環状集落の調査報告がされており、今回考察に加えた。デーノタメ遺跡との距離は直線で約5kmである。
- (7) 高井東遺跡第2次調査にかかる発掘調査報告書では（橋本他1985）、調査区の南西約100mにおける試掘調査によって加曾利 EⅣ式期、称名寺式期の遺物の検出が報告されている。この地点で遺構群が確認できた場合、高井遺跡の集落が時期を追うごとに東側へ移動する傾向がうかがえる。
- (8) 将監塚遺跡、古井戸遺跡のさらに南西約500m地点では、両遺跡と同規模で同様の消長を示す「新宮遺跡」の存在も知られて、3つの環状集落が同一地点に集中する様相は注目される。
- (9) 上手遺跡は加曾利 EⅢ式期に発生し、後期中葉まで継続する。特に集落の最盛期は加曾利 EⅢ期式期～EⅣ式期であり、すでに見てきた中期の環状集落群の衰退期に集落が拡大する傾向が認められる。堀之内Ⅰ式期の住居跡中には主体部が直径10mを超えるものがある。
- (10) 加曾利 BⅡ式期を中心とした集落から南へ150mの位置で、加曾利 EⅡ式期～堀之内Ⅰ式期の小規模な集落が検出されている。また、赤城遺跡の窪地周辺においては安行Ⅰ～Ⅲc期の祭祀遺物が多数出土しているが、集落は検出されていない。
- (11) 大宮台地上で中期集落と後期集落が重複する遺跡はさいたま市の小室馬場山遺跡である。中期と後晩期に断絶期間が認められ、中期の集落域に後晩期の集落が新たに進出してきた状況がうかがえるが、継続性に乏しい。
- (12) 清水康守氏、小川政之氏の調査は内容確認調査Ⅲ区 F地点の調査中、平成30年11月21日に行われた。とくに基盤層である粘土質層について分析し、粘土層ではなく大里ローム層との結論が得られている。
- (13) クルミ塚のうち、2号クルミ塚から出土した土器は勝坂Ⅲ式土器が主体で、年代測定の加曾利 EⅡ式期とは年代的にずれがあった。その理由については今後も注意していきたい。
- (14) 花粉分析を行った3か所のうち、調査区南東部（E4グリッド）及び中央部（C4グリッド）の泥炭層はともに縄文時代中期に比定され、ほぼ同じ層序である。しかしながら、E5グリッドの泥炭層を年代測定したところ、その結果は出土遺物（勝坂Ⅲ式～加曾利 EⅡ式）よりも新しい傾向を示すものであった。そこで、さらにC4グリッドでも花粉分析と年代測定を追加したところ、泥炭層は前期諸磯式期～加曾利 EⅡ式期に比定され、出土遺物の時期とほぼ整合する結果となっている。したがって、調査区内の層序は一見安定してみえるが、実際には複雑な浸食と堆積を繰り返していたと想定され、その時期は縄文前期終末から中期後半に至る時間幅を有し、残留する土器の時期に限定されるものではないと理解される。
- (15) 市内のクルミ核の採集については、平成28年9月26日、埼玉県立北本自然観察公園の許可を得て目黒まゆみ・佐守志穂・磯野治司が行い、北本自然観察センターの高野徹、柳沼薫両氏にご協力いただいた。

- (16) 吉川昌伸氏が行った現生花粉の分布調査によると、クリ林では25mより内側で60%以上、林縁から25m以内で30%以上、林縁から20m離れると5%となるという。また、ウルシ林では花粉は樹幹直下に落下し、樹冠縁から10mで1%となり、トチノキ林では花粉は樹幹直下に落下し3~6mで10%、7.5~14mで1%になるという(吉川2019)。
- (17) 中井遺跡の上野真由美・佐々木由香の報告ではエゴマとシソ属を分類しているが、ここではデーノタメ遺跡の分類基準に合わせるためシソ属として扱っている。
- (18) 木山加奈子(2016)中の「秩父のカエデ樹液 いろいろベスト5」では、カエデ樹液の糖分、カリウム、カルシウムの量として埼玉大学総合研究機構化学分析支援センター(2013.3)の分析データを公開している。

#### 引用・参考文献

- 合田 明他(1980)「縄文時代の概観」『埼玉県史 史料編I』埼玉県
- 合田 明他(1985)「富士見市の主要な遺跡」『富士見市史 資料編2 考古』富士見市
- 赤石光資(1978)『秩父山遺跡』上尾市文化財調査報告第5集 上尾市教育委員会  
(1986)『雨沼I遺跡』上尾市文化財調査報告第27集 上尾市教育委員会  
(1988)『石神遺跡 山下遺跡 第1・2次調査』上尾市文化財調査報告第31集 上尾市教育委員会  
(1992)「上尾市の縄文時代」『上尾市史第1巻 資料編1 原始古代』上尾市教育委員会
- 新屋雅明(1988)『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第74集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 石塚和則(1986)『将監塚』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 磯野治司他(2017)『デーノタメ遺跡』北本市教育委員会文化財調査報告書第21集 北本市教育委員会
- 今井 堯他(1996)『西ノ原遺跡』大井町遺跡調査会調査報告第6集 大井町遺跡調査会
- 岩井昭子他(2013)『西原遺跡(第6地点)』さいたま市遺跡調査会報告書第101集 さいたま市遺跡調査会
- 植木 弘(1987)『嵐山町遺跡調査会報告3行司免遺跡—遺構図版編—』嵐山町遺跡調査会  
(1988)『嵐山町遺跡調査会報告4行司免遺跡—本文編—』嵐山町遺跡調査会  
(1988)『嵐山町遺跡調査会報告5行司免遺跡—遺物図版編—』嵐山町遺跡調査会
- 上野真由美他(2017)『中井遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第433集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 上野真由美・佐々木由香(2018)「中井遺跡における縄文中期の食用植物について—レプリカ法による土器種実圧痕の同定—」『研究紀要』第32号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 江原英他(1997)『栃木県埋蔵文化財調査報告200:寺野東遺跡5』栃木県教育委員会他
- 大屋道則他(2015)『清左衛門遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第416集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小葉一夫(1993)「縄文集落の変遷」『季刊考古学』第44号 雄山閣
- 金子直行(1987)『北・八幡谷・相野谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第66集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
(1997)『戸崎前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第187集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 金子直行他(2018)『大木戸遺跡III』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第444集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 金子直行・中山誠二・佐野 隆(2015)「ダイズ属の種子を混入した縄文土器—埼玉県和光市越後山遺跡出土の圧痕同定—」埼玉考古学会
- 木山加奈子(2016)『平成28年度特別展 現代有用植物展 くらしと植物のステキな関係』埼玉県立自然の博物館
- 工藤雄一郎他編(2014)『ここまでわかった! 縄文人の植物利用』新泉社
- 工藤雄一郎他(2017)「デーノタメ遺跡から出土した木材・大型植物遺体の14C年代測定」『デーノタメ遺跡—久保特定土地地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書—』北本市教育委員会
- 熊澤孝之(2011)『加能里遺跡第36次調査』岩沢北部土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1 飯能市教育委員会
- 佐々木保俊他(2009)『西原大塚遺跡I~III』志木市遺跡調査会調査報告第13集 志木市遺跡調査会
- 杉山和徳他(2013)『上小原遺跡(第1・2・3地点)』白岡市遺跡発掘調査報告書第22集 白岡市教育委員会
- 鈴木 茂(2015)「低湿地部ボーリング試料中の花粉化石」『勝坂遺跡有鹿谷地点—第85・89・105・106次発掘調査報告書—』相模原市教育委員会

- 須田大樹 (2018) 「関東地方におけるナラガシワの分布とその生育立地」『埼玉県立自然の博物館研究報告』No.12  
埼玉県立自然の博物館
- 田中義文 (2006) 「下宅部遺跡の土壌分析」『下宅部遺跡 I (1)』東村山市遺跡調査会他
- 谷井 彪 (1990) 「縄文時代」『朝霞市史 通史編』朝霞市
- 谷口康浩 (1993) 「縄文時代集落の領域」『季刊考古学』第44号 雄山閣
- 坪田幹男 (1990) 「縄文時代中期」『大井町史 資料編 I 原始・古代・中世』大井町
- 富田和夫他 (1989) 『中三谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第76集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中村誠二他 (2015) 『第1期確認調査報告書』国指定史跡真福寺貝塚総括報告書第1集 さいたま市教育委員会
- 中山誠二 (2015) 「縄文時代のダイズの栽培化と種子の形態分化」『植生史研究』第23号第2号 日本植生史学会
- 那須浩郎他 (2015) 「土器種実圧痕の焼成実験報告」『資源環境と人類』No.5 明治大学黒耀石研究センター
- 能城修一他 (2017) 「デーノタメ遺跡から出土した木材の樹種」『デーノタメ遺跡—久保特定土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書—』北本市教育委員会
- 野中和夫 (1992) 『丸山台遺跡群 I』和光市埋蔵文化財調査報告書第5集 和光市遺跡調査会 和光市教育委員会
- 橋本 勤 (1990) 『雅楽谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第93集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 橋本富夫他 (1985) 『高井東遺跡』桶川市埋蔵文化財調査報告書第15集 桶川市教育委員会
- 橋本富夫他 (1986) 「高井東遺跡第4次発掘調査」『昭和61年桶川市遺跡群発掘調査報告書』桶川市教育委員会
- 早川智明他 (1987) 「縄文時代」『所沢市史 原始・古代史料』所沢市
- 平田一乗 (2007) 『市内遺跡調査報告13』所沢市埋蔵文化財調査報告書第40集 所沢市教育委員会
- 福岡イト子 (1995) 『アイヌ植物誌』草風館
- 保坂康夫・野代幸和他 (2008) 「山梨県酒呑場遺跡の縄文時代中期の栽培ダイズ *Glycinemax*」『研究紀要』24 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 星崎和彦 (2009) 「トチノキ」『日本樹木誌』日本樹木誌編集委員会
- 細田 勝 (1985) 『原・丸山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第42集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮井英一 (1989) 『古井戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 宮崎朝雄他 (1986) 「縄文時代」『川口市史第1巻 考古編』川口市
- 村上達哉他 (2001) 『落合上ノ台遺跡第1次調査』医療法人くすの木会飯能ホスピタル地内埋蔵文化財調査報告書  
飯能市教育委員会
- 村田章人 (2003) 「縄文時代の伊奈」『伊奈町史第1巻 原始・古代・中世・近世』伊奈町教育委員会
- 村田章人他 (2007) 『後谷遺跡』第4次調査報告書 桶川市教育委員会
- 目黒まゆ美他 (2017) 「植物遺体」『デーノタメ遺跡—久保特定土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書—』北本市教育委員会
- 森 将志 (2015) 「南鴻沼遺跡の花粉分析」『南鴻沼遺跡』(第1分冊)さいたま市・さいたま市遺跡調査会
- 柳田博之 (2015) 『氷川神社遺跡』さいたま市遺跡調査会報告書第162集 さいたま市遺跡調査会
- 柳田博之他 (2015) 『馬場小室山遺跡 (第32次)』さいたま市遺跡調査会報告書第163集 さいたま市遺跡調査会
- 柳戸信吾他 (1999) 『大日向遺跡・八王子遺跡』飯能市日高ゴルフコース地内埋蔵文化財調査報告書 飯能市教育委員会
- 山田洋一他 (1988) 『下加遺跡』大宮市遺跡調査会報告第21集 大宮市遺跡調査会
- 山本 華他 (2017) 「クルミ塚から出土した大型植物遺体」『デーノタメ遺跡—久保特定土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書—』北本市教育委員会
- 吉川國男 (1990) 「縄文海進と桶川」『桶川市史第1巻 通史編』桶川市
- 吉川昌伸 (2008) 「東北地方の縄文時代中期から後期の植生トチノキ林の形成」『環境文化史研究』環境文化史研究会
- 吉川昌伸 (2019) 「花粉散布距離の推定からわかったこと」『季刊考古学』第145号 雄山閣
- 渡辺清志 (2014) 『諏訪野遺跡 I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第410集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団